

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2020年6月25日
【事業年度】	第76期(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
【会社名】	株式会社プロネクス
【英訳名】	PRONEXUS INC.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 上野 剛史
【本店の所在の場所】	東京都港区海岸一丁目2番20号
【電話番号】	(03)5777-3111(代表)
【事務連絡者氏名】	取締役執行役員社長室長 大和田 雅博
【最寄りの連絡場所】	東京都港区海岸一丁目2番20号
【電話番号】	(03)5777-3111(代表)
【事務連絡者氏名】	取締役執行役員社長室長 大和田 雅博
【縦覧に供する場所】	株式会社プロネクス大阪支店 (大阪市中央区北浜一丁目8番16号) 株式会社プロネクス名古屋支店 (名古屋市中区栄三丁目8番20号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

## 第一部【企業情報】

### 第1【企業の概況】

#### 1【主要な経営指標等の推移】

##### (1) 連結経営指標等

回次	国際会計基準		
	移行日	第75期	第76期
決算年月	2018年 4月1日	2019年3月	2020年3月
売上収益 (千円)	-	23,157,864	24,446,337
税引前利益 (千円)	-	2,714,761	2,729,463
親会社の所有者に帰属する 当期利益 (千円)	-	1,834,652	1,846,291
親会社の所有者に帰属する 当期包括利益 (千円)	-	1,597,606	1,836,615
親会社の所有者に帰属する 持分 (千円)	21,661,648	21,904,626	22,451,330
総資産額 (千円)	32,189,378	31,948,845	33,049,144
1株当たり親会社所有者帰属 持分 (円)	781.54	802.90	834.02
基本的1株当たり当期利益 (円)	-	66.29	68.53
希薄化後1株当たり当期利益 (円)	-	-	-
親会社所有者帰属持分比率 (%)	67.29	68.56	67.93
親会社所有者帰属持分当期 利益率 (%)	-	8.42	8.32
株価収益率 (倍)	-	18.48	15.21
営業活動による キャッシュ・フロー (千円)	-	2,886,299	4,172,217
投資活動による キャッシュ・フロー (千円)	-	1,279,003	1,715,883
財務活動による キャッシュ・フロー (千円)	-	2,327,829	2,435,760
現金及び現金同等物の 期末残高 (千円)	12,613,077	11,892,304	11,910,898
従業員数 (人)	1,074	1,194	1,304
[外、平均臨時雇用者数]	[330]	[277]	[325]

(注) 1. 売上収益には消費税等は含まれておりません。

2. 平均臨時雇用者数は、嘱託、パート、派遣及びアルバイトの年間平均人員数であります。

3. 希薄化後1株当たり当期利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

4. 第76期より国際会計基準(以下、「IFRS」)に基づいて連結財務諸表を作成しております。

回次	日本基準				
	第72期	第73期	第74期	第75期	第76期
決算年月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月	2020年3月
売上高 (千円)	20,971,428	21,556,446	22,454,801	23,157,864	24,446,337
営業利益 (千円)	2,226,331	2,362,980	2,536,962	2,499,420	2,571,558
経常利益 (千円)	2,255,576	2,548,811	2,889,426	2,772,515	2,717,834
親会社株主に帰属する当期純利益 (千円)	1,680,422	1,804,479	1,872,411	1,970,254	1,816,581
包括利益 (千円)	1,720,629	1,819,255	2,092,530	1,722,904	1,869,556
純資産額 (千円)	20,852,166	21,400,079	21,470,006	21,885,509	22,469,767
総資産額 (千円)	27,624,245	28,360,056	28,871,520	28,793,812	30,161,753
1株当たり純資産額 (円)	716.79	747.85	774.62	800.41	832.55
1株当たり当期純利益金額 (円)	56.28	62.12	66.32	71.19	67.43
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	75.5	75.5	74.4	75.8	74.3
自己資本利益率 (%)	8.1	8.5	8.7	9.1	8.2
株価収益率 (倍)	21.3	19.3	19.5	17.2	15.5
営業活動による キャッシュ・フロー (千円)	2,707,453	2,397,244	3,326,807	2,263,568	3,437,592
投資活動による キャッシュ・フロー (千円)	64,329	564,273	326,362	779,003	1,715,883
財務活動による キャッシュ・フロー (千円)	1,370,650	986,562	2,073,458	1,705,098	1,701,135
現金及び現金同等物の 期末残高 (千円)	11,854,876	12,687,910	13,613,077	13,392,304	13,410,898
従業員数 (人)	967	1,029	1,074	1,194	1,304
[外、平均臨時雇用者数]	[305]	[319]	[330]	[277]	[325]

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 平均臨時雇用者数は、嘱託、パート、派遣及びアルバイトの年間平均人員数であります。

3. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

4. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第75期の期首から適用しており、第74期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

5. 第76期の日本基準による諸数値につきましては、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査を受けておりません。

6. 当社グループは従来、千円未満を切捨てておりましたが、第75期より千円未満を四捨五入して記載しております。

**ポイント** 対前期増収・増益 ※売上収益過去最高を更新

(単位:百万円、%)

	2019/3期 実績 (IFRS)		2020/3期 実績 (IFRS)		対前期差異		公表予想 (日本基準)	公表差異 (IFRS-日本基準)
	金額	構成比	金額	構成比	金額	増減率		
売上収益	23,158	100.0	24,446	100.0	1,288	5.6	23,700	746
営業利益	2,466	10.6	2,600	10.6	134	5.4	2,550	50
税引前利益	2,715	11.7	2,729	11.2	15	0.5	2,650	79
親会社の所有者に 帰属する当期利益	1,835	7.9	1,846	7.6	12	0.6	1,830	16

**売上収益**



**営業利益**



**親会社の所有者に帰属する当期利益**



- (注) 1. 2020/3期 有価証券報告書より、従来の「日本基準」に替えて「国際会計基準 (IFRS)」を適用しております。また、前期比較として2019/3期のIFRSに準拠した諸数値も併記しています。  
2. 日本基準の「売上高」は「売上収益」、「親会社株主に帰属する当期純利益」は「親会社の所有者に帰属する当期利益」となります。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第72期	第73期	第74期	第75期	第76期
決算年月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月	2020年3月
売上高 (千円)	20,900,682	21,471,648	22,340,873	22,754,580	23,333,888
経常利益 (千円)	2,251,302	2,198,714	2,420,691	2,364,563	2,356,887
当期純利益 (千円)	1,698,640	1,635,601	1,806,281	1,669,838	1,609,191
資本金 (千円)	3,058,650	3,058,650	3,058,650	3,058,651	3,058,651
発行済株式総数 (株)	33,444,451	33,444,451	33,444,451	30,716,688	30,716,688
純資産額 (千円)	20,304,091	20,583,864	20,486,691	20,590,922	20,913,143
総資産額 (千円)	26,078,299	26,499,216	26,568,997	25,895,198	26,670,873
1株当たり純資産額 (円)	697.95	719.33	739.15	754.75	776.88
1株当たり配当額 (円)	23.00	24.00	28.00	30.00	30.00
(うち1株当たり中間配当額)	(12.00)	(11.00)	(13.00)	(15.00)	(15.00)
1株当たり当期純利益金額 (円)	56.89	56.31	63.98	60.33	59.73
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	77.9	77.7	77.1	79.5	78.4
自己資本利益率 (%)	8.4	8.0	8.8	8.1	7.8
株価収益率 (倍)	21.1	21.3	20.2	20.3	17.4
配当性向 (%)	40.4	42.6	43.8	49.7	50.2
従業員数 (人)	660	686	724	757	783
[外、平均臨時雇用者数]	[173]	[173]	[177]	[164]	[188]
株主総利回り (%)	150.1	153.3	168.1	163.2	144.4
(比較指標：配当込みTOPIX) (%)	(89.2)	(102.3)	(118.5)	(112.5)	(101.8)
最高株価 (円)	1,320	1,327	1,610	1,460	1,393
最低株価 (円)	747	915	1,205	901	853

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 平均臨時雇用者数は、嘱託、パート、派遣及びアルバイトの年間平均人員数であります。

3. 第72期事業年度の1株当たり配当額23.00円には、創業85周年記念配当3.00円が含まれております。

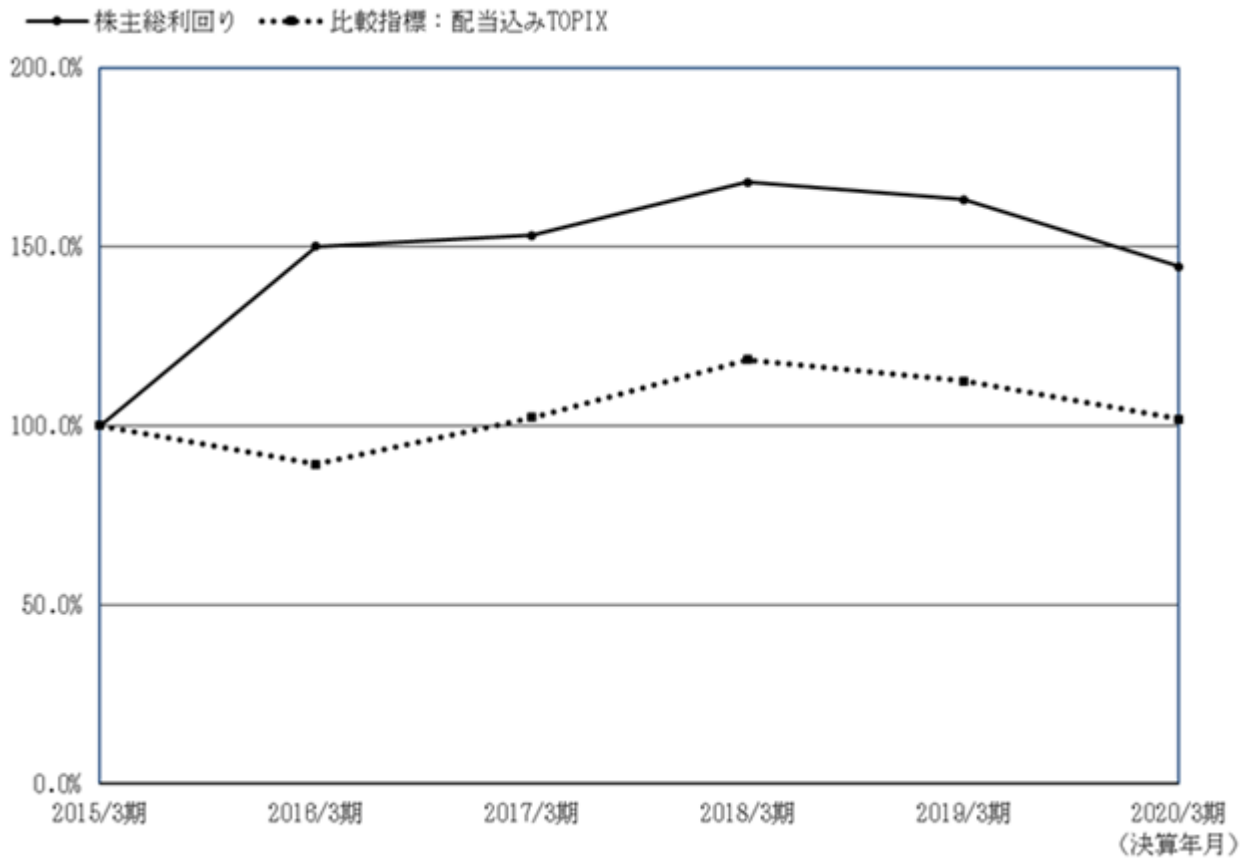
4. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

5. 最高株価及び最低株価は東京証券取引所(市場第一部)におけるものであります。

6. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第75期の期首から適用しており、第74期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

7. 当社は従来、千円未満を切捨てておりましたが、第75期より千円未満を四捨五入して記載しております。

8. 株主総利回り及び比較指標の最近5年間の推移は以下のとおりであります。



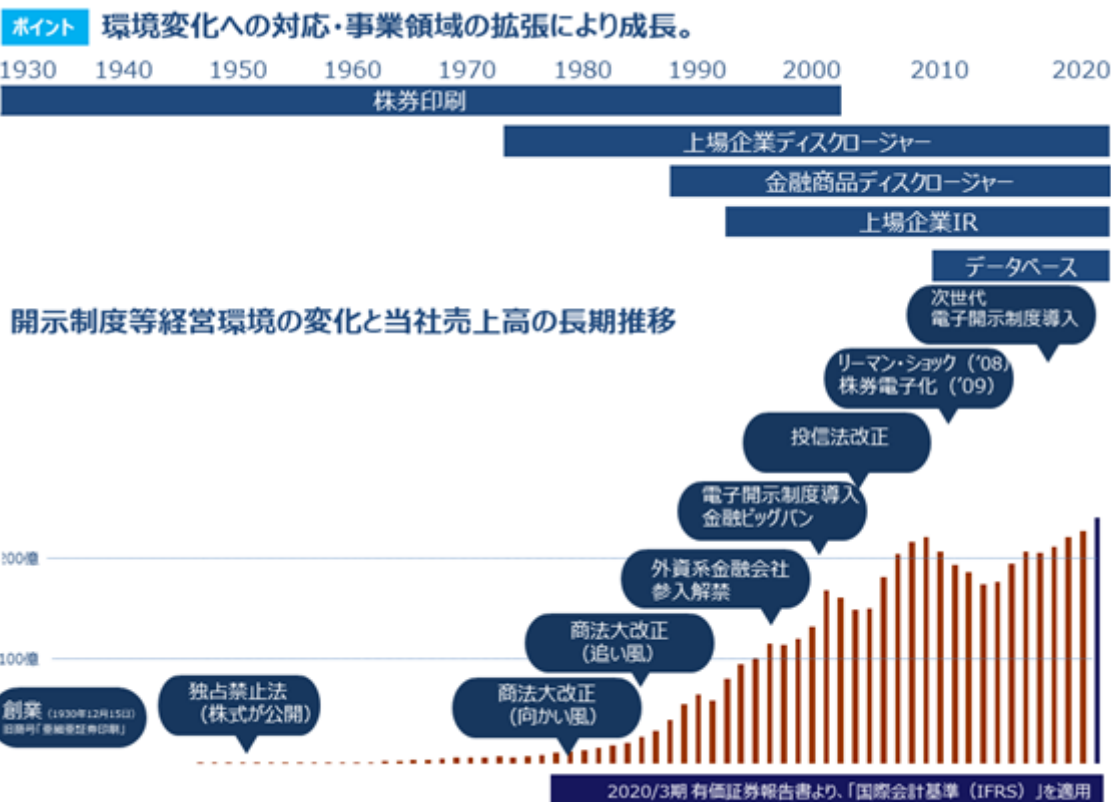
## 2【沿革】

1930年12月に証券の印刷を専門とする会社として、前身である亜細亜商會を創業いたしました。終戦後、事業の再興、発展を目指して1947年5月に亜細亜証券印刷株式会社を設立いたしました。その後の業容の拡大と発展を受け、2006年10月1日、株式会社プロネクサスに商号変更いたしました。当社設立以後の当社グループ(当社及び連結子会社)に係る主要事項は次のとおりであります。

年月	事項
1947年5月	株券、証券の印刷を目的として「亜細亜証券印刷株式会社」を設立(東京都中央区) 上野一雄が社長に就任
1952年5月	本社工場を移転(東京都港区)
1963年7月	各証券取引所より上場会社の適格株券印刷会社として確認を得る
1968年10月	ビジネスフォーム分野に進出
1973年3月	関西地区における営業強化のため、大阪営業所(現・大阪支店)を設置(大阪市天王寺区)
1975年12月	東京都港区に工場建物を購入、株券印刷専門の新橋第1工場とする
1976年1月	上野守生が社長に就任
1978年4月	株券印刷専門会社から、株主總會関係書類をはじめとする商法(現・会社法)関連書類の印刷専門会社に事業を拡大
1985年4月	有価証券印刷、商法(現・会社法)関連書類に加え、上場、決算、ファイナンスなど証券取引法(現・金融商品取引法)関連開示書類を開拓、「ディスクロージャー・ビジネス」として事業分野を拡大
1985年12月	本社及び本社工場を新築(東京都港区)
1986年1月	I P S (Integrated Publishing System = 電子出版システム)を導入、文字処理の充実を図る
1988年8月	大阪営業所(現・大阪支店)を北浜に移転(所在地 大阪市中央区北浜)
1989年12月	文字処理体制強化のため、富山市に「株式会社アスプロコミュニケーションズ」を設立(現・連結子会社)
1991年1月	東海地区における営業強化のため、名古屋営業所(現・名古屋支店)を設置(名古屋市中区)
1994年7月	日本証券業協会に株式を店頭登録
1994年12月	九州地区における営業強化のため、福岡営業所を設置(福岡市中央区)
1995年3月	顧客へのディスクロージャー実務関連情報サービス機関として、ディスクロージャー実務研究会を発足
1995年10月	北海道地区における営業強化のため、札幌営業所を設置(札幌市中央区)
1996年9月	東京証券取引所市場第二部に株式を上場
1997年1月	事業規模の拡大に向け富山市に工場を新築、「株式会社アスプロコミュニケーションズ」に貸与、同社本社を移転
1999年3月	中国地区における営業強化のため、広島営業所を設置(広島市中区)
1999年5月	「株式会社アスプロコミュニケーションズ」内に「ASP情報センター」を設置
1999年5月	お客様専用ハイセキュリティ送受信ネットワークASPNET運用開始
2000年4月	当社製品等の配送業務を行うため、「株式会社セキュリティ・ロジスティックス」を設立
2001年3月	「株式会社アスプロコミュニケーションズ」内「ASP情報センター」を、セキュリティ・能力強化拡充のため増築
2001年6月	コンテンツ事業開拓のため、企業財務情報のWeb配信を行う「株式会社イーオーエル」を設立
2002年8月	IR事業拡充のため、IRツールの企画制作を行う「株式会社エーツメディア」を設立(現・「株式会社a2media」)
2003年3月	「株式会社アスプロコミュニケーションズ」が、情報セキュリティ国際基準「ISMS」の認証を取得
2003年5月	開示書類作成支援システム「エディッツ・サービス」を本格導入
2004年9月	東京証券取引所市場第一部銘柄の指定を受ける
2004年10月	「株式会社アスプロコミュニケーションズ」が、財団法人日本科学技術連盟より2004年度TQM奨励賞を受賞
2005年1月	大阪支店事務所を大阪証券取引所ビル内に移転(大阪市中央区北浜)
2006年5月	新・経営理念を制定、新たに行動基準を制定
2006年5月	当社製造部門が環境マネジメントシステムISO14001の認証を取得
2006年10月	「株式会社プロネクサス(英文名 PRONEXUS INC.)」に商号変更
2006年10月	証券印刷部門を簡易新設分割し、旧社名を引き継ぐ「亜細亜証券印刷株式会社」として設立
2006年12月	財務資料専門の翻訳会社「日本財務翻訳株式会社」を合併で設立
2008年2月	本社事務所を東京都港区海岸一丁目に移転[所在地]

年月	事項
2008年4月	情報セキュリティマネジメントシステムISO27001の認証を全社範囲で取得
2008年5月	品質マネジメントシステムISO9001の認証を全社範囲で再取得
2008年6月	執行役員制度を導入
2008年7月	開示書類作成支援システム「PRONEXUS WORKS」のサービス提供開始
2009年4月	ISO27001・ISO9001・ISO14001の「統合マネジメントシステム」認証を全社範囲で取得
2009年4月	開示書類作成支援ツール「WORKS-i」のサービス提供開始
2009年5月	CSR活動の一環として「プロネクサス懸賞論文」の募集を開始
2009年7月	東京都との間で、港区虎ノ門の本社工場用地の都市計画事業収用に関する補償契約を締結
2009年11月	上記土地収用に伴い、埼玉県戸田市に新工場の建設を開始
2010年4月	「亜細亜証券印刷株式会社」が、証券印刷部門を当社へ移管し営業活動を休止
2010年6月	上野剛史が社長に就任
2010年7月	東京都港区虎ノ門の本社工場を閉鎖、埼玉県戸田市の戸田工場竣工、稼働開始
2010年9月	森林資源保護活動の一環として「プロネクサスの森」を山梨県道志村に設置する契約を締結
2010年10月	データベース・WebIR事業強化のため、100%連結子会社「株式会社イーオーエル」を吸収合併
2010年10月	当社及び「株式会社アスプロコミュニケーションズ」が、それぞれ加入する総合設立型厚生年金基金（東京印刷工業厚生年金基金及び中部印刷工業厚生年金基金）から脱退
2011年4月	物流体制再編のため、100%連結子会社「株式会社セキュリティー・ロジスティックス」を吸収合併
2011年4月	データベース事業の海外展開のため、台北に駐在員事務所を設置
2011年6月	投資信託書類作成支援システム「PRONEXUS FUND DOCUMENT SYSTEM」を開発
2011年6月	「中期経営計画2011」を策定
2013年1月	「株式会社日立ハイテクノロジーズ」の企業情報データベース「NEXT有報革命」を承継、「eolDB」に統合
2013年4月	財務資料専門の翻訳会社「日本財務翻訳株式会社」を完全子会社化
2013年7月	「株式会社a2media」から不動産投資信託関連システム開発会社「Japan REIT株式会社（現「Prop Tech Plus株式会社」）」を新設分割
2013年11月	Web制作専門会社の「株式会社ミツエーリンクス」に20%出資し、持分法適用関連会社化
2014年7月	「台湾普羅納克慶斯股份有限公司」を100%連結子会社として台北に設立、日系企業向けBPO事業を開始
2015年3月	開示BPOサービス会社「株式会社ディスクロージャー・プロ」を35%出資して設立、持分法適用関連会社化
2015年4月	「株式会社a2media」及びその子会社である「Japan REIT株式会社（現「Prop Tech Plus株式会社」）」について、連結の範囲から除外し、持分法適用関連会社化
2015年12月	「株式会社ビジネスブレイン太田昭和」と業務資本提携
2016年4月	「新中期経営計画2018」を策定
2016年4月	開示実務支援サービス「WORKS-Core」提供開始
2016年11月	日本企業ベトナム進出サポート体制強化に向け、ベトナム ダナン投資促進センターと業務提携
2018年2月	名古屋営業所（現・名古屋支店）を名古屋証券取引所ビル内に移転（名古屋市中区栄）
2018年7月	「台湾普羅納克慶斯股份有限公司」が台湾2拠点目「プロネクサスビジネスセンター 台北中山」を開設
2018年11月	データベース専門会社「株式会社アイ・エヌ情報センター」の株式を90%取得し、連結子会社化
2019年4月	「新中期経営計画2021」を策定
2019年10月	Web制作会社「株式会社レインボー・ジャパン」の全株式を取得し、連結子会社化
2019年10月	「PRONEXUS VIETNAM CO., LTD」を連結子会社としてベトナム・ホーチミン市に設立、翌11月より日系企業向けBPO事業を開始





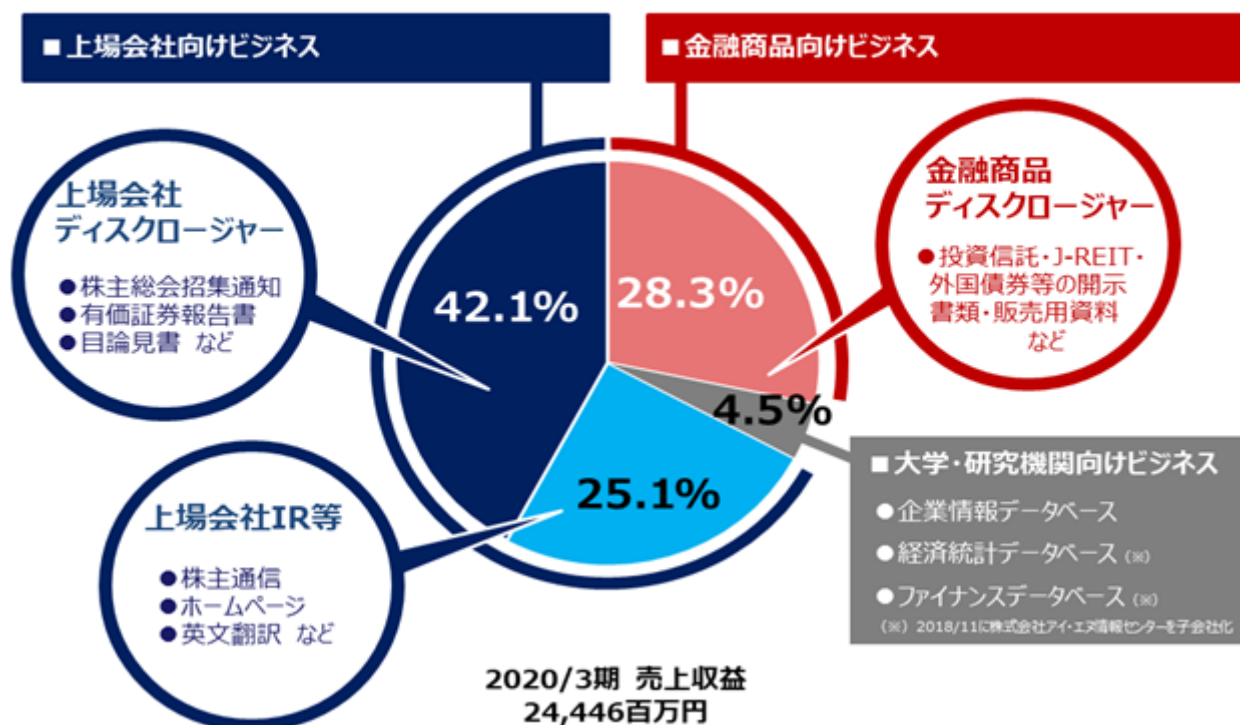
### 3【事業の内容】

当社グループ（当社及び当社の関係会社）の事業は、当社と子会社6社及び関連会社2社で構成されています。当社グループの事業セグメントは、第5 経理の状況 1 連結財務諸表等（1）連結財務諸表 連結財務諸表注記 6 . セグメント情報」に記載のとおり、ディスクロージャー関連事業の単一セグメントであります。取扱製品を上場会社ディスクロージャー関連、上場会社IR関連等、金融商品ディスクロージャー関連、データベース関連の4つに区分しております。当社グループの事業の特徴は、これら製品の受託に伴い、法的チェック、セミナー、ガイドブックなどのコンサルティングサービスと、ITを活用したインフラ・システムサービスをお客様に提供し、適正・迅速かつ効率的な開示を支援する点にあります。

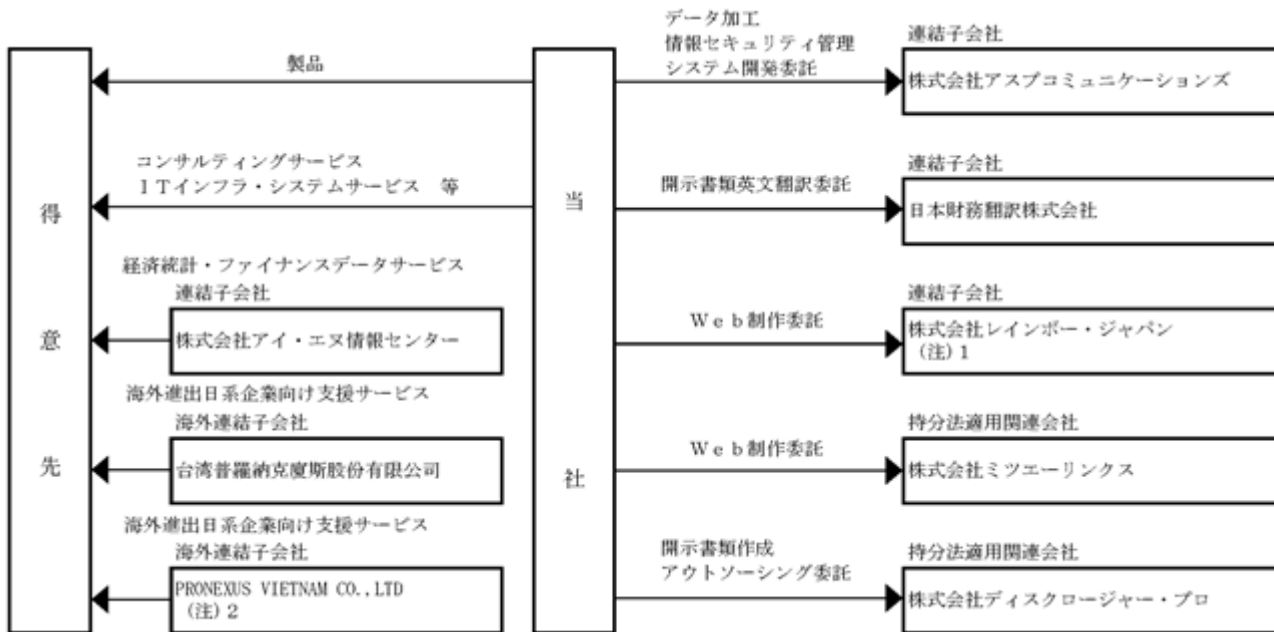
当社グループのうち、主要な子会社は、当社事業に関連するデータ加工、情報セキュリティ管理及びシステム開発業務を行っている株式会社アスプコミュニケーションズ、開示書類等の英文翻訳サービスを行う日本財務翻訳株式会社、データベース事業を行う株式会社アイ・エヌ情報センター、Web制作事業を行う株式会社レインボー・ジャパン、台湾において日系企業向けBPO事業を行う台湾普羅納克廈斯股份有限公司、ベトナムにおいて日系企業向けBPO事業を行うPRONEXUS VIETNAM CO., LTDの6社であります。

製品区分	主要製品名	当該事業に携わっている会社名
上場会社ディスクロージャー関連	上場会社向け法定開示支援サービス 等： 株主総会招集通知、決議通知、フォーム印刷、有価証券報告書、四半期報告書、有価証券届出書、目論見書、上場申請書類、決算短信等の作成支援・印刷及び関連するコンサルティング・システムサービスの提供 等	当社 株式会社アsproコミュニケーションズ 株式会社ディスクロージャー・プロ
上場会社IR関連等	上場会社向けIR支援サービス 等： 株主通信、アニュアルレポート、統合報告書、会社案内、各種IRツール、Webコンテンツ（ホームページ・IRサイト等）の作成支援・印刷及び関連する企画制作・コンサルティングサービスの提供、開示書類翻訳サービス、有料セミナー、海外進出日系企業支援 等	当社 株式会社アsproコミュニケーションズ 日本財務翻訳株式会社 株式会社レインボー・ジャパン 台湾普羅納克廈斯股份有限公司 PRONEXUS VIETNAM CO., LTD 株式会社ミツエーリンクス
金融商品ディスクロージャー関連	投資信託・不動産投資信託運用会社・外国会社向け開示支援サービス 等： 有価証券届出書、目論見書、有価証券報告書、半期報告書、運用報告書、資産運用報告書等の法定開示書類、各種販売用ツール・Webサイト等の作成支援・印刷及び関連する企画制作・システムサービスの提供 等	当社 株式会社アsproコミュニケーションズ 株式会社レインボー・ジャパン 株式会社ミツエーリンクス
データベース関連	企業情報・財務情報検索用データベース、経済統計データベース、ファイナンスデータベース 等	当社 株式会社アsproコミュニケーションズ 株式会社アイ・エヌ情報センター

ポイント 「上場企業向け」「金融商品向け」のビジネスが両輪。



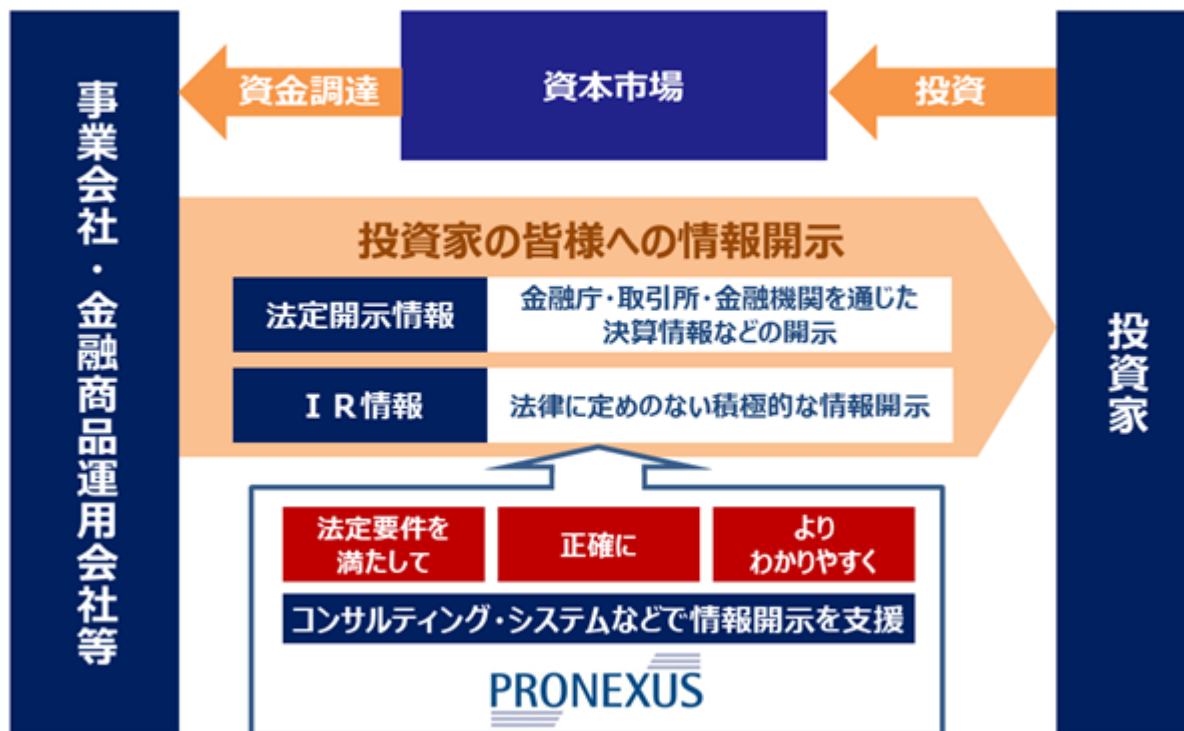
以上で述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



(注) 1 . 株式会社レインボー・ジャパンは2019年10月1日より連結の範囲に含めております。

2 . PRONEXUS VIETNAM CO., LTDは2019年10月11日より連結の範囲に含めております。

**ポイント** 資本市場の開示インフラとして、上場企業や投信会社等を実務面から支援。



4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) 株式会社アスプロコミュニケーションズ (注)2	富山県 富山市	30	上場会社ディスクロージャー関連・上場会社IR関連等・金融商品ディスクロージャー関連・データベース関連	100.0	当社製品のデータ加工、情報セキュリティ管理及びシステム開発業務を行っております。 役員の兼任があります。
日本財務翻訳株式会社	東京都 港区	80	上場会社IR関連等	100.0	開示書類等の翻訳業務を行っております。 役員の兼任があります。
株式会社アイ・エヌ情報センター	東京都 千代田区	200	データベース関連	90.0	経済統計・ファイナンスデータベースサービスを行っております。 役員の兼任があります。
株式会社レインボー・ジャパン	東京都 渋谷区	30	上場会社IR関連等・金融商品ディスクロージャー関連	100.0	Webページの制作サービス等を行っております。 役員の兼任があります。
台湾普羅納克廈斯股份有限公司	台湾 台北市	65百万 新台幣ドル	上場会社IR関連等	100.0	日系企業向けBPOサービスを行っております。 役員の兼任があります。
PRONEXUS VIETNAM CO., LTD	Ho Chi Minh City, Viet Nam	20,184百万 ベトナムドン	上場会社IR関連等	95.0	日系企業向けBPOサービスを行っております。 役員の兼任があります。
(持分法適用関連会社) 株式会社ミツエーリンクス	東京都 新宿区	99	上場会社IR関連等・金融商品ディスクロージャー関連	20.0	Webページの制作サービス等を行っております。
株式会社ディスクロージャー・プロ	東京都 港区	10	上場会社ディスクロージャー関連	35.0	開示書類作成のBPOサービスを行っております。 役員の兼任があります。

(注)1. 主要な事業の内容欄には、製品区分の名称を記載しております。  
2. 特定子会社に該当しております。

株式会社アスコミュニケーションズ



日本財務翻訳株式会社



株式会社アイ・エヌ情報センター



株式会社レインボー・ジャパン



台湾普羅納克廈斯股份有限公司



PRONEXUS VIETNAM CO.,LTD



## 5【従業員の状況】

### (1) 連結会社の状況

2020年3月31日現在

従業員数(人)	
1,304	[325]

- (注) 1. 臨時雇用者数は[ ]内に年間の平均人員を外数で記載しております。  
 2. 当社グループの事業セグメントは、ディスクロージャー関連事業の単一セグメントであるため、セグメント別の従業員数の記載はしていません。  
 3. 従業員数が前連結会計年度と比べて110名増加しましたのは、体制強化のための中途採用および2019年10月1日付で株式会社レインボー・ジャパンを連結子会社化したことなどによるものであります。

### (2) 提出会社の状況

2020年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
783 [188]	42.0	11.4	6,556,426

- (注) 1. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。  
 2. 臨時雇用者数は[ ]内に年間の平均人員を外数で記載しております。  
 3. 当社の事業セグメントは、ディスクロージャー関連事業の単一セグメントであるため、セグメント別の従業員数の記載はしていません。

### (3) 労働組合の状況

労働組合は結成されておりませんが、労使関係は円満に推移しております。

## 第2【事業の状況】

### 1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

#### (1) 会社の経営の基本方針

当社は、事業会社並びに金融商品のディスクロージャー・IR実務支援を主たる事業とする専門会社です。顧客企業から投資家への適正な情報開示を支援するため、高い専門性を基盤としたコンサルティングサービスと、開示実務の精度と効率を高める独自のシステムサービスを中核に、印刷、物流などを含めトータルなサービスを提供いたします。この活動を通して、投資家の適正な企業価値評価と投資行動を促進し、顧客企業の資金調達と成長戦略を支援すること、ひいては資本市場の健全な成長と経済・社会の発展に貢献することが当社の社会的使命です。

この社会的使命実現のため当社は以下の5項を経営理念に掲げ、事業の発展と株主の利益拡大を目指します。

私たちはプロフェッショナル集団を目指します。

私たちはお客様に信頼されるパートナーを目指します。

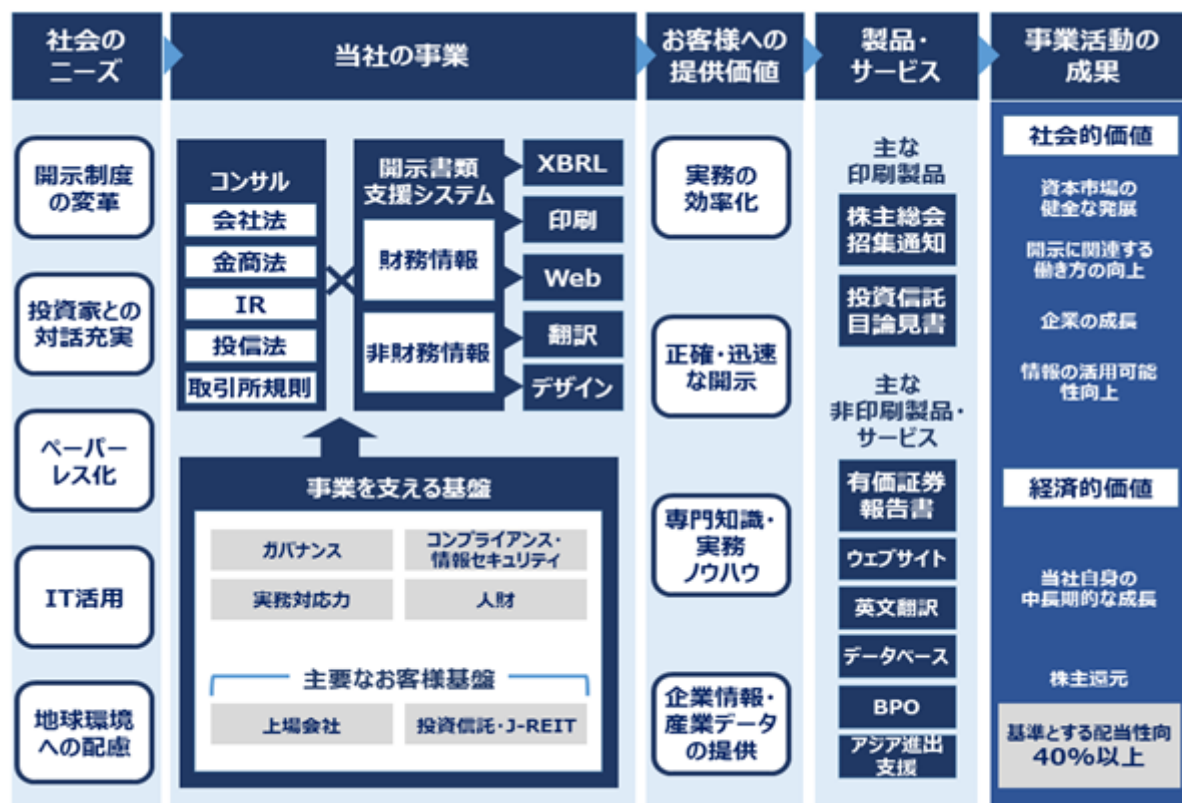
私たちは法令遵守と情報セキュリティを追求します。

私たちはグローバルな視点から優れたサービスを創造し続けます。

私たちは企業市民としての責任に留意し、持続可能な成長を目指します。

当社は、上記の社会的使命を含めた経営理念に加えて、企業市民としての社会・環境面における行動基準、事業会社としてのビジネスにおける行動基準を定め、当社グループ内への経営方針の浸透を図っております。

(当社のビジネスモデル：事業を通じた社会的価値・経済的価値の創造プロセス)



## (2) 経営環境とそれに対応する経営戦略

当事業との関連性が高い資本市場においては、市況の好不調や関連法制度の改正など、当事業に影響を与える環境変化が常に起こります。これに対して当社は、市況の影響を受けにくいサービスの強化や新たな制度に対応するサービスの開発を通して、事業領域の拡大を続けてまいりました。

近年においては、ディスクロージャーの電子化が大きく進みました。金融庁の電子開示システム「EDINET」は一定期間ごとにバージョンアップを実施しており、同システムにおける開示書類専用データ「XBRL」も順次高度化や適用範囲の拡大が行われています。これらに対応したお客様の開示実務をインフラとして支えるシステムサービス・コンサルティングサービスが、当事業の大きな柱となっています。

今後もディスクロージャーの電子化は、一層進んでいくことが想定されます。2019年12月に改正会社法が公布され、導入時期は未確定ではありますが、当社の主力製品のひとつである株主総会招集通知が電子化されることが決まりました。またこれ以外にも、金融商品ディスクロージャー分野における開示書類など、当社が取り扱う製品の電子化は今後も拡大していくものと考えております。これらの電子化により、当社の印刷製品の需要が今後減少する可能性があります。

しかしながら、2018年6月に制定されたコーポレートガバナンス・コードに基づき、株主・投資家と企業の対話は今後も充実が求められることが想定されます。また、「働き方改革」が推進される中、当社のお客様の実務の効率化およびアウトソーシングニーズは一層高まってきております。当社では、システムインフラやコンサルティングサービスの提供に加えて、BPOサービス、Webを通じた情報提供の拡充や英文での情報開示など、電子化時代に対応した「非印刷」サービスを引き続き拡張してまいります。

一方、直近では、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大により、国内外の多くの企業活動が停滞を余儀なくされています。これにより、事業会社やJ-REITのIPO・ファイナンスの減少、投資信託の新規設定の減少など、当事業への影響が懸念されます。

新型コロナウイルスの問題は、当社のみならずお客様の今後の実務のありかたを大きく変える可能性があります。当社がすでにオンラインで提供しているシステムサービスの拡充など、お客様ニーズに応えるサービスを提供してまいります。

このように、今後も想定される経営環境の変化に対応して、事業の変革を続けることが当社の最重要の経営課題と認識しております。

## (3) 新中期経営計画の基本方針と数値目標

当社は、上記(2)に記載した経営環境の変化に対応するため、「新中期経営計画2021」を2019年4月に立案し、推進しております。

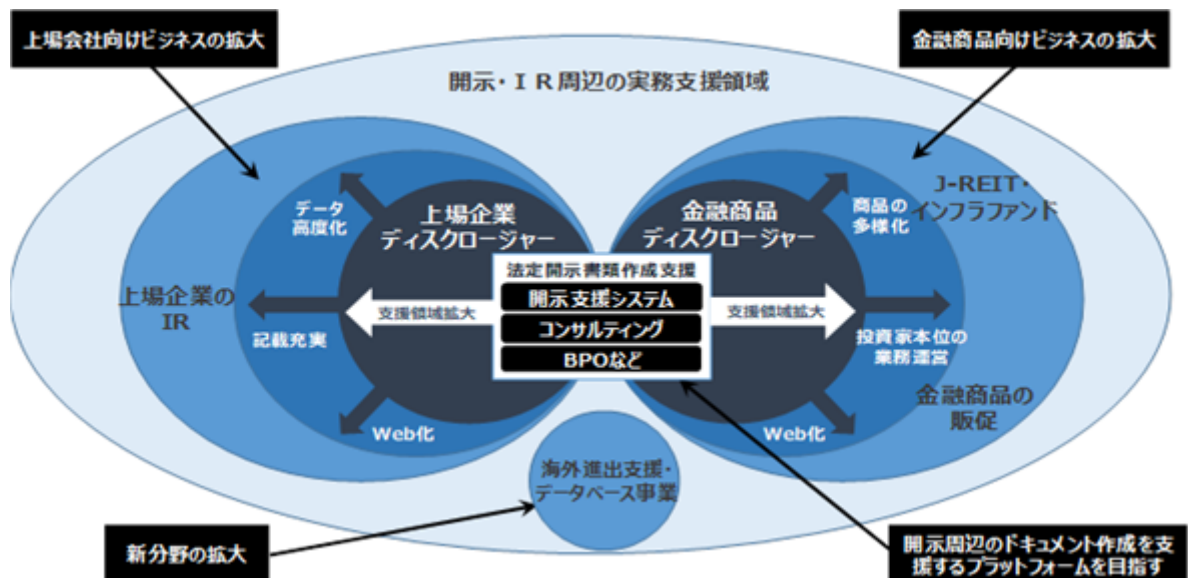
創業当初の株券専業からの脱却、決算開示の電子化に伴うシステムサービスプロバイダーへの転換、そして近年の「非印刷事業」の拡大等、当社は常に環境変化に対応した事業変革を実現してきました。これは当社が創業以来保持し続けている企業文化です。

株主総会招集通知をはじめとしたディスクロージャーのさらなる電子化等についても、当社は大きなチャンスと捉え、持続的な成長を実現してまいります。近年成長が続くIR関連サービスについても、継続的に強化に取り組みます。これに加えて、システムサービス・コンサルティングサービスのさらなる拡張を進め、お客様の開示周辺のドキュメント作成を核とした「プラットフォーム型ビジネス」を目指します。

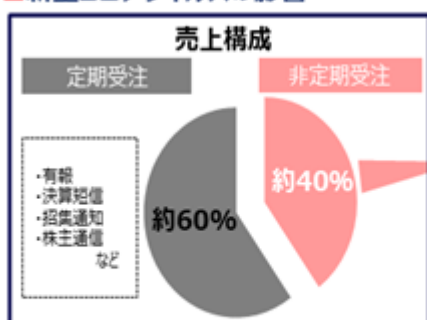
本計画においては3か年の売上高・営業利益・営業利益率・ROE(いずれも日本基準)を主要数値目標として定めました。1年目にあたる2020年3月期においては、これらの数値目標をほぼ達成しております。しかしながら、新型コロナウイルスの拡大に伴う業績影響額の算定が現段階では困難であることから、2年目(2021年3月期)、3年目(2022年3月期)については一旦取り下げをし、2020年5月14日付でその旨開示しております。

今後の市場動向を見極めつつ、業績予想の算定が可能となった段階で速やかに開示いたします。





### ■新型コロナウイルスの影響

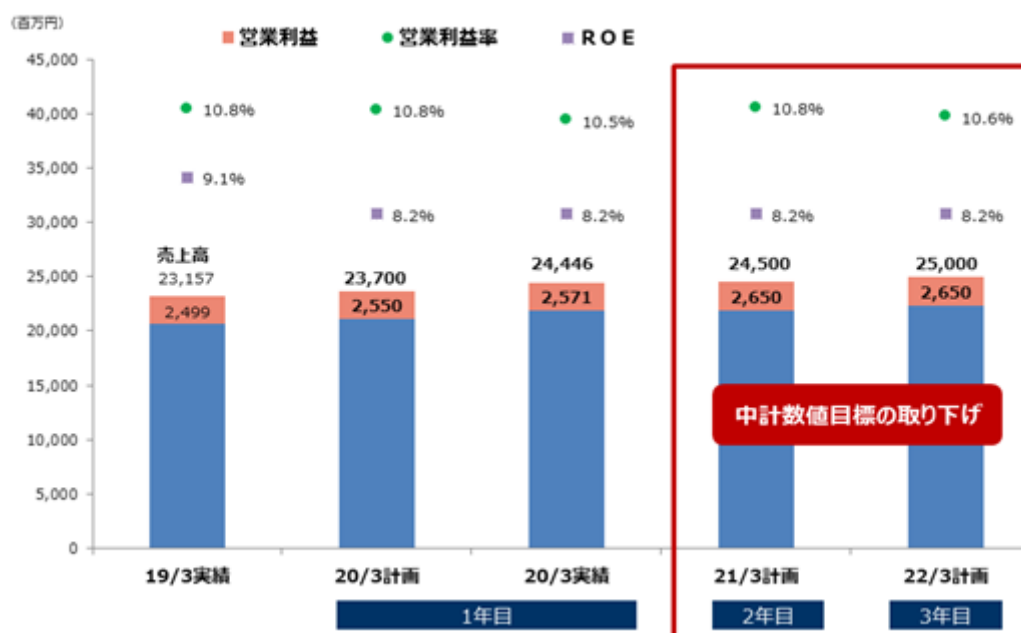


- 上場会社ディスクロージャー関連
  - ・新規上場 (IPO) 延期
  - ・ファイナンス関連の減少
- 金融商品ディスクロージャー関連
  - ・国内外新規ファンドの減少
  - ・国内REIT市場のIPO、ファイナンスの減少
- 上場会社IR関連等
  - ・投資家説明会、各セミナーの延期
  - ・IR活動の縮小
  - ・海外進出の停滞

### ● 通期業績見通しについて

- ✓ 来期 (2021/3期) の通期業績見通しは、現時点での合理的な算出が困難であることから未定。
- ✓ 今後の市場動向を見極めつつ、業績予想の算定が可能となった段階で速やかに開示。

### ■ 当初の中計数値目標 ※記載数値は全て日本基準



(4) 会社の対処すべき課題

制度環境が大きく変化するなかで、事業領域の拡張、競争力・収益力・顧客満足の向上を行います。

株主総会招集通知電子化等、開示制度の変化に対応した中核ビジネスの強化と拡張  
システムサポート・BPOサービスの強化による実務支援領域の拡大  
金融商品マーケットの多様化と市場拡大に対応した新たなサービス体制の構築  
コーポレートガバナンス・コードが求める投資家との対話充実に資するIR支援サービスの強化  
海外投資家の増大と資本市場のグローバル化に対応した英文開示体制の強化  
Web化の進展に対応した企画制作体制の強化  
データベース事業におけるグループ会社シナジーの最大化と市場拡大  
アジア市場における日系企業支援サービス体制の強化  
領域拡大に対応する営業支援体制・バックヤードの整備  
印刷設備の安定稼働による生産性のさらなる向上と収益力の向上

(5) 中長期的な会社の経営戦略

当社は経営の基本方針に基づき、当社が果たすべき基本的使命の確実な遂行によりお客様の高い信頼を得るとともに、事業環境の変化に対応して持続的な成長を実現するために、以下の戦略を実行いたします。

コンプライアンスの徹底と情報セキュリティ体制のさらなる整備  
開示制度の変化に対応した、新たな実務支援サービスの開発  
システムサービスの強化による顧客支援領域の拡張  
M&A、資本・業務提携を含めた外部リソースの活用による事業領域の拡張  
生産性の向上と競争力の強化による収益力の拡大  
資本効率の向上と高い水準の株主還元策の遂行

## 2【事業等のリスク】

当社グループの経営成績、財務状況等に影響を及ぼす可能性のあるリスク及び変動要因と、その他重要と考えられる事項は以下のとおりであります。

当社グループでは、これらリスクの発生を十分に認識した上で、発生を極力回避し、また発生した場合に的確な対応を行うための努力を継続してまいります。

### (1) インサイダー情報等機密情報の取り扱いに関わるリスク

当社グループはインサイダー情報を始めとした顧客企業の開示前機密データを取り扱うため、「機密保持」は最重要課題であります。万一これらの情報漏洩や情報流出が発生した場合は、当社グループの業績に影響を与える可能性があります。当社グループでは、こうした事態の発生を抑止するため、別項の「情報セキュリティと事業継続に関わるリスク」への対応を推進するとともに、インサイダー情報の全社的な管理体制を構築し推進しています。誓約書の提出、定期的な教育とテストの実施、厳格なルールの制定と運用監視、取り扱いスペースの隔離、関与者の制限、トレーサビリティ体制の整備、定期的な情報セキュリティ委員会の開催と啓発活動等様々な防止策を行っています。

### (2) 情報セキュリティと事業継続に関わるリスク

当社グループが提供するシステムサービスにおいては、その安定稼働の維持及び重要システムの冗長化に努め、不測の事態に備えたコンティンジェンシープランを策定しております。しかしながら、人的過失、事故、サイバー攻撃、災害や停電等の要因によりシステムサービスに重大な障害が発生する可能性があります。

特に、近年のサイバー攻撃手法の巧妙化により、コンピュータウイルスへの感染等による情報漏洩やサービス妨害のリスクが高まっています。当社グループではサイバーセキュリティ対策を経営の重要課題として、経営主導のもと、情報セキュリティ基本方針および経済産業省の「サイバーセキュリティ経営ガイドライン」に従い、多層防御およびCSIRT(Computer Security Incident Response Team)を中心とした設備面、組織面の施策を実行し、定期的な第三者機関によるリスクアセスメントにて実効性を評価しています。

### (3) 関連する法律・制度の変化による受注影響リスク

当社グループは、企業のディスクロージャーに係わる法定書類の作成を支援するための諸サービスとデータ作成、印刷を主業務としておりますが、それらの開示書類の多くは会社法と金融商品取引法に規定されております。従って法律や関連する諸制度の改正によって、提供する製品とサービスの需要・仕様・内容が変化することがあります。2019年12月に公布された改正会社法に基づき、2 - 3年内の導入が想定されている株主総会書類の電子化はその一例であります。制度改正の結果として法定書類のページ数増や新サービスの導入などのプラスの影響もありますが、反面では、印刷物の一部または全部の電子化による印刷需要の減少、ページ数の減少や特定製品の受注量減少等、当社グループの売上にマイナス影響を与えるケースもあります。こうしたリスクを軽減するために、法制度の影響を受けにくいサービス・ソリューション、新たな事業領域の開拓を中期経営戦略の重要課題として掲げ、重点的な投資、開発を行っています。

### (4) 証券市場の変動による受注影響リスク

当社グループが受注する製品・サービスのうち、株式の新規上場(IPO)やファイナンス、投資信託に付随する目論見書・販売用資料などの売上は、証券市場の好不況によって受注量が変動するため、証券市場の変動は業績に影響を与える可能性があります。当社グループはこうしたリスクを軽減するため、株主総会招集通知、有価証券報告書、四半期報告書などの継続開示書類や、お客様の業務効率化や正確性の向上に資するシステムサービス・コンサルティングサービス、IR関連製品・サービスなど、証券市況の影響を受けにくい製品の受注拡大に取り組んでいます。

### (5) 事業の季節変動リスク

当社グループ売上の約3分の2を占める事業会社向け製品・サービスの顧客のうち、約65%が3月決算会社であるため、決算及び株主総会関連製品の受注が集中する第1四半期の売上が、次頁の表のとおり最も多くなっております。このため、第1四半期の受注動向は通期業績への影響が大きく、対応する生産キャパシティの確保は重要な課題です。また、その他の四半期においては受注量が第1四半期よりも少ないことから、過剰な生産キャパシティの保有は収益を悪化させるリスクがあります。当社ではこうした受注量の変動に対して、自社製造ラインの生産効率を高めて内製率を向上させるとともに、最繁忙期に有力な業務委託先を活用することで、キャパシティの確保とコスト低減のバランスをとった生産体制を構築しています。加えて、金融商品関連、開示支援システム、BPO、データベース等、比較的季節変動が少なく、通年の需要が見込まれるサービス領域の拡大にも注力しています。

	第1四半期 (4 - 6月期)	第2四半期 (7 - 9月期)	第3四半期 (10 - 12月期)	第4四半期 (1 - 3月期)	年度計
売上収益 (百万円)	9,481	4,602	5,161	5,202	24,446
構成比 (%)	38.8	18.8	21.1	21.3	100.0

(6) 他社との競合による収益影響リスク

当社の中核事業である上場会社ディスクロージャー・IRや金融商品ディスクロージャー分野においては、それぞれ競合会社が存在します。当社の提供する製品・サービスに対して競合会社も対抗する製品・サービスを提供しているため、新たなお客様の受注といった場面において、ソリューションの差別性、品質の優位性、サポートの充実度、価格の優位性といった面で競争が日々行われています。その結果シェアの変動や受注単価の低下等の変化が起き、当社の売上高や利益の変動につながる可能性があります。こうした不可避の状況を踏まえ、当社は提供サービスの品質・機能の向上を図るとともに、お客様の業務をより幅広い視点から支援する新たなソリューションの開発、BPOサービスの提供、競合が少なく当社の強みが生かせる新たな事業領域の開発等によって、競合リスクからの回避と成長・収益機会の拡大を図っています。

(7) 自然災害やパンデミックによる事業継続リスク

大規模地震及び風水害などの自然災害や、新型コロナウイルス感染症を始めとしたパンデミックが発生した場合、当社事業の中核である開示書類作成支援業務の停止・中断の発生リスクがあります。株主総会招集通知や有価証券報告書など法律で定められた書類作成の停止は、お客様企業の重要な意思決定や資金調達等に影響し、ひいては資本市場の機能にも影響する可能性があります。

当社グループではこうしたリスクに対し、事業継続に係る各種規程に基づいた物的・人的両面での対策を講じております。物的対策としては、上記(2)に記載の通り、システムの冗長化等を通じて、不測の事態においても情報システムの中断・停止を最小限に留めるための体制を構築しております。また、人的対策としては、社員の安全確保を図りつつ、リモートワークの推進や他拠点への業務移管等により、リスク分散を行い、お客様の開示を確実に遂行いただくための支援体制を構築しております。

当社の書類作成プロセスの多くはデジタル化・ペーパーレス化されていますが、印刷工程等社員の出勤が不可欠なプロセスもあります。当社グループでは、今般の新型コロナウイルス感染症への対策として、前述の施策のほか、時差出勤や交代制勤務、オフィスの分散など感染防止施策を立案・推進することで、開示支援業務の継続と社員の安全確保の両立を図りました。

### 3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当社グループは、当連結会計年度よりIFRSを適用しており、前連結会計年度の数値もIFRSに組替えて比較分析を行っております。

#### (1) 経営成績等の状況の概要

##### 経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、企業業績や雇用環境が期初より概ね堅調に推移してきました。しかしながら2月以降、新型コロナウイルス感染症の拡大により国民生活に多大なる影響が生じ、経済活動も停滞が避けられない状況になっています。また、海外においても米中貿易摩擦や英国のEU離脱問題などの不確定要素に加えて、国内同様に新型コロナウイルスの影響が急速に拡大して先行きの予測が困難な状況に至っています。当社事業と関連性が高い国内証券市場においては、このような状況への警戒感から、20,000円台を維持してきた日経平均が3月に一時16,000円台まで急落するなど、不安定な状態にありました。

こうした経済環境・証券市況を受けて、当連結会計年度は、コーポレートガバナンス・コードを背景とした投資家への情報提供強化の動きがより幅広い企業に浸透し、招集通知やIR関連製品の売上が増加いたしました。また、金融庁の電子開示システム「EDINET」に提出する開示書類データのXBRL対象範囲拡大に伴い、決算関連の売上も増加いたしました。加えて、M&AによりWeb関連やデータベース関連の売上が増加しました。これらの増収が投資信託関連製品や、IPO・ファイナンス関連製品の減収等マイナス要因を補った結果、連結売上収益は前年同期比1,288百万円増（同5.6%増）の24,446百万円となりました。

売上原価は、制作体制の強化及びサービスの向上による労務費の増加の一方、外注費及び社内製造コストの抑制により、前年同期比693百万円増加に留まりました。これにより売上原価率は前年同期比で0.4ポイント減少し、60.7%となりました。この結果、売上総利益は前年同期比596百万円増（同6.6%増）の9,600百万円となりました。一方、販売費及び一般管理費は営業体制強化に伴う人件費増等により、前年同期比449百万円増（同6.8%増）の7,061百万円となりました。販売費及び一般管理費率は前年同期比で0.3ポイント増加し、28.9%となりました。これらにその他の収益とその他の費用を加減した結果、営業利益は前年同期比134百万円増（同5.4%増）の2,600百万円となりました。

金融収益は、投資事業組合運用益及び受取配当金等により68百万円となりました。税引前利益は、投資事業組合運用益が減少したことにより前年同期比15百万円増加し（同0.5%増）の2,729百万円となりました。また、親会社の所有者に帰属する当期利益は、前年同期比12百万円増（同0.6%増）の1,846百万円となりました。

当社グループの事業セグメントは、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等(1) 連結財務諸表 連結財務諸表注記 6.セグメント情報」に記載のとおり、ディスクロージャー関連事業の単一セグメントであります。取扱製品を区分した売上収益の概況は、次のとおりであります。

<上場会社ディスクロージャー関連>

招集通知のカラー化と受注社数増による増収に加えて、上場企業が金融庁の電子開示システム「EDINET」に提出する開示書類データのXBRL対象範囲が拡大したことにより、決算関連の売上が増加いたしました。また、開示書類作成を支援するシステムサービス・アウトソーシングサービスの増収も寄与いたしました。これらの増収効果がIPO・ファイナンスの減収を補い、上場会社ディスクロージャー関連の売上収益は、前年同期比437百万円増(同4.4%増)の10,287百万円となりました。

<上場会社IR関連等>

IRサイト構築等のWebサービスや株主総会ビジュアル化サービス等の受注が増加いたしました。また、2019年10月1日付で連結子会社化した、Web制作会社の株式会社レインボー・ジャパンの売上も加わりました。これらの結果、上場会社IR関連等の売上収益は、前年同期比590百万円増(同10.6%増)の6,137百万円となりました。

<金融商品ディスクロージャー関連>

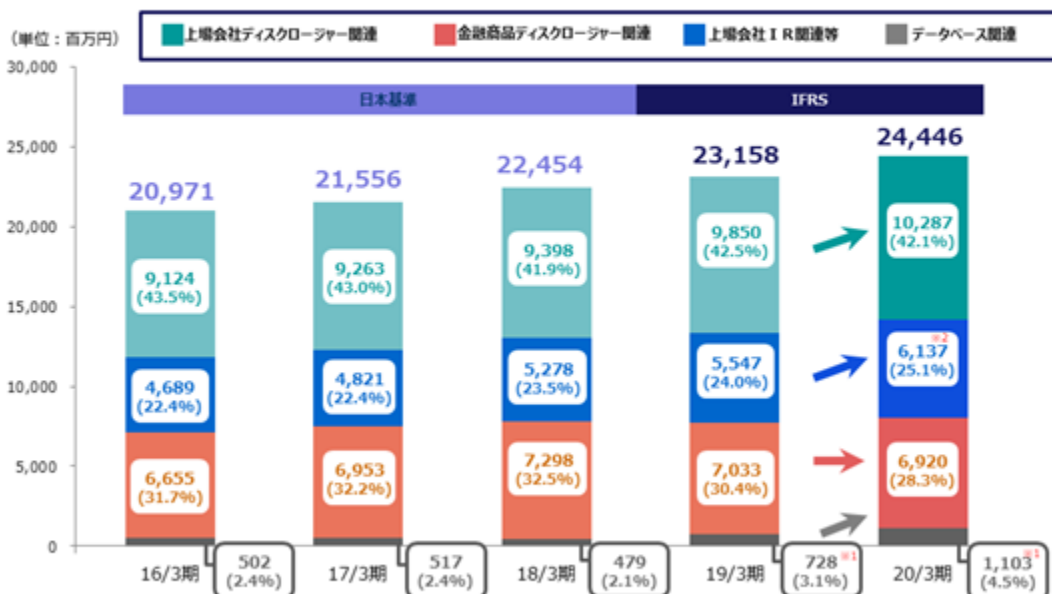
国内投資信託市場は、一部ファンドの新規設定が減速し、主力製品である目論見書や届出書が減収となりました。また、J-REIT市場のIPO・ファイナンス関連製品や、外国投信も減収となりました。一方、金融商品の各種販促ツールや金融機関のディスクロージャー誌等は増収となりました。これらの結果、金融商品ディスクロージャー関連の売上収益は、前年同期比113百万円減(同1.6%減)の6,920百万円となりました。

<データベース関連>

データベース関連では、既存顧客の契約更新が順調に推移するとともに新規顧客の開拓が進展いたしました。また、2018年11月1日付で株式会社アイ・エヌ情報センターを連結子会社化したことにより、データベース関連の売上収益は前年同期比374百万円増(同51.4%増)の1,103百万円となりました。

**ポイント** 当期は金融商品ディスクロージャー関連を除く各製品区分の増収が寄与

(※1) 19/3期中(18年11月)に株式会社アイ・エヌ情報センターを子会社化 (※2) 20/3期中(19年10月)に株式会社レインボー・ジャパンを子会社化



(注) 1. 2020/3期 有価証券報告書より、従来の「日本基準」に替えて「国際会計基準(IFRS)」を適用しております。また、前期比較として2019/3期のIFRSに準拠した数値も併記しています。  
2. 日本基準の「売上高」は「売上収益」となります。

(製品区分別売上)

区分	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)		当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)		増減 (印減)	
	金額 (千円)	構成比 (%)	金額 (千円)	構成比 (%)	金額 (千円)	増減率 (%)
上場会社ディスクロージャー 関連	9,849,568	42.5	10,286,753	42.1	437,185	4.4
上場会社IR関連等	5,546,507	24.0	6,136,833	25.1	590,326	10.6
金融商品ディスクロージャー 関連	7,033,295	30.4	6,919,949	28.3	113,346	1.6
データベース関連	728,494	3.1	1,102,802	4.5	374,308	51.4
合計	23,157,864	100.0	24,446,337	100.0	1,288,472	5.6

- (注) 1. 金額は販売価格によっております。  
2. 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

#### 資産、負債及び資本の状況

当連結会計年度末における資産合計は、前連結会計年度末に比べ1,100百万円増加し33,049百万円となりました。

流動資産は850百万円増加し、17,566百万円となりました。主な要因は、営業債権及びその他の債権の増加338百万円、その他の金融資産の増加389百万円等であります。非流動資産は250百万円増加し、15,484百万円となりました。主な要因は、無形資産の増加342百万円、のれんの増加239百万円等であります。

当連結会計年度末における負債合計は、前連結会計年度末に比べ542百万円増加し、10,543百万円となりました。

流動負債は776百万円増加し、6,101百万円となりました。主な要因は、未払法人所得税等の増加393百万円等あります。非流動負債は234百万円減少し、4,442百万円となりました。主な要因は、リース負債の減少391百万円及び退職給付に係る負債の増加64百万円等であります。

当連結会計年度末における資本合計は、前連結会計年度末に比べ558百万円増加し、22,506百万円となりました。主な要因は、親会社の所有者に帰属する当期利益1,846百万円の計上による増加と剰余金の配当による減少813百万円、自己株式の取得による減少477百万円等であります。

#### キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物(以下「資金」という)は、前連結会計年度末に比べ19百万円増加(前年同期比0.2%増)し、当連結会計年度末に11,911百万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

##### (営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果得られた資金は4,172百万円(前年同期は2,886百万円の獲得)となりました。収入の主な内訳は、税引前利益2,729百万円に対し、非資金損益項目等の調整を加減した営業取引による収入4,769百万円、利息及び配当金の受取額51百万円であり、支出の主な内訳は、法人所得税の支払637百万円等であります。

##### (投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した資金は1,716百万円(前年同期は1,279百万円の使用)となりました。支出の主な内訳は、有形固定資産の取得による支出346百万円、無形資産の取得による支出1,054百万円及び子会社の取得による支出193百万円等であります。

##### (財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果使用した資金は2,436百万円(前年同期は2,328百万円の使用)となりました。支出の主な内訳は、長期借入金の返済による支出371百万円、自己株式の取得による支出477百万円、配当金の支払額813百万円及びリース負債の返済による支出780百万円等であります。

生産、受注及び販売の実績

当社グループ（当社及び連結子会社6社）の事業セグメントは、第5 経理の状況 1 連結財務諸表等（1）連結財務諸表 連結財務諸表注記 6．セグメント情報」に記載のとおり、ディスクロージャー関連事業の単一セグメントであります。生産、受注及び販売の実績については、上場会社ディスクロージャー関連、上場会社I R関連等、金融商品ディスクロージャー関連、データベース関連の4製品区分で示しております。

a．生産実績

当連結会計年度の実績を製品区分別に示すと、次のとおりであります。

製品区分別の名称	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	前年同期比(%)
上場会社ディスクロージャー 関連 (千円)	10,286,753	104.4
上場会社I R関連等 (千円)	6,136,833	110.6
金融商品ディスクロージャー 関連 (千円)	6,919,949	98.4
データベース関連 (千円)	1,102,802	151.4
合計 (千円)	24,446,337	105.6

- (注) 1．金額は販売価格によっております。  
2．上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

b．受注実績

当連結会計年度の実績を製品区分別に示すと、次のとおりであります。

製品区分別の名称	受注高 (千円)	前年同期比 (%)	受注残高 (千円)	前年同期比 (%)
上場会社ディスクロージャー 関連	10,394,356	105.4	2,205,457	105.1
上場会社I R関連等	6,269,378	110.4	1,070,836	114.1
金融商品ディスクロージャー 関連	6,957,477	101.6	1,330,379	102.9
データベース関連	1,109,649	154.5	178,175	104.0
合計	24,730,860	107.1	4,784,847	106.3

- (注) 1．金額は販売価格によっております。  
2．上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

c．販売実績

当連結会計年度の実績を製品区分別に示すと、次のとおりであります。

製品区分別の名称	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	前年同期比(%)
上場会社ディスクロージャー 関連 (千円)	10,286,753	104.4
上場会社I R関連等 (千円)	6,136,833	110.6
金融商品ディスクロージャー 関連 (千円)	6,919,949	98.4
データベース関連 (千円)	1,102,802	151.4
合計 (千円)	24,446,337	105.6

- (注) 1．主要な販売顧客については、該当するものではありません。  
2．上記の金額には、消費税等は含まれておりません。



(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

経営成績等の分析

当社グループの当連結会計年度の売上収益は前年同期比1,288百万円増（同5.6%増）の24,446百万円となりました。その要因や市場背景を含めた各製品分野の特記事項についてご説明いたします。

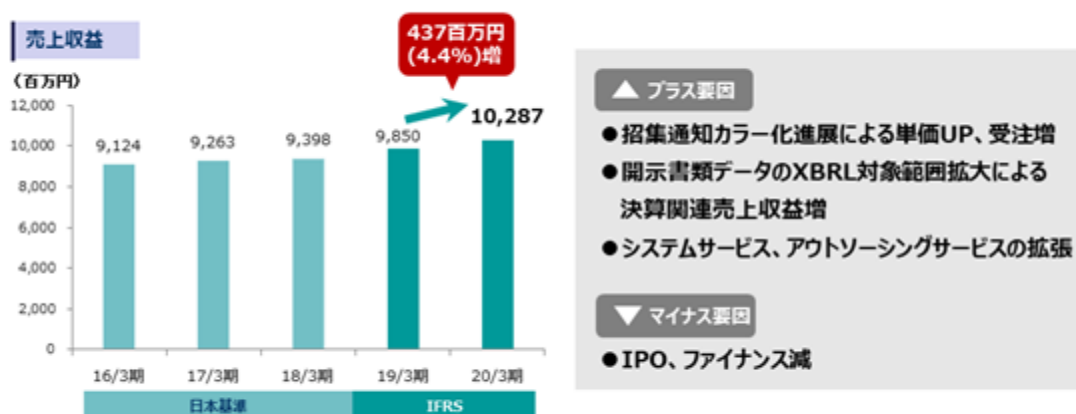
<上場会社ディスクロージャー関連>

当分野の売上収益は、前年同期比437百万円増（同4.4%増）の10,287百万円となりました。主たる増収要因は、招集通知のカラー化進展と受注増という質量両面でのサポート拡大と、上場企業が金融庁の電子開示システム「EDINET」に提出する開示書類データのXBRL対象範囲が拡大したことであり、XBRLは開示書類専用のデータ形式であり、金融庁が求める仕様に基づいて編集を行うためには専門的なノウハウが必要となります。当社はXBRLの対象範囲拡大に合わせて、これを支援するシステムサービス・コンサルティングサービスを拡大したことで、決算開示関連が増収となりました。

また、政府による「働き方改革」の推進の影響もあり、上場会社における開示実務の効率化ニーズが一層高まっております。当社はアウトソーシングサービスの提供体制を強化し、支援領域を拡大いたしました。

また、当社主力製品の顧客数に直結する重要な指標である国内上場会社数は、当連結会計年度末において約3,790社（前年同期比約50社増）と、6年連続で増加いたしました。お客様のニーズに対応するサービスの提供に取り組むことで、顧客数の増加と1社当たり売上収益の増加による成長力の向上を図っております。

**ポイント** 招集通知カラー化、XBRL開示強化に伴う決算関連の売上増等が寄与



(注) 1. 2020/3期 有価証券報告書より、従来の「日本基準」に替えて「国際会計基準 (IFRS)」を適用しております。また、前期比較として2019/3期のIFRSに準拠した数値も併記しています。  
2. 日本基準の「売上高」は「売上収益」となります。

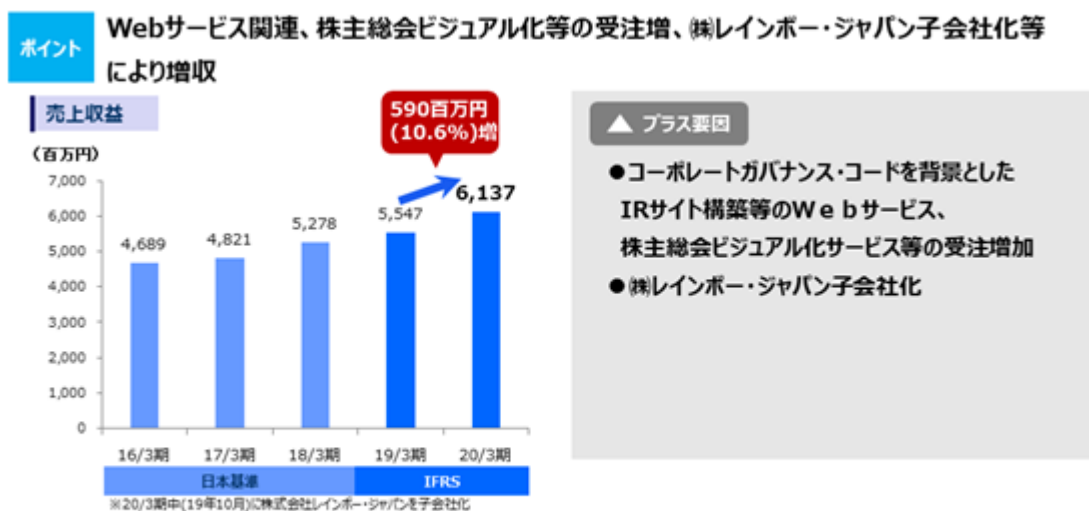
< 上場会社 I R 関連等 >

当分野の売上収益は、前年同期比590百万円増（同10.6%増）の6,137百万円となりました。主たる増収要因は、コーポレートガバナンス・コードの導入などにより国内外の投資家との対話ニーズが高まり、これに対応する I R 関連製品の受注が増加したことと、2019年10月1日付で連結子会社化した株式会社レインボー・ジャパンの通期売上のうち、2019年10月から2020年3月までの6か月分の売上が加算されたこととあります。

当分野においては、I R サイト構築等の Web サービス、株主総会のビジュアル化サービス等の受注が増加いたしました。「第2 事業の状況 1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等」にも記載の通り、ディスクロージャーの電子化進展に対応して、Webでの情報開示充実ニーズが一層高まってきています。当社はこれに対応して Web 制作体制の強化を進めており、前述の株式会社レインボー・ジャパンの連結子会社化など、M & A も含めた成長投資を行ってまいりました。

上場会社が投資家との対話充実をはかる傾向は今後も継続すると想定されることから、当社では対応するサービスの制作体制強化に取り組んでおります。

なお、当分野にはセミナー事業の売が含まれております。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う安全対策として、2020年2月より会場開催型のセミナーを当面中止とし、Web 視聴サービスへの移行を行いました。



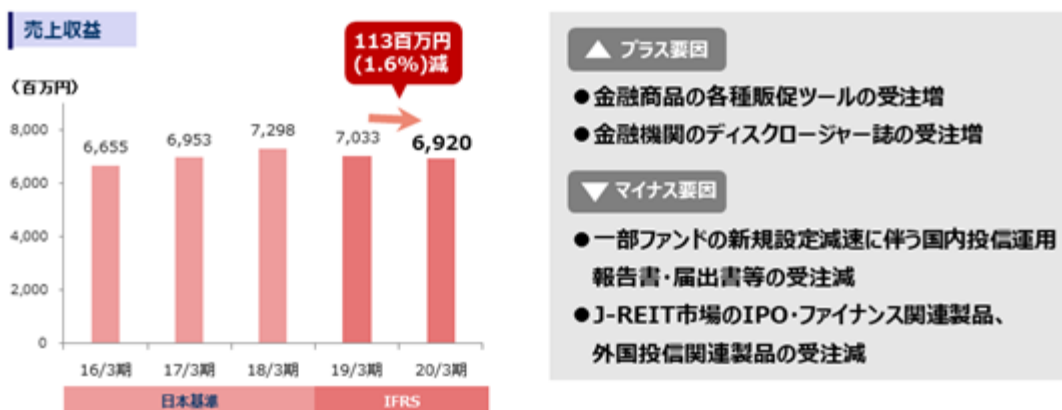
(注) 1. 2020/3期 有価証券報告書より、従来の「日本基準」に替えて「国際会計基準 (IFRS)」を適用しております。また、前期比較として2019/3期のIFRSに準拠した数値も併記しています。  
2. 日本基準の「売上高」は「売上収益」となります。

< 金融商品ディスクロージャー関連 >

当分野の売上収益は、前年同期比113百万円減（同1.6%減）の6,920百万円となりました。主たる減収要因は、国内投資信託市場において毎月分配型を中心としたファンドの新規設定が減速したことと、J-REITのIPO・ファイナンスが減少したこととあります。またこれに加えて外国投信市場も低迷しました。

このような厳しい環境は当面続くものと思われ、また上場会社同様にディスクロージャーの電子化が一層進展することが想定されますが、当社は当分野を大きな成長が見込める領域と考えております。金融商品の運用業務・開示実務を効率化するシステムサービスの導入促進・機能拡張を進め、アウトソーシングサービスの拡大、金融商品関連の販売用資料の受注拡大等、中長期的な成長につながるサービス領域の拡張に引き続き取り組みました。

**ポイント** 投信関連の主力製品、J-REIT関連製品の低迷により減収



- ▲ プラス要因**
- 金融商品の各種販促ツールの受注増
  - 金融機関のディスクロージャー誌の受注増
- ▼ マイナス要因**
- 一部ファンドの新規設定減速に伴う国内投信運用報告書・届出書等の受注減
  - J-REIT市場のIPO・ファイナンス関連製品、外国投信関連製品の受注減

(注) 1. 2020/3期 有価証券報告書より、従来の「日本基準」に替えて「国際会計基準（IFRS）」を適用しております。また、前期比較として2019/3期のIFRSに準拠した数値も併記しています。  
2. 日本基準の「売上高」は「売上収益」となります。

< データベース関連 >

当分野の売上収益は、前年同期比374百万円増（同51.4%増）の1,103百万円となりました。主要サービス「eol」を中心としたデータベースの機能強化を行い、既存顧客の契約更新と新規受注が順調に推移いたしました。また、2018年11月に連結子会社化した株式会社アイ・エヌ情報センターの通期売上のうち、2019年4月から2019年10月までの7か月分が当分野に加算されました。

当社及び株式会社アイ・エヌ情報センターでは、グループシナジーを最大化すべく、販路の相互活用や両社が保有するコンテンツを融合させた新たなサービスの企画・開発を進めております。

**ポイント** 主力サービスの契約更新・新規受注堅調、㈱アイ・エヌ情報センター子会社化により増収



- ▲ プラス要因**
- 既存顧客の契約更新が好調に推移
  - 新規顧客の受注獲得
  - ㈱アイ・エヌ情報センター子会社化

※19/3期中(18年11月)に株式会社アイ・エヌ情報センターを子会社化

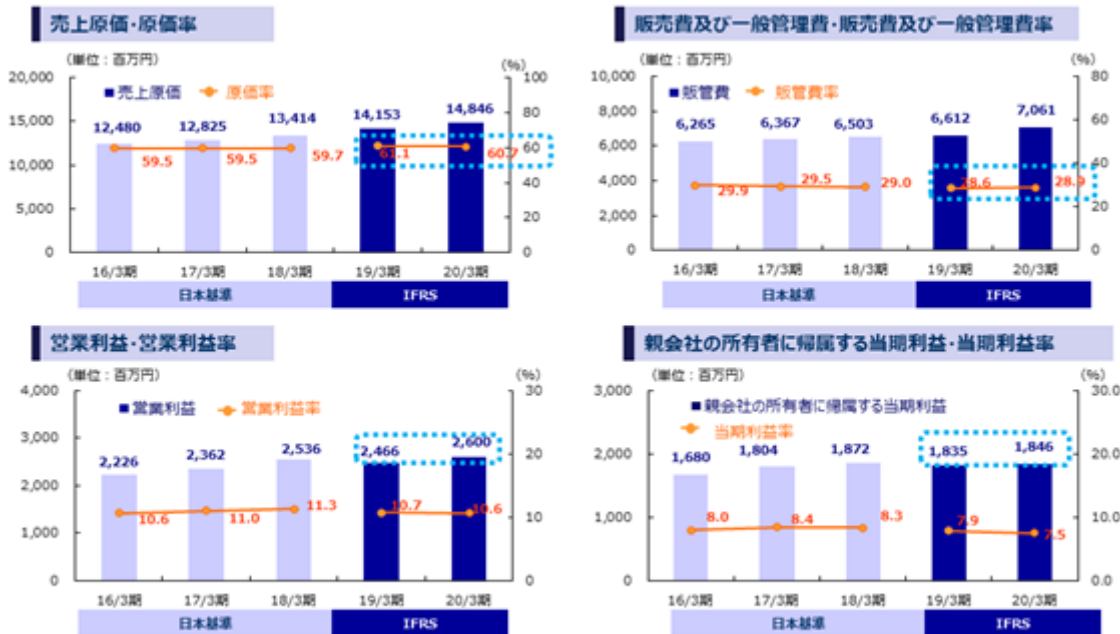
(注) 1. 2020/3期 有価証券報告書より、従来の「日本基準」に替えて「国際会計基準（IFRS）」を適用しております。また、前期比較として2019/3期のIFRSに準拠した数値も併記しています。  
2. 日本基準の「売上高」は「売上収益」となります。

当連結会計年度が5.6%の増収となったのに対し、営業利益が5.4%の増益にとどまった要因についてご説明いたします。

当社では、中長期的な事業領域の拡張に対応する体制強化を進めております。当連結会計年度においては、システム部門等の成長分野を中心とした人財投資を継続したことで、労務費・人件費が増加しました。また、システム投資に伴う償却費も増加しました。全社的なコストの削減や生産性の向上につとめ、当連結会計年度の売上原価率は前年同期比0.4ポイント減の60.7%に抑制したものの、販売費及び一般管理費率は前年同期比0.3ポイント増の28.9%となっております。

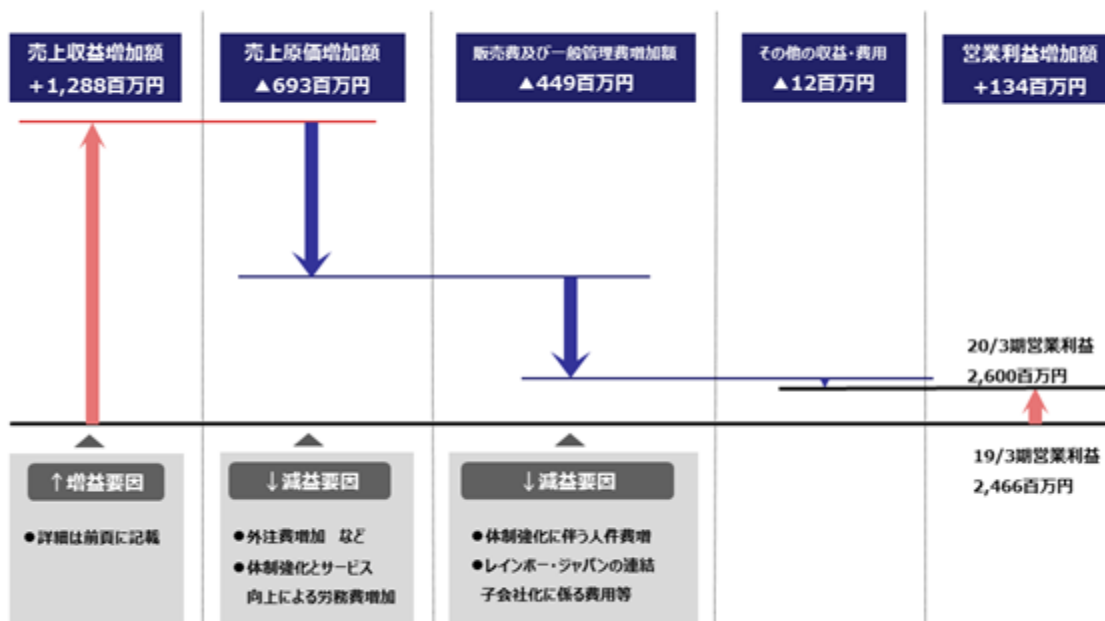
これらの結果、営業利益は2,600百万円（前年同期比5.4%増）となり、前年同期比0.1ポイント減の10.6%となりました。

**ポイント** 販売費及び一般管理費率は微増するも、売上原価率の抑制により増益



(注) 1. 2020/3期 有価証券報告書より、従来の「日本基準」に替えて「国際会計基準（IFRS）」を適用しております。また、前期比較として2019/3期のIFRSに準拠した諸数値も併記しています。  
2. 日本基準の「販管費」は「販売費及び一般管理費」、「親会社株主に帰属する当期純利益」は「親会社の所有者に帰属する当期利益」となります。

**ポイント** 売上収益増+1,288百万円>売上原価増・販売費及び一般管理費増・その他費用増△1,154百万円により、営業利益増+134百万円



(注) 1. 2020/3期 有価証券報告書より、従来の「日本基準」に替えて「国際会計基準（IFRS）」を適用しております。また、前期比較として2019/3期のIFRSに準拠した諸数値も併記しています。  
2. 日本基準の「売上高」は「売上収益」、「販管費」は「販売費及び一般管理費」となります。

資本の財源及び資金の流動性

当社グループの当連結会計年度の営業キャッシュ・フローは4,172百万円であり、当連結会計年度末の現金及び現金同等物（以下「資金」という）は、11,911百万円保有しております。

当社グループの資本の財源及び資金の流動性については、資金調達は自己資金を基本とし、必要に応じて金融機関からの借入を行っております。強固な財務基盤を維持しつつ営業キャッシュ・フローにより得られた資金を、開示実務支援システム等の開発投資や配当等の株主還元へと配分しております。

当社グループの運転資金需要のうち主なものは、製造費、販売費及び一般管理費等の営業費用であります。投資を目的とした資金需要は、主に設備投資等によるものであります。

当社グループは、事業運営上必要な流動性と資金の源泉を安定的に確保することを基本方針としております。

短期運転資金は自己資金及び金融機関からの短期借入を基本としており、設備投資や長期運転資金の調達につきましては、金融機関からの長期借入を基本としております。

なお、当連結会計年度末における有利子負債の残高は借入金及びリース負債を含む2,080百万円となっております。

#### 重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

当社グループの連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（以下「連結財務諸表規則」という。）第93条の規定によりIFRSに準拠して作成しております。この連結財務諸表の作成に当たって、必要と思われる見積りは、合理的な基準に基づいて実施しております。

なお、当社グループの連結財務諸表で採用する重要な会計方針、会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等（1）連結財務諸表 連結財務諸表注記 3 . 重要な会計方針 4 . 重要な会計上の見積り及び判断」に記載しております。

#### 並行開示情報

連結財務諸表規則（第7章及び第8章を除く。以下、「日本基準」）により作成した要約連結財務諸表は、以下のとおりであります。

なお、日本基準により作成した当連結会計年度の要約連結財務諸表については、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査を受けておりません。

#### イ 要約連結貸借対照表（日本基準）

（単位：千円）

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産	16,737,964	17,597,547
固定資産		
有形固定資産	4,506,112	4,595,928
無形固定資産	1,942,765	2,471,621
投資その他の資産	5,606,970	5,496,656
固定資産合計	12,055,848	12,564,206
資産合計	28,793,812	30,161,753
<b>負債の部</b>		
流動負債	3,969,191	4,633,225
固定負債	2,939,112	3,058,760
負債合計	6,908,303	7,691,985
<b>純資産の部</b>		
株主資本	21,378,443	21,905,113
その他の包括利益累計額	458,106	506,827
非支配株主持分	48,960	57,828
純資産合計	21,885,509	22,469,767
負債純資産合計	28,793,812	30,161,753

□ 要約連結損益計算書及び要約連結包括利益計算書（日本基準）  
要約連結損益計算書

（単位：千円）

	前連結会計年度 （自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）	当連結会計年度 （自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）
売上高	23,157,864	24,446,337
売上原価	14,076,210	14,788,440
売上総利益	9,081,654	9,657,897
販売費及び一般管理費	6,582,234	7,086,338
営業利益	2,499,420	2,571,558
営業外収益	283,527	159,401
営業外費用	10,432	13,125
経常利益	2,772,515	2,717,834
特別利益	154,676	-
税金等調整前当期純利益	2,927,191	2,717,834
法人税等合計	955,204	896,999
当期純利益	1,971,987	1,820,835
非支配株主に帰属する当期純利益	1,734	4,255
親会社株主に帰属する当期純利益	1,970,254	1,816,581

要約連結包括利益計算書

（単位：千円）

	前連結会計年度 （自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）	当連結会計年度 （自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）
当期純利益	1,971,987	1,820,835
その他の包括利益合計	249,083	48,721
包括利益	1,722,904	1,869,556
（内訳）		
親会社株主に係る包括利益	1,721,171	1,865,301
非支配株主に係る包括利益	1,734	4,255

八 要約連結株主資本等変動計算書（日本基準）

前連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本	その他の包括利益 累計額	非支配株主持分	純資産合計
当期首残高	20,762,817	707,189	-	21,470,006
当期変動額合計	615,626	249,083	48,960	415,502
当期末残高	21,378,443	458,106	48,960	21,885,509

当連結会計年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本	その他の包括利益 累計額	非支配株主持分	純資産合計
当期首残高	21,378,443	458,106	48,960	21,885,509
当期変動額合計	526,670	48,721	8,868	584,259
当期末残高	21,905,113	506,827	57,828	22,469,767

二 要約連結キャッシュ・フロー計算書（日本基準）

（単位：千円）

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー	2,263,568	3,437,592
投資活動によるキャッシュ・フロー	779,003	1,715,883
財務活動によるキャッシュ・フロー	1,705,098	1,701,135
現金及び現金同等物に係る換算差額	241	1,980
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	220,773	18,594
現金及び現金同等物の期首残高	13,613,077	13,392,304
現金及び現金同等物の期末残高	13,392,304	13,410,898

ホ 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項の変更（日本基準）

前連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

該当事項はありません。

経営成績等の状況の概要に係る主要な項目における差異に関する情報

IFRSにより作成した連結財務諸表における主要な項目と日本基準により作成した場合の連結財務諸表におけるこれらに相当する項目との差異に関する事項は、以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 連結財務諸表注記 37. 初度適用」に記載のとおりであります。

当連結会計年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

（のれんの償却）

日本基準ではのれんを一定期間にわたり償却しておりましたが、IFRSではのれんの償却は行われず、每期減損テストを実施することが要求されます。この影響により、IFRSでは日本基準に比べて販売費及び一般管理費が30百万円減少しております。

(退職給付に係る費用)

日本基準では発生した数理計算上の差異及び過去勤務費用をその他の包括利益として認識した後に一定期間にわたり償却しておりました。IFRSでは数理計算上の差異は発生時にその他の包括利益として即時認識するとともに、直ちに利益剰余金に振り替えております。過去勤務費用は発生時に損益として認識しております。この影響により、IFRSでは日本基準に比べて売上原価並びに販売費及び一般管理費が81百万円減少し、その他の包括利益が29百万円減少しております。

(リース)

日本基準では借手のリースについてファイナンス・リースとオペレーティング・リースに分類し、オペレーティング・リースについては通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理を行っていましたが、IFRSでは原則としてすべての借手のリースについて使用権資産及びリース負債を計上しております。この影響により、IFRSでは日本基準に比べて使用権資産及びリース負債がそれぞれ1,839百万円及び1,852百万円増加しております。

4【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5【研究開発活動】

該当事項はありません。



### 第3【設備の状況】

#### 1【設備投資等の概要】

当社グループの当連結会計年度における設備投資総額(使用権資産含む)は1,688百万円であります。その主なものは、開示業務支援システム等の開発費用993百万円であります。

なお、当社グループの事業セグメントは、「第5 経理の状況 1連結財務諸表等(1)連結財務諸表 連結財務諸表注記 6.セグメント情報」に記載のとおり、ディスクロージャー関連事業の単一セグメントであるため、セグメント別の設備の状況の記載はしていません。また、当連結会計年度中において、重要な影響を及ぼす設備の除却、売却等はありません。

#### 2【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、次のとおりであります。

##### (1) 提出会社

(2020年3月31日現在)

事業所名 (所在地)	設備の 内容	帳簿価額							従業員数 (人)
		建物及び 構築物 (千円)	機械装置 及び運搬具 (千円)	土地 (千円) (面積㎡)	ソフトウェア (千円)	使用権資産 (千円)	その他 (千円)	合計 (千円)	
本社 (東京都港区)	販売設備	121,846	2,952	-	2,037,110	1,468,063	127,082	3,757,053	564 [116]
戸田工場 (埼玉県戸田市)	製版設備 印刷設備 製本設備	841,397	488,361	1,379,367 (4,255.29)	-	-	10,361	2,719,486	112 [47]
大阪支店 (大阪市中央区)	販売設備	12,991	-	-	-	52,787	5,211	70,989	78 [21]
名古屋支店 他3営業所他 (名古屋市中区 他)	販売設備	15,397	-	-	-	54,599	10,897	80,892	29 [4]
(株)アスプロコミュニ ケーションズ内 (富山県富山市)	文字処理 加工用設 備	1,707	-	-	-	-	106,059	107,766	- -

##### (2) 国内子会社

(2020年3月31日現在)

会社名	事業所名 (所在地)	設備の 内容	帳簿価額							従業員数 (人)
			建物及び 構築物 (千円)	機械装置 及び運搬具 (千円)	土地 (千円) (面積㎡)	ソフトウェア (千円)	使用権資産 (千円)	その他 (千円)	合計 (千円)	
(株)アス プロコミュニ ケーションズ	本社 (富山県 富山市)	文字処 理加工 用設備	357,016	-	672,509 (34,551.12)	126,275	16,258	21,567	1,193,625	352 [79]
日本財務 翻訳(株)	本社 (東京都 港区)	事務用 機器	25,127	-	-	21,127	106,124	2,100	154,478	49 [51]
(株)アイ・ エヌ情報 センター	本社 (東京都 千代田区)	事務用 機器	27,557	-	-	2,542	57,507	-	87,606	42 [2]
(株)レイ ンポー・ ジャパン	本社 (東京都 渋谷区)	事務用 機器	5,875	-	-	9,284	47,085	-	62,244	47 [1]

( 3 ) 在外子会社

( 2020年 3月31日現在 )

会社名	事業所名 (所在地)	設備の 内容	帳簿価額							従業員数 (人)
			建物及び 構築物 (千円)	機械装置 及び運搬具 (千円)	土地 (千円) (面積㎡)	ソフトウェア (千円)	使用権資産 (千円)	その他 (千円)	合計 (千円)	
台湾普羅 納克廈斯 股份有限 公司	本社 (台湾台北 市)	事務用 機器	8,359	-	-	818	150,604	-	159,781	28 [3]
PRONEXUS VIETNAM CO., LTD	本社 (Ho Chi Minh City, Viet Nam)	事務用 機器	1,065	-	-	1,668	35,234	10,671	48,638	3 [1]

- (注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、工具器具及び備品等であります。  
 なお、金額には消費税等を含めておりません。  
 2. 従業員数のうち [ ] は、平均臨時雇用者数を外書しております。  
 3. 上記の他、連結会社以外の者へ賃貸している土地186,322千円があります。

3 【設備の新設、除却等の計画】

- ( 1 ) 重要な設備の新設  
 該当事項はありません。
- ( 2 ) 重要な設備の改修  
 該当事項はありません。
- ( 3 ) 重要な設備の除却及び売却  
 該当事項はありません。

## 第4【提出会社の状況】

### 1【株式等の状況】

#### (1)【株式の総数等】

##### 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	139,500,000
計	139,500,000

##### 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2020年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2020年6月25日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	30,716,688	30,716,688	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数100株
計	30,716,688	30,716,688		

#### (2)【新株予約権等の状況】

##### 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

##### 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

##### 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

#### (3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

#### (4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金 増減額 (千円)	資本金 残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
2015年5月15日 (注)	2,883,249	33,444,451	-	3,058,651	-	4,683,596
2018年5月15日 (注)	2,727,763	30,716,688	-	3,058,651	-	4,683,596

(注) 自己株式の消却による減少であります。

(5) 【所有者別状況】

2020年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	19	22	75	62	3	10,972	11,153	-
所有株式数(単元)	-	24,556	1,430	11,337	43,016	3	226,720	307,062	10,488
所有株式数の割合(%)	-	8.00	0.47	3.69	14.01	0.00	73.84	100.00	-

(注) 1. 自己株式3,797,152株は、「個人その他」に37,971単元、「単元未満株式の状況」に52株を含めて記載しております。

2. 「その他の法人」及び「単元未満株式の状況」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が、それぞれ113単元及び64株含まれております。

3. 単元未満株式のみを所有する株主数1,223人であり、合計株主数は12,376人であります。

(6) 【大株主の状況】

2020年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
上野 守生	東京都港区	7,267	26.99
NORTHERN TRUST CO.(AVFC) RE FIDELITY FUNDS(常任代理人 香港上海銀行東京支店)	50 BANK STREET CANARY WHARF LONDON E14 5NT, UK(東京都中央区日本橋三丁目11-1)	1,857	6.90
上野 誠子	東京都港区	1,411	5.24
プロネクサス社員持株会	東京都港区海岸一丁目2番20号	1,187	4.41
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11-3号	840	3.12
上野 吉生	埼玉県さいたま市南区	796	2.96
上野 剛史	東京都港区	733	2.72
峯戸松 明子	東京都港区	730	2.71
岡田 達也	東京都港区	563	2.09
上野 大介	東京都港区	463	1.72
計	-	15,846	58.86

(注) 1. 上記のほか、自己株式が3,797,152株あります。

2. 上記の所有株式数のうち、信託業務に係る株式数は次のとおりであります。

日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口) 840千株

3. 2019年6月21日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書において、フィデリティ投信株式会社が2019年6月14日現在で以下の株式を所有している旨が記載されているものの、当社として2020年3月31日現在における実質所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。

大量保有者	フィデリティ投信株式会社
住所	東京都港区六本木七丁目7番7号
保有株券等の数	株式 1,972,487株
株券等保有割合	6.42%

(7)【議決権の状況】  
【発行済株式】

2020年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 3,797,100	-	単元株式数100株
完全議決権株式(その他)	普通株式 26,909,100	269,091	同上
単元未満株式	普通株式 10,488	-	1単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	30,716,688	-	-
総株主の議決権	-	269,091	-

(注)1. 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、証券保管振替機構名義の株式が11,300株(議決権の数113個)含まれております。

2. 「単元未満株式」欄の普通株式には、自己株式が52株及び証券保管振替機構名義の株式が64株含まれております。

【自己株式等】

2020年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
株式会社プロネクサス	東京都港区海岸一丁目2番20号	3,797,100	-	3,797,100	12.36
計	-	3,797,100	-	3,797,100	12.36

## 2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号に該当する普通株式の取得

### (1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

### (2)【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(2019年1月31日)での決議状況 (取得期間 2019年2月1日~2019年6月28日)	900,000	1,000,000,000
当事業年度前における取得自己株式	434,900	523,058,700
当事業年度における取得自己株式	362,200	476,891,500
残存決議株式の総数及び価額の総額	102,900	49,800
当事業年度の末日現在の未行使割合 (%)	11.43	0.00
当期間における取得自己株式	-	-
提出日現在の未行使割合 (%)	11.43	0.00

### (3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

### (4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他 (-)	-	-	-	-
保有自己株式数	3,797,152	-	3,797,152	-

(注) 当期間における保有自己株式数には、2020年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

### 3【配当政策】

当社は、株主への利益還元を経営の重要課題と認識し、安定配当をベースに業績及び経営環境等を総合的に加味した配当の継続を基本方針とし、原則40%以上の連結配当性向を基準としております。

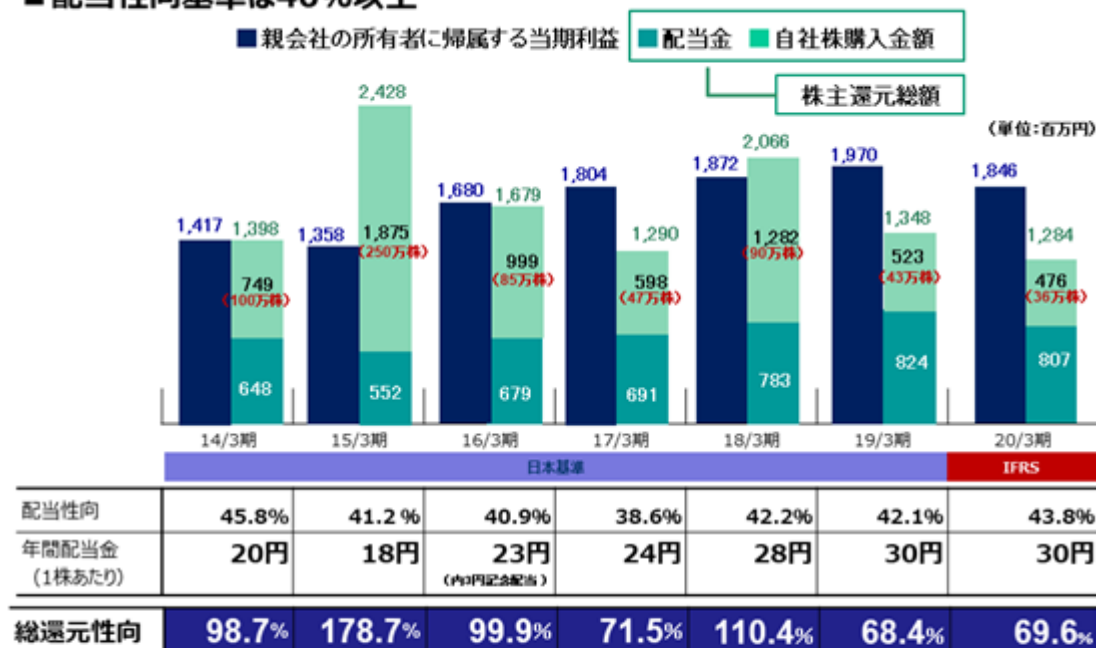
当事業年度の配当金につきましては、中間配当は15円、期末配当は15円とし、年間で30円といたしました（連結配当性向43.8%）。

配当支払い回数につきましては、中間期末日、期末日を基準日とした年2回を継続する方針であります。また、剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めがある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議によって定めることとする旨を定款で定めております。

内部留保資金につきましては、設備投資等の資金需要に備える所存であります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2019年10月31日 取締役会決議	404	15
2020年5月20日 取締役会決議	404	15

#### ■配当性向基準は40%以上



#### 来期配当について

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う通期業績影響額の算定が困難ではありますが、十分な配当原資があることと、安定配当をベースとする基本方針を勘案し、中間・期末ともに15円、これに創立90周年の記念配当2円を加えた年間32円を予想しています。

(注) 1. 2020/3期 有価証券報告書より、従来の「日本基準」に替えて「国際会計基準 (IFRS)」を適用しております。また、前期比較として2019/3期のIFRSに準拠した諸数値も併記しています。

2. 日本基準の「親会社株主に帰属する当期純利益」は「親会社の所有者に帰属する当期利益」となります。

## 4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

### (1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

#### コーポレート・ガバナンスの基本的な考え方

当社は、持続的な成長と中長期的な企業価値の向上を目指し、経営を効率化し、経営責任を適切・公正に遂行するため、絶えず実効性の面から経営管理体制の見直しと改善に努めております。

また、タイムリーかつ正確な経営情報の開示に努め、経営活動に対する監視・チェック機能の強化、透明性の向上、コンプライアンス及びリスク管理の徹底を図り、コーポレート・ガバナンスを充実させていくことを経営上の最重要課題のひとつと位置付けております。

#### 企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

##### イ. 企業統治の体制の概要

- ・当社は、監査役設置会社であり、取締役10名（うち社外取締役3名）、監査役4名（うち社外監査役3名）を選任しております。
- ・取締役会は、下記の議長及び構成員の計10名で構成されており、当社の経営に関わる重要事項の審議並びに意思決定、会社の事業、経営全般に対する監督を行います。また、取締役会には、すべての監査役が出席し、取締役の業務執行の状況を監査できる体制となっております。

議長：代表取締役社長 上野剛史

構成員：取締役会長 上野守生、取締役 渡辺八男、取締役 川口誠、取締役 瀧正英、取締役 藤澤賢二、取締役 大和田雅博、社外取締役 長妻貴嗣、社外取締役 清水謙、社外取締役 酒井一郎

- ・当社は、経営と執行の分離の観点から執行役員制度を導入し、執行役員は、取締役会が定める組織規程及び職務権限規程に基づき、所管する各部門の業務を執行します。
- ・取締役会は、中期経営計画及び年度計画を定め、当社として達成すべき目標を明確化するとともに、各執行役員の所管する部門ごとに業績目標を明確化し、その進捗を執行役員会で定期的に報告させ、執行役員の業務執行を監督します。
- ・業務執行に関する重要事項の審議・決定及び取締役会の事前審議機関として、経営会議を原則毎週1回開催し、各部門の業務執行、予算執行の適正化並びに意思決定の迅速化を図ります。経営会議は代表取締役社長上野剛史を議長とし、社内取締役及び常務執行役員以上で構成されております。
- ・監査役会は、下記の議長及び構成員の計4名で構成されており、監査の方針、監査計画、監査の方法及び監査業務の分担等を決定しております。

議長：常勤監査役 佐瀬あかね

構成員：常勤社外監査役 中川幸三、社外監査役 須藤修、社外監査役 忍田卓也

- ・当社は、これらの企業統治に関する考え方や枠組みを示すことを通じて、コーポレート・ガバナンスのさらなる充実を図ることを目的とした「プロネクサス コーポレートガバナンス・ガイドライン」を2015年11月13日に制定いたしました。

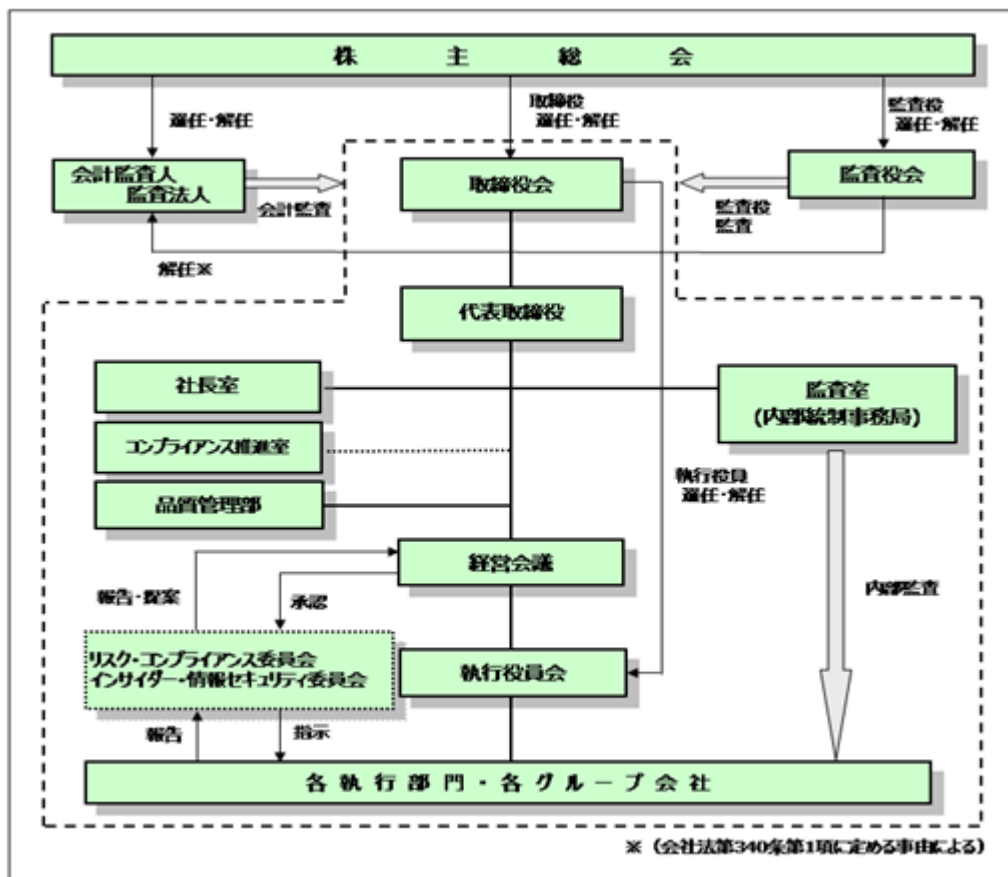
##### ロ. 当該体制を採用する理由

当社は、経営の意思決定機能と、執行役員による業務執行を管理監督する機能を取締役会が持つことにより、経営効率の向上と的確かつ戦略的な経営判断が可能な経営体制をとっております。さらに取締役会に対する十分な監視機能を発揮するため、社外取締役3名を選任するとともに、監査役4名中の3名を社外監査役としています。社外取締役は、長年にわたる企業経営に基づく見識をもとに、取締役会に対して的確な提言と監視機能を果たしています。さらに、社外監査役はそれぞれ高い専門性を有し、その専門的見地からの確な経営監視を実行しております。また、社外取締役及び社外監査役の6名はそれぞれ、当社との人的関係、資本的關係、または取引関係その他の利害関係において当社の一般株主との利益相反が生じるおそれなく、東京証券取引所の定めに基づく独立役員としての要件を満たしており、うち社外取締役3名と社外監査役2名を独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。

これらの体制により、十分なコーポレート・ガバナンスを構築しております。

なお、提出日現在における当社のコーポレート・ガバナンス体制の概要図は以下のとおりであります。





企業統治に関するその他の事項

イ. 内部統制システム、リスク管理体制及び子会社の業務の適正を確保するための体制の整備の状況

当社は取締役会において以下のとおり「内部統制システムの基本方針」を決議しております。

- (1) 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
  - a. 当社の社会的責任及び企業倫理を果たすため、経営理念に基づく「社会・環境行動基準」を定め、当社の役員及び従業員（以下、社員等という。）に周知徹底させる。
  - b. 全社のコンプライアンスを推進するため、コンプライアンス推進室を設置し、関連規程を整備するとともに、社員等に対し、マニュアルの配布・教育等を定期的に行うことで、コンプライアンスに対する意識の維持・向上を図る。
  - c. 第三者機関による内部通報制度を導入し、不正行為等の早期発見、是正に努める。
  - d. 市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力及び団体とは一切の関係を持たず、毅然とした態度で対応する。
- (2) 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

取締役の職務の執行に係る重要な意思決定及び報告等に関する情報は、「文書管理規程」等社内規程に基づき、保存及び管理するものとする。
- (3) 損失の危険の管理に関する規程その他の体制
  - a. 当社は、「リスク管理規程」に基づき、経営に重大な影響を及ぼすおそれのあるリスクに対し、未然防止、再発防止及び迅速な対応に努めるものとする。
  - b. 社員等は、リスクを認識した際、その情報内容及び入手先等の情報を迅速かつ正確にリスク管理統括部門である総務部へ報告する。
  - c. 自然災害など緊急かつ重大なリスク発生時に、早期の事業再開及び可能な限りのリスク低減を目的として「事業継続管理規程」を定め、当社事業の継続を確保するための体制を整備する。
- (4) 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
  - a. 取締役会は、当社の経営に関わる重要事項の審議並びに意思決定、会社の事業、経営全般に対する監督を行う。
  - b. 当社は、経営と執行の分離の観点から執行役員制度を導入し、執行役員は、取締役会が定める組織規程及び職務権限規程に基づき、所管する各部門の業務を執行する。
  - c. 取締役会は、中期経営計画及び年度計画を定め、当社として達成すべき目標を明確化するとともに、各執行役員の所管する部門ごとに業績目標を明確化し、その進捗を執行役員会で定期的に報告させ、執行役員の業務執行を監督する。

- d. 業務執行に関する重要事項の審議・決定及び取締役会の事前審議機関として、社内取締役及び常務執行役員以上で構成する経営会議を原則毎週1回開催し、各部門の業務執行、予算執行の適正化並びに意思決定の迅速化を図る。
- (5) 会社及びその子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
- a. 当社は、経営理念及び「社会・環境行動基準」に基づき、グループ全体のコンプライアンス体制の構築に努める。
- b. 当社は「プロネクサスグループ基本規程」に基づき、各グループ会社の状況に応じて必要な管理を行う。また、各グループ会社の経営成績その他の重要な情報について、当社への定期的な報告を義務付ける。
- c. 内部監査部門は、各グループ会社の業務の状況について、定期的に監査を行う。
- (6) 監査役の職務を補助すべき使用人に関する事項
- a. 当社は、監査役がその職務を補助すべき使用人をおくことを求めた場合、必要な人員を配置する。また、当該使用人は監査役の指揮命令に従うものとし、取締役からの指揮は受けないものとする。
- b. 当該使用人の人事異動、人事評価及び懲戒に関しては、監査役会の事前の同意を得るものとする。
- (7) 当社及び子会社の取締役及び使用人が監査役に報告をするための体制その他の監査役への報告に関する体制
- a. 当社及び子会社の社員等は、会社に重大な損失を与える事項が発生し、もしくは発生するおそれがあるとき、または社員等による違法もしくは不正な行為を発見したときは、しかるべき手順に基づき、速やかに監査役に報告する。
- b. 監査役は、必要に応じて業務執行に関する報告、説明または関係資料の提出を当社及び子会社の社員等に求めることができる。
- (8) 上記(7)の報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
- 社員等からの監査役への通報については、法令等に従い通報内容を秘密として保持するとともに、当該通報者に対する不利益な取扱いを禁止する。
- (9) 当社の監査役の職務の執行について生ずる費用または債務の処理に係る方針に関する事項
- a. 当社は、監査役がその職務の執行について、当社に対し、会社法第388条に基づく費用の前払い等を請求したときは、担当部門において必要でない認められた場合を除き、速やかに当該費用または債務を処理する。
- b. 監査役が職務執行に必要であると判断した場合、弁護士、公認会計士等の専門家に意見・アドバイスを依頼するなど必要な監査費用を認める。
- (10) その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制
- a. 社員等の監査役監査に対する理解を深め、監査役監査の環境を整備するよう努める。
- b. 社長との定期的な会議（意見交換会など）を開催し、また内部監査部門との連携を図り、適切な意思疎通及び効果的な監査業務の遂行を図る。
- ロ. 責任限定契約の内容の概要
- 当社と各社外取締役及び各社外監査役は、会社法第427条第1項の規定により、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は法令が規定する額としております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該社外取締役または社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意かつ重大な過失がないときに限られます。
- ハ. 反社会的勢力排除に向けた基本的な考え方
- 当社は、「社会・環境行動基準」において、暴力団対策法等の趣旨に則り、反社会的勢力からの不当な要求に応じたり、反社会的勢力を利用するなどの行為を行わないことを遵守事項として定めております。
- 二. 反社会的勢力排除に向けた体制の整備状況
- (1) 対応統括部署及び不当要求防止責任者の設置状況
- 当社は不当要求に対する対応統括部署として、本社総務部が中心となり担当しております。また、全社に係る不当要求防止責任者は総務部長が担当し、各支店・営業所等の事業場については、各拠点の総務部門の責任者あるいは所長等が各事業場の責任者を兼ねております。
- (2) 外部の専門機関との連携状況
- 管轄警察署担当係官並びに弁護士等の専門家とは、平素から緊密な連携を保ち、相談、助言、指導等を受けております。

(3) 反社会的勢力排除に関する情報の収集・管理状況

当社は、公益社団法人警視庁管内特殊暴力防止対策連合会及び管轄警察特殊暴力防止対策協議会に加入し、これらの主催する講習会等に積極的に参加し、情報収集にあたるほか管轄警察署及び同担当係官との連携により得られた情報に基づき、反社会的勢力に関する最新情報を総務部において管理しております。

(4) 今後の整備に係る課題

当社は、対応統括部署とコンプライアンス推進部門が連携し、対応マニュアルの整備と教育、研修活動を2008年度より実施しております。

ホ．取締役会にて決議できる株主総会決議事項

当社は、剰余金の配当及び自己株式の取得等会社法第459条第1項各号に定める事項について、法令に別段の定めがある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議により行うことができる旨定款に定めております。これは、機動的な資本政策及び株主への機動的な利益還元を図ることを目的とするものであります。

ヘ．取締役の定数

当社の取締役は10名以内とする旨定款に定めております。

ト．取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。

また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨定款に定めております。

チ．株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

株式会社の支配に関する基本方針について

イ．基本方針の内容の概要

当社は、金融商品取引所に株式を上場している者として、市場における当社株式の自由な取引を尊重し、特定の者による当社株式の大規模買付行為であっても、当社グループの企業価値ひいては株主共同の利益の確保・向上に資するものである限り、これを一概に否定するものではありません。また、最終的には株式の大規模買付提案に応じるかどうかは株主の皆様のご決定に委ねられるべきと考えております。

ただし、株式の大規模買付提案のなかには、たとえばステークホルダーとの良好な関係を保ち続けることができない可能性があるなど、当社グループの企業価値ひいては株主共同の利益を損なうおそれのあるものや、当社グループの価値を十分に反映しているとはいえないもの、あるいは株主の皆様が最終的な決定をなされるために必要な情報が十分に提供されないものもあり得ます。

そのような提案に対して、当社取締役会は、株主の皆様から負託された者の責務として、株主の皆様のために、必要な時間や情報の確保、株式の大規模買付提案者との交渉などを行う必要があると考えております。

ロ．基本方針の実現に資する取り組みについての概要

当社は、1930年に株券印刷の専門会社として創業以来、株主総会関連書類、決算関連書類、新規上場やエクイティファイナンス関連書類、投資信託・REIT関連書類、そしてIRツール・コンテンツへと、ディスクロージャー分野全般に事業分野を広げてまいりました。また、近年は法制度の改正や情報開示の電子化が相次ぐなかで、お客様への支援サービスの充実に取り組んでまいりました。こうした諸活動の結果、定期製品については市場シェア50%以上(注)を占め、お客様からも多くのリピートをいただいております。

(注) 全上場会社のうち、株主総会招集通知と有価証券報告書のいずれかを受注している顧客数の割合(2020年3月末現在)

このような当社及び当社グループの企業価値の主な源泉は、法制度に適合した正しい情報開示を支援するコンサルティングサービス、お客様の情報開示実務を効率化・高精度化するシステムサービス、短納期でミスのない高品質の製品作りを集中的に行える生産体制にあり、その蓄積がブランド価値としてお客様に浸透するとともに、良好な業績の継続と現在の企業価値につながっていると自負いたしております。

また当社は、ディスクロージャー実務支援の業務を通して資本市場の健全な成長に貢献する社会的インフラともいべき役割を担っております。こうした役割を最大限に発揮できる事業運営体制を整備、充実させていくことが、結果として企業価値及び株主共同利益の最大化につながるものと考えております。

当社は、株主総会招集通知をはじめとしたディスクロージャーのさらなる電子化、開示の統合化等大きな事業環境の変化に対応し、当社の成長力に変えていくために、2019年4月から3か年にわたる「新中期経営計画2021」を策定し、以下の重点戦略を推進しております。

- (1) 電子化時代のお客様サポート体制の構築
- (2) システム拡張・ドキュメントプラットフォームへの成長
- (3) 前中期経営計画の領域拡張継続とさらなる進化
- (4) 領域拡張と収益拡大を両立する社内基盤構築

ハ．基本方針に照らして不適切な者によって当該株式会社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取り組みの概要

当社は、2020年5月14日開催の取締役会決議に基づき、現プランの一部を変更し、「当社株式の大規模買付行為に関する対応策（買収防衛策）」を継続することを決定いたしました。また、2020年6月24日開催の当社定時株主総会に付議し、承認をいただいております。

詳細につきましては、下記アドレスから2020年5月14日付開示資料をご参照ください。

（当社ホームページ）<https://www.pronexus.co.jp/news/disclose.html>

## ニ．本プランの合理性

- (1) 基本方針に沿うものであること

本プランは、当社株式に対する大規模買付等がなされた際に、当該大規模買付等に応じるべきか否かを株主の皆様がご判断し、あるいは当社取締役会が代替案を提示するために必要な情報や期間を確保し、株主の皆様のために買付者等と交渉を行うこと等を可能とすることにより、当社の企業価値・株主共同の利益を確保し、向上させるという目的をもって継続されるものであります。

- (2) 株主の共同の利益を損なうものではないこと

本プランは、経済産業省及び法務省が2005年5月27日に発表した「企業価値・株主共同の利益の確保又は向上のための買収防衛策に関する指針」の定める3原則（「企業価値・株主共同の利益の確保・向上の原則」「事前開示・株主意思の原則」「必要性・相当性確保の原則」）をすべて充足しており、経済産業省に設置された企業価値研究会が2008年6月30日に発表した報告書「近時の諸環境の変化を踏まえた買収防衛策の在り方」の内容も踏まえたものとなっております。

- (3) 会社役員の状態の維持を目的とするものではないこと

当社は、本プランの導入にあたり、当社取締役会の恣意的判断を排除するため、対抗措置の発動等を含む本プランの運用に関する決議及び勧告を客観的に行う取締役会の諮問機関として当社の業務執行を行う経営陣から独立した者から構成されている独立委員会を設置しております。

また本プランは、当社の株主総会で選任された取締役で構成される取締役会により、いつでも廃止することができるものとされていることから、デッドハンド型買収防衛策（取締役会の構成員の過半数を交代させても、なお発動を阻止できない買収防衛策）ではありません。

( 2 ) 【 役員の状況】

役員一覧

男性13名 女性1名 ( 役員のうち女性の比率 7.1% )

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 ( 千株 )
取締役会長	上野 守生	1939年11月5日生	1966年1月 当社入社 当社常務取締役 1976年1月 当社代表取締役社長 2008年6月 当社代表取締役社長兼CEO(最高経営責任者) 2010年6月 当社代表取締役会長 2013年4月 日本財務翻訳株式会社代表取締役会長(現任) 2015年6月 当社取締役会長(現任)	(注)4	7,267
代表取締役社長	上野 剛史	1970年1月30日生	1997年6月 当社入社 1999年10月 当社営業本部電子開示推進室長 2000年6月 当社取締役 2004年4月 当社常務取締役 2005年6月 当社専務取締役 2007年6月 当社取締役副社長 2008年6月 当社代表取締役副社長兼COO(最高執行責任者) 2010年5月 株式会社アスプロコミュニケーションズ代表取締役社長(現任) 2010年6月 当社代表取締役社長(現任) 2014年7月 台湾普羅納克廈斯股份有限公司董事長(現任) 2018年11月 株式会社アイ・エヌ情報センター代表取締役会長(現任) 2019年10月 PRONEXUS VIETNAM CO.,LTD Chairman(現任)	(注)4	733
取締役 専務執行役員 営業本部長	渡辺 八男	1953年1月21日生	1973年3月 当社入社 1999年4月 当社営業本部カスタマサービス部長 2000年6月 当社取締役 2003年6月 当社常務取締役 2008年4月 当社常務取締役 ディスクロージャー営業本部長 2008年6月 当社取締役専務執行役員 営業本部長(現任)	(注)4	105
取締役 常務執行役員 製造本部長兼 NAPS推進室担当	川口 誠	1956年3月2日生	1976年4月 当社入社 2006年6月 当社取締役 ディスクロージャー営業本部DTP制作部長 2008年6月 当社取締役常務執行役員 カスタマサービス本部長 2011年4月 当社取締役常務執行役員 制作本部長兼制作部長 2020年4月 当社取締役常務執行役員 製造本部長兼NAPS推進室担当 (現任)	(注)4	65

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 常務執行役員 業務改革システム本部長	瀧 正英	1959年5月9日生	1997年12月 当社入社 営業本部情報システム部長 2006年6月 当社取締役 情報システム室長 2008年6月 当社取締役常務執行役員 情報システム本部長兼ISO推進 室(I SMS)担当 2012年4月 当社取締役常務執行役員 情報システム本部長兼品質管理部 担当 2017年4月 当社取締役常務執行役員 業務改革システム本部長(現任)	(注)4	38
取締役 常務執行役員 管理本部長兼 コンプライアンス推進室長兼 品質管理部担当	藤澤 賢二	1958年7月18日生	2011年4月 株式会社タイトー 総務人事本部長 2014年4月 当社入社 管理本部副本部長 2014年10月 当社管理本部副本部長兼法務・コ ンプライアンス室長 2015年6月 当社取締役常務執行役員 管理本部長兼法務・コンプライ アンス室長 2020年4月 当社取締役常務執行役員 管理本部長兼コンプライアンス推 進室長兼品質管理部担当(現任)	(注)4	13
取締役 執行役員 社長室長兼グループ企業担当	大和田 雅博	1952年9月22日生	2001年2月 当社入社 2002年4月 当社営業本部総合企画室長 2003年5月 当社社長室長 2006年6月 当社取締役 社長室長 2007年7月 当社取締役 社長室長兼グループ企業担当、法 務・コンプライアンス室担当 2008年6月 当社取締役執行役員 社長室長兼グループ企業担当、法 務・コンプライアンス室担当、内 部統制推進室担当 2010年4月 当社取締役執行役員 社長室長兼グループ企業担当(現 任)	(注)4	31
取締役	長妻 貴嗣	1965年5月21日生	1992年4月 日本アイ・ビー・エム株式会社入 社 1994年1月 三協フロンテア株式会社入社 1995年6月 同社取締役経営企画部長兼営業本 部地方ブロック統括 1996年6月 同社専務取締役経営企画部長 2001年6月 同社代表取締役専務営業推進本部 長 2002年6月 同社代表取締役社長(現任) 2016年6月 当社社外取締役(現任)	(注)4	-

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役	清水 謙	1968年6月23日生	1992年4月 株式会社さくら銀行(現株式会社三井住友銀行)入行 1998年5月 株式会社ダブリュー・ディー・アイホールディング(現株式会社WDI)入社 同社取締役 2003年4月 同社代表取締役社長(現任) 2018年6月 当社社外取締役(現任)	(注)4	-
取締役	酒井 一郎	1961年12月4日生	1990年7月 酒井重工業株式会社入社 1991年6月 同社取締役経営企画室副室長 1993年7月 同社常務取締役業務推進室長 1995年3月 同社代表取締役社長(現任) 2019年6月 当社社外取締役(現任)	(注)4	-
常勤監査役	佐瀬 あかね	1962年12月28日生	1985年4月 当社入社 2012年6月 当社監査室長 2020年6月 当社常勤監査役(現任)	(注)5	53
常勤監査役	中川 幸三	1951年3月5日生	1980年11月 デロイト・ハスキング・アンド・セルズ公認会計士共同事務所(現有限責任監査法人トーマツ)入所 1985年2月 公認会計士登録(現任) 2011年10月 中川幸三公認会計士事務所所長(現任) 2011年12月 税理士登録(現任) 中川幸三税理士事務所所長(現任) 2012年6月 当社常勤社外監査役(現任) 2015年6月 キーコーヒー株式会社社外取締役(監査等委員)(現任)	(注)5	8
監査役	須藤 修	1952年1月24日生	1980年4月 弁護士登録(現任) 1999年6月 須藤・高井法律事務所パートナー 株式会社バンダイナムコホールディングス社外監査役(現任) 2011年6月 三井倉庫株式会社(現三井倉庫ホールディングス株式会社)社外監査役(現任) 2016年5月 須藤総合法律事務所パートナー(現任) 2016年6月 当社社外監査役(現任) 京浜急行電鉄株式会社社外監査役(現任)	(注)5	-
監査役	忍田 卓也	1970年3月15日生	1995年4月 弁護士登録(現任) 1999年9月 ヘインズ・アンド・ブーン法律事務所(テキサス州ヒューストン)入所 2000年1月 米国ニューヨーク州弁護士登録(現任) 2000年7月 あさひ法律事務所(現西村あさひ法律事務所)入所 2003年1月 あさひ・狛法律事務所(現西村あさひ法律事務所)パートナー(現任) 2020年6月 当社社外監査役(現任)	(注)5	-
計					8,314

取締役



上野 守生



上野 剛史



渡辺 八男



川口 誠



澁 正英



藤澤 賢二



大和田 雅博



長妻 貴嗣



清水 謙



酒井 一郎

監査役



佐瀬 あかね



中川 幸三



須藤 修



忍田 卓也

- (注) 1. 代表取締役社長上野剛史は、取締役会長上野守生の長男であります。  
2. 取締役長妻貴嗣、清水謙及び酒井一郎は、社外取締役であります。  
3. 監査役中川幸三、須藤修及び忍田卓也は、社外監査役であります。  
4. 2020年6月24日開催の定時株主総会の終結の時から1年間  
5. 2020年6月24日開催の定時株主総会の終結の時から4年間  
6. 当社は、経営の意思決定機能と業務執行機能を分離し、経営管理体制の一層の強化を図るべく、2008年6月24日付で執行役員制度を導入しております。取締役を兼務している者を除いた執行役員の状況は以下のとおりであります。



( 所属本部順 )

氏 名	職 名
杉原 信好	常務執行役員 営業本部ディスクロージャー事業部長
松浦 茂樹	執行役員 営業本部ディスクロージャー事業部営業第2部、営業第3部、営業第4部、営業第5部、業務推進第1部、業務推進第2部 管掌
天川 泰一	執行役員 営業本部ディスクロージャー事業部営業第1部、営業第6部、営業開発第2部、金融ディスクロージャー営業部 管掌 兼営業開発第1部長
鹿倉 一志	執行役員 営業本部ディスクロージャー事業部名古屋支店長
石橋 正明	常務執行役員 営業本部大阪支店長
塩津 裕一	常務執行役員 営業本部ファイナンシャル事業部長
新川 昇	執行役員 営業本部ファイナンシャル事業部営業部長
松本 英也	執行役員 営業本部ファイナンシャル事業部不動産投信営業部長
小澤 則夫	執行役員 営業本部ファイナンシャル事業部金融ソリューション営業部長
林 清隆	常務執行役員 営業本部ソリューション事業部長
安藤 誠	常務執行役員 営業本部開示・教育支援事業部担当
森貞 裕文	常務執行役員 営業本部システムコンサルティング事業部長兼コンサルティング営業部長
佐藤 信寿	常務執行役員 製造本部ドキュメントサポートセンター長
小野 博之	執行役員 製造本部ドキュメントサポートセンター副センター長
西山 健児	執行役員 製造本部戸田工場長兼生産管理部長兼物流管理部長
高久 清	執行役員 製造本部戸田工場担当
高橋 義明	執行役員 ディスクロージャー制度調査室長兼プロネクサス総合研究所理事長
酒井 哲也	執行役員 業務改革システム本部情報システム部長
水野 秀雄	執行役員 業務改革システム本部データベース事業部担当
黒岩 浩明	執行役員 管理本部人事部担当兼総務部長
千野 忠俊	執行役員 管理本部経理部担当

#### 社外役員の状況

当社の社外取締役は3名、社外監査役は3名であります。

社外取締役の長妻貴嗣氏は、現在三協フロンテア株式会社の代表取締役社長を務めており、企業経営における豊富な経験や見識を客観的立場から当社経営に活かしていただくことにより、取締役会の監督機能強化が期待できることから、社外取締役として選任しております。

社外取締役の清水謙氏は、現在株式会社WDIの代表取締役社長を務めており、北米やアジア諸国など幅広い地域でのマネジメントに関する豊富な経験を有しております。そうした経営者としての経験とグローバルな視点から、当社経営に対し適切なお助言をいただくことで、グループガバナンスのさらなる強化が期待できることから、社外取締役として選任しております。

社外取締役の酒井一郎氏は、現在酒井重工業株式会社の代表取締役社長を務めており、長年にわたり経営全般に携わっております。そうした企業経営に係る豊富な知識と経験により培った中長期的かつ大局的な視点から、当社の企業価値及びサステナビリティ向上に資する適切なお助言をいただけることが期待できることから、社外取締役として選任しております。

なお、三協フロンテア株式会社、株式会社WDI及び酒井重工業株式会社は当社と営業上の取引関係がありますが、その額は僅少であり、長妻貴嗣氏、清水謙氏及び酒井一郎氏と当社との間に、人的関係、資本的関係及び重要な取引関係その他の利害関係がないものと判断していることから、各氏を社外取締役として選任しております。

社外監査役の中川幸三氏は、30年以上にわたる公認会計士及び監査法人代表社員としての経験のなかで多数の企業の会計監査を行い、中立的な立場から経営監視能力を十分に発揮することが期待できることから、社外監査役として選任しております。また、同氏は当社と監査契約を締結している有限責任監査法人トーマツに過去勤務しておりましたが、現在は退職しており、当社の一般株主との利益相反が生じるおそれはないものと判断しております。なお、同氏は2020年3月31日現在、当社の株式を8,400株保有しております。

社外監査役の須藤修氏は、会社法をはじめとした企業法務全般に精通しており、上場企業の社外役員としての豊富な経験を有しています。これらの専門的知識・経験等を活かし、当社の監査体制の強化が期待できることから、社外監査役として選任しております。

社外監査役の忍田卓也氏は、弁護士としての専門的な知識に基づき、M & A等企業組織再編や国際取引全般に精通しており、当社の経営全般の監視に活かしていただくことが期待できることから、社外監査役として選任しております。

当社は、社外取締役長妻貴嗣氏、社外取締役清水謙氏、社外取締役酒井一郎氏、社外監査役中川幸三氏及び社外監査役須藤修氏を東京証券取引所の定めに基づく独立役員として同取引所に届け出ております。各氏はそれぞれ、当社との人的関係、資本的関係、または取引関係その他の利害関係において当社の一般株主との利益相反が生じるおそれがなく、同取引所の定めに基づく独立役員としての要件を満たしております。

社外監査役忍田卓也氏についても、一般株主との利益相反が生じるおそれがなく、同取引所の定めに基づく独立役員としての要件を満たしておりますが、所属する法律事務所の方針により、独立役員として届け出ておりません。

なお、当事業年度は、定例取締役会を12回、臨時取締役会を2回開催し、社外取締役の出席率は90%、社外監査役の出席率は95%となっております。監査役会は13回開催し、社外監査役の出席率は92%となっております。

当社は、社外取締役及び社外監査役の選任にあたり、東京証券取引所の企業行動規範に定める独立性の基準に照らして一般株主と利益相反が生じるおそれがない者で、かつ、専門的な知見に基づく客観的かつ適切な監督または監査といった役割が期待できる者を選任しております。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

当社は、社外取締役及び社外監査役が、独立した立場から経営への監督と監視を的確かつ有効に実行できる体制を構築するため、内部監査部門との連携のもと、必要の都度、経営に関わる必要な資料の提供や事情説明を行う体制をとっております。また、その体制をスムーズに進行させるため、常勤監査役が内部監査部門と密に連携することで社内各部門からの十分な情報収集を行っております。これらを通して社外取締役、社外監査役の独立した活動を支援しております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

当社の監査役会は4名のうち3名が社外監査役であり、取締役の職務の執行に対し、独立的な立場から適切に意見を述べる事ができ、監査役としてふさわしい人格、識見及び倫理観を有している者を選任しております。なお、常勤監査役中川幸三氏は、公認会計士及び税理士の資格を有しており、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

当事業年度においては、監査役会を13回開催しており、個々の監査役の出席状況については、次のとおりとなっております。

氏名	当社における地位	監査役会出席状況
林田 英美	常勤監査役	13回中13回(100%)
中川 幸三	常勤監査役	13回中13回(100%)
竹内 洋	監査役	13回中11回(85%)
須藤 修	監査役	13回中12回(92%)

(注) 常勤監査役林田英美氏及び監査役竹内洋氏は、2020年6月24日開催の定時株主総会終結の時をもって監査役を退任しております。

監査役会における主な検討事項は、監査の方針、監査計画、内部統制システムの整備・運用状況、取締役の職務執行の妥当性、事業報告及び附属明細書の適法性、会計監査人の監査方法及び監査結果の相当性等であります。

また、常勤監査役の活動として、社内の重要な会議に出席することなどにより、子会社を含む社内の情報の収集を行うほか、内部統制システムの構築及び運用状況について適宜監視をしております。なお、定例の監査役会において、相互に職務の状況について報告を行うことにより、情報の共有・監査業務の認識の共有を行っております。

監査役、監査室及び会計監査人は、各々の監査計画や監査状況に関して定期的に、または必要の都度相互の情報交換・意見交換を行うなどの連携を密にして、監査の実効性と効率性の向上を目指しております。

内部監査の状況

当社の内部監査体制は、代表取締役社長直属の「監査室」(5名)を設置し、法令遵守、内部統制の有効性と効率性、財務内容の適正開示、リスクマネジメントの検証等について、各部門、工場、グループ会社などの監査を定期的実施し、チェック・指導する体制をとっております。また、財務報告に係る内部統制監査を担当部門と協議、連携の上実行するほか、監査役会及び会計監査人並びにコンプライアンス推進室と必要の都度、相互の情報交換・意見交換を行うなどの連携を密にして、監査の実効性と効率性の向上を目指しております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

有限責任監査法人トーマツ

b. 継続監査期間

27年間

c. 業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員：三井 勇治、宇治川 雄士

d. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士8名、その他16名であります。

なお、監査年数は7年を経過していないため、記載を省略しております。

e. 監査法人の選定方針と理由

当社の監査役会は、公益社団法人日本監査役協会が公表している「会計監査人の評価及び選定基準策定に関する監査役等の実務指針」に基づき、会計監査人の品質管理の状況、独立性及び専門性、監査体制が整備されていること、具体的な監査計画並びに監査報酬が合理的かつ妥当であることを確認し、監査実績などを踏まえたうえで、会計監査人を総合的に評価し、選定について判断しております。

会計監査人の職務の執行に支障がある場合のほか、その必要があると判断した場合は、株主総会に提出する会計監査人の解任または不再任に関する議案の内容を決定します。

また、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合は、監査役全員の同意に基づき、会計監査人を解任します。この場合、監査役会が選定した監査役は、解任後最初に招集される株主総会において、会計監査人を解任した旨及びその理由を報告します。

f. 監査役及び監査役会による会計監査人の評価

当社の監査役及び監査役会は、上述会計監査人の選定方針に掲げた基準の適否に加え、日頃の監査活動等を通じ、経営者・監査役・経理部門・監査室等とのコミュニケーション、グループ全体の監査、不正リスクへの対応等が適切に行われているかという観点で評価した結果、有限責任監査法人トーマツは会計監査人として適格であると判断しております。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
提出会社	37,500	5,600	42,000	-
連結子会社	-	-	-	-
計	37,500	5,600	42,000	-

(注) 当社における監査証明業務に基づく報酬には、前連結会計年度、当連結会計年度ともにIFRS(国際会計基準)の任意適用に係る監査の報酬等が含まれております。さらに前連結会計年度の非監査業務の内容は、IFRS(国際会計基準)に関する助言等であります。

b. 監査公認会計士等と同一のネットワーク(デロイト)に対する報酬(a.を除く)

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
提出会社	-	1,200	-	5,402
連結子会社	-	450	-	450
計	-	1,650	-	5,852

(注) 当社における非監査業務の内容は、前連結会計年度が税務アドバイザリー業務等であり、当連結会計年度が財務デューデリジェンス・税務アドバイザリー業務等であります。また、連結子会社における非監査業務の内容は、前連結会計年度、当連結会計年度ともに税務アドバイザリー業務等であります。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

当社の監査公認会計士等の監査報酬の額につきましては、監査公認会計士等から提示された監査計画及び監査報酬見積資料に基づき、監査公認会計士等との必要かつ十分な協議を経て決定しております。

具体的には、監査計画で示された重点監査項目並びに連結対象会社の異動を含む企業集団の状況等の監査及びレビュー手続の実施範囲が、監査時間に適切に反映されていること等を確認するとともに、過年度における監査時間の計画実績比較等も含めこれらを総合的に勘案のうえ、監査報酬の額を決定しております。

なお、監査公認会計士等の独立性を担保する観点から、監査報酬の額の決定に際しては監査役会の同意を得ております。

e. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社の監査役会は、会計監査人の監査計画の内容、会計監査の職務遂行状況及び報酬見積りの算出根拠等が適切であるかどうかについて必要な検証を行ったうえで、会計監査人の報酬等の額について同意の判断をしております。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

取締役の報酬等の限度額は、2004年6月29日開催の第60回定時株主総会において年額300百万円以内（ただし、使用人分給与は含まない。）、監査役の報酬等の限度額は、2001年6月28日開催の第57回定時株主総会において年額50百万円以内と決議しております。提出日現在において、これらの支給枠に基づく報酬等の支給対象となる役員は、取締役10名、監査役4名であります。

役員区分ごとの報酬等の額に関する考え方及び算定方法の決定に関する事項は、以下のとおりであります。

(取締役)

取締役の報酬等につきましては、各取締役の職責や役位に応じて支給する固定報酬と、会社業績や各取締役の経営への貢献度に応じて支給する業績連動報酬で構成されております。

業績連動報酬に関しましては、定量評価の基準として日本基準における売上高、営業利益、経常利益及び親会社株主に帰属する当期純利益、並びに経営指標として定めております営業利益率及び自己資本利益率（ROE）の年度ごとの達成状況にて評価しております。当該指標を評価の基準としている理由といたしましては、当社では企業価値の持続的な向上を図るためには収益力及び資本効率の向上が重要と考えており、それらを当社の中期経営計画において達成すべき目標として設定していることによるものであります。一方、定性評価の基準となります各取締役の経営への貢献度につきましては、期首に各取締役が設定した重点施策に対し、その達成状況を短期・中長期それぞれの視点から総合的に評価しております。なお、社外取締役ににつきましては、業務執行から独立した立場であることを鑑み、固定報酬のみとしております。

取締役の報酬等の額又はその算定方法の決定に係る基本方針につきましては、取締役会にて、上記株主総会決議の範囲内において決定しております。また、その具体的な報酬等の額につきましては、株主総会にて決議された金額の範囲内で取締役会の一任を受けた代表取締役社長が決定しており、当事業年度におきましては、2019年6月26日開催の取締役会にて代表取締役社長への一任を決議しております。

(監査役)

監査役の報酬等の額は、常勤監査役と非常勤監査役の別、社内監査役と社外監査役の別、業務の分担等を勘案し、監査役の協議により決定しております。なお、監査役につきましては、独立性の確保の観点から、固定報酬のみとしております。

当事業年度における業績連動報酬に係る指標の目標及び達成状況につきましては、中期経営計画に掲げております業績目標に対し、売上高は24,446百万円（目標比+746百万円で達成）、営業利益は2,572百万円（目標比+22百万円で達成）、経常利益は2,718百万円（目標比+68百万円で達成）及び親会社株主に帰属する当期純利益は1,817百万円（目標比-13百万円で未達成）となり、経営指標に関しましては、営業利益率は10.5%（目標比-0.3ptで未達成）及び自己資本利益率（ROE）は8.2%（目標比±0ptで達成）となりました。

また、当社では役員持株会を通じて、役員の自社株式購入を推進しております。これは、役員報酬が企業業績のみならず株価とも連動性を持つことにより、各役員が株主との思いを共有し、中長期的な企業価値向上への意識を高めることを目的としております。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)			対象となる 役員の員数 (人)
		固定報酬	業績連動報酬	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	219,504	188,900	30,604	-	7
監査役 (社外監査役を除く。)	15,000	15,000	-	-	1
社外役員	44,000	44,000	-	-	6

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式の区分について、純投資目的とは専ら株式の価値変動や株式に係る配当によって利益を受けることを目的とする場合と考えております。一方、純投資目的以外とは当社の顧客及び取引先等との安定的・長期的な取引関係の維持・強化や当社の中長期的な企業価値向上に資する場合と考えております。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、顧客及び取引先等との安定的・長期的な取引関係の維持・強化の観点から、当社の中長期的な企業価値向上に資すると判断される場合に限り、株式の政策保有を行います。保有する政策保有株式については、定期的に取締役会へ報告し、個々の銘柄において保有の便益（受取配当金及び事業取引利益）と当社資本コストを比較して保有の経済合理性を検証するとともに、取引関係の維持・強化、中長期的な保有メリット等を総合的に勘案して、保有の適否を判断しております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(千円)
非上場株式	11	907,179
非上場株式以外の株式	29	1,362,813

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(千円)	株式数の増加の理由
非上場株式	-	-	-
非上場株式以外の株式	10	13,820	取引先持株会での定期買付による増加

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(千円)
非上場株式	1	521
非上場株式以外の株式	12	13,767

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
(株)ビジネスブレイン 太田昭和	250,000	250,000	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません。保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無
	670,000	473,750		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
松竹(株)	22,800	22,800	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	有
	276,336	282,720		
東海旅客鉄道(株)	6,000	6,000	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無
	103,920	154,260		
岩塚製菓(株)	22,000	22,000	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	有
	71,060	93,170		
(株)丹青社	80,636	77,868	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。株式数増加の理由は、取引先持株会での定期買付によるものです。	無
	58,703	101,852		
(株)ソディック	77,698	74,610	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。株式数増加の理由は、取引先持株会での定期買付によるものです。	無
	50,349	68,865		
イオン(株)	15,766	13,856	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。株式数増加の理由は、取引先持株会での定期買付によるものです。	無
	37,822	32,098		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
ANAホールディングス(株)	7,709	7,315	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。株式数増加の理由は、取引先持株会での定期買付によるものです。	無
	20,345	29,692		
ヤマトホールディングス(株)	9,286	8,992	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。株式数増加の理由は、取引先持株会での定期買付によるものです。	無
	15,759	25,709		
(株)みずほフィナンシャルグループ	78,780	78,780	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無
	9,737	13,495		
(株)スパンクリートコーポレーション	25,200	25,200	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	有
	8,064	10,584		
京王電鉄(株)	948	888	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。株式数増加の理由は、取引先持株会での定期買付によるものです。	無
	6,058	6,353		
積水ハウス(株)	3,250	3,250	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無
	5,800	5,954		



銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
(株)安藤・間	8,050	7,664	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。株式数増加の理由は、取引先持株会での定期買付によるものです。	無
	5,546	5,679		
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	10,740	10,740	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無(注)2.
	4,328	5,907		
オイレス工業(株)	2,984	2,984	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無
	4,082	5,270		
(株)やまびこ	3,284	3,284	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無
	2,667	3,491		
(株)アドバンスクリエイト	1,329	1,235	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。株式数増加の理由は、取引先持株会での定期買付によるものです。	無
	2,233	2,269		
常磐興産(株)	1,327	1,167	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。株式数増加の理由は、取引先持株会での定期買付によるものです。	無
	1,822	1,850		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
丸三証券(株)	3,307	3,307	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無
	1,498	2,163		
クリナップ(株)	2,420	2,420	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無
	1,295	1,430		
ソニー(株)	200	200	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無
	1,284	929		
日本電信電話(株)	408	204	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。株式数増加の理由は、株式分割によるものです。	無
	1,051	959		
(株)イクヨ	1,150	1,150	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	有
	892	2,032		
(株)カナデン	584	118	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。株式数増加の理由は、取引先持株会での定期買付によるものです。	無
	731	139		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
(株)TAKARA & COMPANY	220	220	業界の動向把握のために保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	有
	369	374		
(株)セブン&アイ・ ホールディングス	100	100	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無
	358	418		
キヤノン(株)	150	150	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無
	354	482		
アサヒグループホー ルディングス(株)	100	100	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため保有しております。定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしません、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証しております。	無
	351	493		
レンゴー(株)	-	2,699	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証の上で保有しておりました。なお、定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしていません。	無
	-	2,802		
理研計器(株)	-	1,100	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証の上で保有しておりました。なお、定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしていません。	無
	-	2,347		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
(株)東京きらぼしフィ ナンシャルグループ	-	1,000	ディスクロージャー関連事業の取引の安 定的、長期的な維持・強化のため、保有 の便益と当社資本コストの比較により経 済合理性を検証の上で保有しておりました。 なお、定量的な保有効果は秘密保持 の観点から記載いたしておりません。	無
	-	1,565		
第一生命ホールディ ングス(株)	-	1,000	ディスクロージャー関連事業の取引の安 定的、長期的な維持・強化のため、保有 の便益と当社資本コストの比較により経 済合理性を検証の上で保有しておりました。 なお、定量的な保有効果は秘密保持 の観点から記載いたしておりません。	無
	-	1,538		
片倉工業(株)	-	1,000	ディスクロージャー関連事業の取引の安 定的、長期的な維持・強化のため、保有 の便益と当社資本コストの比較により経 済合理性を検証の上で保有しておりました。 なお、定量的な保有効果は秘密保持 の観点から記載いたしておりません。	無
	-	1,262		
ホーチキ(株)	-	1,100	ディスクロージャー関連事業の取引の安 定的、長期的な維持・強化のため、保有 の便益と当社資本コストの比較により経 済合理性を検証の上で保有しておりました。 なお、定量的な保有効果は秘密保持 の観点から記載いたしておりません。	無
	-	1,224		
本州化学工業(株)	-	1,000	ディスクロージャー関連事業の取引の安 定的、長期的な維持・強化のため、保有 の便益と当社資本コストの比較により経 済合理性を検証の上で保有しておりました。 なお、定量的な保有効果は秘密保持 の観点から記載いたしておりません。	無
	-	1,171		
凸版印刷(株)	-	654	ディスクロージャー関連事業の取引の安 定的、長期的な維持・強化のため、保有 の便益と当社資本コストの比較により経 済合理性を検証の上で保有しておりました。 なお、定量的な保有効果は秘密保持 の観点から記載いたしておりません。	無
	-	1,093		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
日本フィルコン(株)	-	1,050	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証の上で保有しておりました。なお、定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしておりません。	無
	-	549		
三井住友トラスト・ホールディングス(株)	-	100	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証の上で保有しておりました。なお、定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしておりません。	無(注)3.
	-	398		
スミダコーポレーション(株)	-	100	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証の上で保有しておりました。なお、定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしておりません。	無
	-	156		
(株)タカラトミー	-	35	ディスクロージャー関連事業の取引の安定的、長期的な維持・強化のため、保有の便益と当社資本コストの比較により経済合理性を検証の上で保有しておりました。なお、定量的な保有効果は秘密保持の観点から記載いたしておりません。	無
	-	40		

(注)1. 「-」は、当該銘柄を保有していないことを示しております。

(注)2. (株)三菱UFJフィナンシャル・グループは当社株式を保有しておりませんが、同子会社である三菱UFJモルガン・スタンレー証券(株)が当社の株式を保有しています。

(注)3. 三井住友トラスト・ホールディングス(株)株式を保有しておりませんが、同子会社である日本証券代行(株)が当社の株式を保有しています。

## 第5【経理の状況】

### 1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1)当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)第93条の規定により、国際会計基準(以下「IFRS」という。)に準拠して作成しております。

(2)当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

### 2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2019年4月1日から2020年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2019年4月1日から2020年3月31日まで)の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツによる監査を受けております。

### 3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組み及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成することができる体制の整備について

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組み及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成することができる体制の整備を行っております。その内容は以下のとおりであります。

(1)会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての確に対応できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、同機構及び監査法人等が主催するセミナー等に参加しております。

(2)IFRSの適用については、国際会計基準審議会が公表するプレスリリースや基準書を随時入手し、最新の基準の把握を行っております。また、IFRSに基づく適正な連結財務諸表等を作成するために、IFRSに準拠したグループ会計方針及び会計指針を作成し、それらに基づいて会計処理を行っております。

## 1【連結財務諸表等】

## (1)【連結財務諸表】

## 【連結財政状態計算書】

(単位：千円)

	注記	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
<b>資産</b>				
<b>流動資産</b>				
現金及び現金同等物	8	12,613,077	11,892,304	11,910,898
営業債権及びその他の債権	9	2,229,360	2,210,648	2,548,657
その他の金融資産	10,33	1,723,015	1,922,000	2,310,915
棚卸資産	11	443,946	448,945	511,471
その他の流動資産	12	226,301	241,175	283,600
流動資産合計		17,235,699	16,715,073	17,565,541
<b>非流動資産</b>				
有形固定資産	13	4,720,667	4,686,358	4,657,122
使用権資産	19,32	2,663,846	2,341,349	1,988,261
のれん	14	48,178	65,688	304,485
無形資産	14	1,684,689	1,904,547	2,246,279
投資不動産	15	186,322	186,322	186,322
持分法で会計処理されている投資	16	617,194	673,249	728,142
その他の金融資産	10,33	4,295,522	4,419,180	4,233,973
繰延税金資産	17	697,382	917,453	1,078,340
その他の非流動資産	12	39,877	39,626	60,678
非流動資産合計		14,953,678	15,233,772	15,483,602
資産合計		32,189,378	31,948,845	33,049,144
<b>負債及び資本</b>				
<b>負債</b>				
<b>流動負債</b>				
借入金	18,32	350,000	350,000	56,672
リース負債	18,32	623,911	704,912	752,312
営業債務及びその他の債務	20	1,232,358	1,352,605	1,434,026
未払法人所得税等		726,751	295,648	689,136
契約負債		478,307	510,237	651,858
その他の流動負債	23	2,225,193	2,112,227	2,517,150
流動負債合計		5,636,521	5,325,629	6,101,154
<b>非流動負債</b>				
借入金	18,32	300,000	-	8,324
リース負債	18,32	2,021,024	1,653,130	1,262,247
退職給付に係る負債	21	2,062,381	2,458,995	2,523,384
引当金	22	120,923	171,457	188,201
その他の非流動負債	23	386,880	391,778	459,592
非流動負債合計		4,891,209	4,675,359	4,441,749
負債合計		10,527,730	10,000,989	10,542,902
<b>資本</b>				
資本金	24	3,058,651	3,058,651	3,058,651
資本剰余金	24	4,683,596	4,683,596	4,683,596
自己株式	24	5,348,073	3,324,251	3,801,143
その他の資本の構成要素	24	638,212	369,265	348,191
利益剰余金		18,629,263	17,117,366	18,162,035
親会社の所有者に帰属する持分合計		21,661,648	21,904,626	22,451,330
非支配持分		-	43,231	54,911
資本合計		21,661,648	21,947,857	22,506,241
負債及び資本合計		32,189,378	31,948,845	33,049,144

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】  
【連結損益計算書】

(単位：千円)

	注記	前連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2019年 4月 1日 至 2020年 3月 31日)
売上収益	26	23,157,864	24,446,337
売上原価		14,153,282	14,846,057
売上総利益		9,004,583	9,600,279
販売費及び一般管理費	27,35	6,612,343	7,061,475
その他の収益	28	81,469	72,223
その他の費用	28	7,704	10,869
営業利益		2,466,004	2,600,158
金融収益		182,224	67,527
金融費用	29	13,462	10,842
持分法による投資利益	16	79,995	72,620
税引前利益		2,714,761	2,729,463
法人所得税費用	17	878,413	876,222
当期利益		1,836,347	1,853,241
当期利益の帰属			
親会社の所有者		1,834,652	1,846,291
非支配持分		1,696	6,950
当期利益		1,836,347	1,853,241
1株当たり当期利益	31		
基本的1株当たり当期利益(円)		66.29	68.53
希薄化後1株当たり当期利益(円)		-	-



【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	注記	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
当期利益		1,836,347	1,853,241
その他の包括利益	30		
純損益に振り替えられることのない項目			
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産		179,572	26,515
確定給付制度の再測定		54,989	19,077
純損益に振り替えられることのない項目合計		234,561	7,438
純損益に振り替えられる可能性のある項目			
在外営業活動体の換算差額		2,830	2,121
純損益に振り替えられる可能性のある項目合計		2,830	2,121
税引後その他の包括利益		237,391	9,559
当期包括利益		1,598,956	1,843,682
当期包括利益の帰属			
親会社の所有者		1,597,606	1,836,615
非支配持分		1,350	7,067
当期包括利益		1,598,956	1,843,682

【連結持分変動計算書】

前連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：千円）

	注記	親会社の所有者に帰属する持分					
		資本金	資本剰余金	自己株式	その他の資本の構成要素		
					在外営業活動体の換算差額	その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	確定給付制度の再測定
2018年4月1日時点の残高		3,058,651	4,683,596	5,348,073	9,419	647,630	-
当期利益							
その他の包括利益	30				2,830	179,572	54,643
当期包括利益合計					2,830	179,572	54,643
自己株式の取得	24			523,128			
自己株式の消却	24			2,546,951			
配当金	25						
子会社の支配獲得に伴う変動							
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替						86,545	54,643
所有者との取引額合計		-	-	2,023,822	-	86,545	54,643
2019年3月31日時点の残高		3,058,651	4,683,596	3,324,251	12,249	381,514	-

	注記	親会社の所有者に帰属する持分			非支配持分	合計
		その他の資本の構成要素	利益剰余金	合計		
		合計				
2018年4月1日時点の残高		638,212	18,629,263	21,661,648	-	21,661,648
当期利益			1,834,652	1,834,652	1,696	1,836,347
その他の包括利益	30	237,046		237,046	346	237,391
当期包括利益合計		237,046	1,834,652	1,597,606	1,350	1,598,956
自己株式の取得	24			523,128		523,128
自己株式の消却	24		2,546,951	-		-
配当金	25		831,500	831,500		831,500
子会社の支配獲得に伴う変動				-	41,881	41,881
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替		31,902	31,902	-		-
所有者との取引額合計		31,902	3,346,549	1,354,628	41,881	1,312,747
2019年3月31日時点の残高		369,265	17,117,366	21,904,626	43,231	21,947,857

当連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

(単位:千円)

	注記	親会社の所有者に帰属する持分					
		資本金	資本剰余金	自己株式	その他の資本の構成要素		
					在外営業活動体の換算差額	その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	確定給付制度の再測定
2019年4月1日時点の残高		3,058,651	4,683,596	3,324,251	12,249	381,514	-
当期利益							
その他の包括利益	30				2,121	26,515	18,960
当期包括利益合計					2,121	26,515	18,960
自己株式の取得	24			476,892			
配当金	25						
子会社の支配獲得に伴う変動							
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替						7,563	18,960
所有者との取引額合計		-	-	476,892	-	7,563	18,960
2020年3月31日時点の残高		3,058,651	4,683,596	3,801,143	14,370	362,561	-

	注記	親会社の所有者に帰属する持分			非支配持分	合計
		その他の資本の構成要素	利益剰余金	合計		
		合計				
2019年4月1日時点の残高		369,265	17,117,366	21,904,626	43,231	21,947,857
当期利益			1,846,291	1,846,291	6,950	1,853,241
その他の包括利益	30	9,676		9,676	117	9,559
当期包括利益合計		9,676	1,846,291	1,836,615	7,067	1,843,682
自己株式の取得	24			476,892		476,892
配当金	25		813,019	813,019		813,019
子会社の支配獲得に伴う変動				-	4,613	4,613
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替		11,397	11,397	-		-
所有者との取引額合計		11,397	801,622	1,289,911	4,613	1,285,297
2020年3月31日時点の残高		348,191	18,162,035	22,451,330	54,911	22,506,241

## 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	注記	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>			
税引前利益		2,714,761	2,729,463
減価償却費及び償却費		1,817,852	1,829,723
退職給付に係る負債の増減額(は減少)		100,174	133,764
金融収益		182,224	67,527
金融費用		13,462	10,842
持分法による投資損益(は益)		79,995	72,620
棚卸資産増減額(は増加)		5,018	40,480
営業債権及びその他の債権の増減額(は増加)		181,813	208,164
営業債務及びその他の債務の増減額(は減少)		26,405	309,260
未払消費税等増減額(は減少)		29,470	150,954
その他		327	6,479
小計		4,194,461	4,768,738
利息及び配当金の受取額		50,448	51,112
利息の支払額		13,180	10,625
法人所得税の支払額		1,345,430	637,008
営業活動によるキャッシュ・フロー		2,886,299	4,172,217
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>			
定期預金の預入による支出		158,000	400,232
定期預金の払戻による収入		158,000	153,901
有形固定資産の取得による支出		325,384	346,271
無形資産の取得による支出		996,300	1,054,455
投資の取得による支出		1,057,029	213,821
投資の売却及び償還による収入		578,276	14,288
子会社の支配獲得による収支(は支出)		251,913	192,825
その他		269,522	323,532
投資活動によるキャッシュ・フロー		1,279,003	1,715,883
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>			
長期借入金の返済による支出	32	300,000	370,566
リース負債の返済による支出	32	674,445	780,281
自己株式の取得による支出		523,128	476,892
配当金の支払額	25	830,255	812,782
その他		-	4,760
財務活動によるキャッシュ・フロー		2,327,829	2,435,760
現金及び現金同等物の増減額		720,532	20,573
現金及び現金同等物の期首残高		12,613,077	11,892,304
現金及び現金同等物に係る換算差額		241	1,980
現金及び現金同等物の期末残高	8	11,892,304	11,910,898

## 【連結財務諸表注記】

### 1. 報告企業

株式会社プロネクサス（以下、「当社」という。）は日本に所在する株式会社であります。その登記されている本社及び主要な事業所の住所は当社のウェブサイト（<https://www.pronexus.co.jp>）で開示しております。当社の連結財務諸表は、2020年3月31日を期末日とし、当社及びその子会社（以下、「当社グループ」という。）、並びに当社の関連会社に対する持分により構成されております。

当社グループの事業内容は、単一セグメントのディスクロージャー関連事業であります。取扱製品を上場会社ディスクロージャー関連、上場会社IR関連等、金融商品ディスクロージャー関連、データベース関連の4つに区分しております。各製品区分の内容については注記「26. 売上収益」に記載しております。

### 2. 作成の基礎

#### (1) IFRSに準拠している旨及び初度適用に関する事項

当社グループの連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）第1条の2に掲げる「指定国際会計基準特定会社」の要件を満たすことから、同第93条の規定により、IFRSに準拠して作成しております。

本連結財務諸表は、2020年6月24日の取締役会によって承認されております。

当社グループは、2020年3月31日に終了する連結会計年度からIFRSを初めて適用しており、IFRSへの移行日は2018年4月1日であります。IFRSへの移行日及び比較年度において、IFRSへの移行が当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に与える影響は、注記「37. 初度適用」に記載しております。

早期適用していないIFRS及びIFRS第1号「国際会計基準の初度適用」（以下「IFRS第1号」という。）の規定により認められた免除規定を除き、当社グループの会計方針は2020年3月31日に有効なIFRSに準拠しております。

なお、適用した免除規定については、注記「37. 初度適用」に記載しております。

#### (2) 測定的基础

当社グループの連結財務諸表は、注記「3. 重要な会計方針」に記載のとおり、公正価値で測定されている特定の金融商品等を除き、取得原価を基礎として作成しております。

#### (3) 機能通貨及び表示通貨

当社グループの連結財務諸表は、当社の機能通貨である日本円を表示通貨としており、千円未満を四捨五入して表示しております。

### 3. 重要な会計方針

#### (1) 連結の基礎

##### 子会社

子会社とは、当社グループにより支配されている企業をいいます。当社グループがある企業への関与により生じる変動リターンに対するエクスポージャー又は権利を有し、かつ、当該企業に対するパワーにより当該リターンに影響を及ぼす能力を有している場合に、当社グループは当該企業を支配していると判断しております。

子会社の財務諸表は、当社グループが支配を獲得した日から支配を喪失する日まで、連結の対象に含めております。

子会社が適用する会計方針が当社グループの適用する会計方針と異なる場合には、必要に応じて当該子会社の財務諸表に調整を加えております。当社グループ間の債権債務残高及び内部取引高、並びに当社グループ間の取引から発生した未実現損益は、連結財務諸表の作成に際して消去しております。

子会社の包括利益については、非支配持分が負の残高となる場合であっても、親会社の所有者と非支配持分に帰属させております。

子会社持分を一部処分した際、支配が継続する場合には、資本取引として会計処理しております。非支配持分の調整額と対価の公正価値との差額は、資本剰余金として資本に直接認識されております。

支配を喪失した場合には、支配の喪失から生じた利得又は損失は純損益で認識しております。

##### 関連会社

関連会社とは、当社グループが当該企業に対し、財務及び営業の方針に重要な影響力を有しているものの、支配又は共同支配をしていない企業をいいます。当社グループが他の企業の議決権の20%以上50%以下を保有する場合、当社グループは当該他の企業に対して重要な影響力を有していると推定されます。

関連会社については、当社グループが重要な影響力を有することとなった日から重要な影響力を喪失する日まで、持分法によって会計処理しております。関連会社に対する投資には、取得に際して認識されたのれんが含まれております。

関連会社が適用する会計方針が当社グループの適用する会計方針と異なる場合には、必要に応じて当該関連会社の財務諸表に調整を加えております。

#### (2) 企業結合

企業結合は取得法を用いて会計処理しております。取得対価は、被取得企業の支配と交換に譲渡した資産、引き受けた負債及び当社が発行する持分金融商品の取得日の公正価値の合計として測定されます。取得対価が識別可能な資産及び負債の公正価値の純額を超過する場合は、連結財政状態計算書においてのれんとして計上しております。反対に下回る場合には、直ちに連結損益計算書において純損益として計上しております。

非支配持分を公正価値で測定するか、又は識別可能な純資産の認識金額の比例持分で測定するかについては、企業結合ごとに選択しております。

仲介手数料、弁護士費用、デュー・デリジェンス費用等の、企業結合に関連して発生する取引費用は、発生時に費用処理しております。

企業結合の当初の会計処理が、企業結合が発生した連結会計年度末までに完了していない場合は、完了していない項目を暫定的な金額で報告しております。取得日時点に存在していた事実と状況を、取得日当初に把握していたとしたら認識される金額の測定に影響を与えていたと判断される期間（以下「測定期間」という。）に入手した場合、その情報を反映して、取得日に認識した暫定的な金額を遡及的に修正しております。新たに得た情報が、資産と負債の新たな認識をもたらす場合には、追加の資産と負債を認識しております。測定期間は最長で1年間であります。

なお、支配獲得後の非支配持分の追加取得については、資本取引として会計処理しているため、当該取引からのれんは認識しておりません。

被取得企業における識別可能な資産及び負債は、以下を除いて、取得日の公正価値で測定しております。

- ・繰延税金資産・負債及び従業員給付契約に関連する資産・負債
- ・被取得企業の株式に基づく報酬契約
- ・IFRS第5号「売却目的で保有する非流動資産及び非継続事業」に従って売却目的に分類される資産又は処分グループ

段階的に達成される企業結合の場合、当社グループが以前保有していた被取得企業の持分は支配獲得日の公正価値で再測定し、発生した利得又は損失は連結損益計算書において純損益として認識しております。

### (3) 外貨換算

#### 外貨建取引

外貨建取引は、取引日の為替レートで当社グループの各社の機能通貨に換算しております。

期末日における外貨建貨幣性資産及び負債は、期末日の為替レートで機能通貨に換算しております。

公正価値で測定される外貨建非貨幣性資産及び負債は、当該公正価値の算定日における為替レートで機能通貨に換算しております。

換算又は決済により生じる換算差額は、純損益として認識しております。

#### 在外営業活動体の財務諸表

在外営業活動体の資産及び負債については期末日の為替レート、収益及び費用については平均為替レートをを用いて日本円に換算しております。在外営業活動体の財務諸表の換算から生じる換算差額は、その他の包括利益として認識しております。在外営業活動体の換算差額は、在外営業活動体が処分された期間に純損益として認識されます。

### (4) 金融商品

#### 金融資産

##### ( ) 当初認識及び測定

当社グループは、金融資産について、純損益又はその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産、償却原価で測定する金融資産に分類しております。この分類は、当初認識時に決定しております。

当社グループは、金融資産に関する契約の当事者となった取引日に当該金融商品を認識しております。

すべての金融資産は、純損益を通じて公正価値で測定される区分に分類される場合を除き、公正価値に取引費用を加算した取得価額で測定しております。ただし、重大な金融要素を含んでいない営業債権は、取引価格で測定しております。

金融資産は、以下の要件をともに満たす場合には、償却原価で測定する金融資産に分類しております。

- ・ 契約上のキャッシュ・フローを回収するために資産を保有することを目的とする事業モデルに基づいて、資産が保有されている。
- ・ 金融資産の契約条件により、元本及び元本残高に対する利息の支払のみであるキャッシュ・フローが特定の日に生じる。

償却原価で測定する金融資産以外の金融資産は、公正価値で測定する金融資産に分類しております。

公正価値で測定する資本性金融資産については、純損益を通じて公正価値で測定しなければならない売買目的で保有する資本性金融資産を除き、個々の資本性金融資産ごとに、当初認識時に事後の公正価値の変動をその他の包括利益で表示するという取消不能の選択を行っており、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類しております。

公正価値で測定する負債性金融資産については、以下の要件を満たす場合にその他の包括利益を通じて公正価値で測定する負債性金融資産に分類しております。

- ・ 契約上のキャッシュ・フローの回収と売却の両方によって目的が達成される事業モデルに基づいて保有されている。
- ・ 金融資産の契約条件により、元本及び元本残高に対する利息の支払のみであるキャッシュ・フローが所定の日に生じる。

償却原価で測定する金融資産、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融資産、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融資産以外の金融資産は、純損益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類しております。

( ) 事後測定

金融資産の当初認識後の測定は、その分類に応じて以下のとおり測定しております。

(a) 償却原価により測定する金融資産

償却原価により測定する金融資産については、実効金利法による償却原価により測定しております。

(b) 公正価値により測定する資本性金融資産

公正価値により測定する金融資産の公正価値の変動額は純損益として認識しております。

ただし、資本性金融資産のうち、その他の包括利益を通じて公正価値で測定すると指定したものについては、公正価値の変動額はその他の包括利益として認識しております。なお、当該金融資産からの配当金については、金融収益の一部として当期の純損益として認識しております。

(c) 公正価値により測定する負債性金融資産

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する負債性金融資産については、公正価値の変動額は、減損戻入又は減損損失、利息収入及び為替差損益を除き、当該金融資産の認識の中止又は分類変更が行われるまで、その他の包括利益として認識しております。

( ) 金融資産の認識の中止

当社グループは、金融資産からのキャッシュ・フローに対する契約上の権利が消滅する、又は当社グループが金融資産の所有のリスクと経済価値のほとんどすべてを移転する場合において、金融資産の認識を中止しております。当社グループが、移転した当該金融資産に対する支配を継続している場合には、継続的関与を有している範囲において、資産と関連する負債を認識いたします。

( ) 金融資産の減損

償却原価により測定する金融資産については、予想信用損失に対する貸倒引当金を認識しております。

当社グループは、期末日ごとに各金融資産に係る信用リスクが当初認識時点から著しく増加しているかどうかを評価しており、当初認識時点から信用リスクが著しく増加していない場合には、12ヶ月の予想信用損失を貸倒引当金として認識しております。一方で、当初認識時点から信用リスクが著しく増加している場合には、全期間の予想信用損失と等しい金額を貸倒引当金として認識しております。

契約上の支払の期日経過が30日超である場合には、原則として信用リスクの著しい増大があったものとしておりますが、信用リスクが著しく増加しているか否かの評価を行う際には、期日経過情報のほか、当社グループが合理的に利用可能かつ裏付け可能な情報（内部格付、外部格付等）を考慮しております。

なお、金融資産に係る信用リスクが期末日現在で低いと判断される場合には、当該金融資産に係る信用リスクが当初認識以降に著しく増大していないと評価しております。

ただし、重大な金融要素を含んでいない営業債権及び契約資産については、信用リスクの当初認識時点からの著しい増加の有無にかかわらず、常に全期間の予想信用損失と等しい金額で貸倒引当金を認識しております。

予想信用損失は、契約に従って企業に支払われるべきすべての契約上のキャッシュ・フローと、企業が受け取ると見込んでいるすべてのキャッシュ・フローとの差額の現在価値として測定しております。

当社グループは、金融資産の予想信用損失を、以下のものを反映する方法で見積っております。

- ・一定範囲の生じ得る結果を評価することにより算定される、偏りのない確率加重金額
- ・貨幣の時間価値

- ・過去の事象、現在の状況及び将来の経済状況の予測についての、報告日において過大なコストや労力を掛けずに利用可能な合理的で裏付け可能な情報

著しい景気変動等の影響を受ける場合には、上記により測定された予想信用損失に、必要な調整を行うこととしております。

当社グループは、ある金融資産の全体又は一部分を回収するという合理的な予想を有していない場合には、金融資産の総額での帳簿価額を直接減額しております。

金融資産に係る貸倒引当金の繰入額は、純損益で認識しております。貸倒引当金を減額する事象が生じた場合は、貸倒引当金戻入額を純損益で認識しております。



## 金融負債

### ( ) 当初認識及び測定

当社グループは、金融負債について、純損益を通じて公正価値で測定する金融負債と償却原価で測定する金融負債のいずれかに分類しております。この分類は、当初認識時に決定しております。

当社グループは、発行した負債証券を、その発行日に当初認識しております。その他の金融負債は、全て、当該金融商品の契約の当事者になる取引日に当初認識しております。

すべての金融負債は公正価値で当初測定しておりますが、償却原価で測定する金融負債については、直接帰属する取引費用を控除した金額で測定しております。

### ( ) 事後測定

金融負債の当初認識後の測定は、その分類に応じて以下のとおり測定しております。

#### (a) 純損益を通じて公正価値で測定する金融負債

純損益を通じて公正価値で測定する金融負債については、売買目的保有の金融負債と当初認識時に純損益を通じて公正価値で測定すると指定した金融負債を含んでおり、当初認識後公正価値で測定し、その変動については当期の純損益として認識しております。

#### (b) 償却原価で測定する金融負債

償却原価で測定する金融負債については、当初認識後実効金利法による償却原価で測定しております。

実効金利法による償却及び認識が中止された場合の利得及び損失については、金融費用の一部として当期の純損益として認識しております。

### ( ) 金融負債の認識の中止

当社グループは、金融負債が消滅したとき、すなわち、契約中に特定された債務が免責、取消し、又は失効となった時に、金融負債の認識を中止しております。

### (5) 現金及び現金同等物

現金及び現金同等物は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資から構成されております。

### (6) 棚卸資産

棚卸資産は、取得原価と正味実現可能価額のいずれか低い価額で測定しております。正味実現可能価額は、通常の事業過程における見積売価から、完成までに要する見積原価及び見積販売費用を控除した額であります。原価は、主として個別法による原価法に基づいて算定しており、購入原価、加工費及び現在の場所及び状態に至るまでに要したすべての費用を含んでおります。

(7) 有形固定資産

有形固定資産については、原価モデルを採用し、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した価額で表示しております。

取得原価には、資産の取得に直接関連する費用、解体・除去及び土地の原状回復費用、及び資産計上すべき借入コストが含まれております。

土地及び建設仮勘定以外の各資産の減価償却費は、それぞれの見積耐用年数にわたり、定額法で計上されております。主要な資産項目ごとの見積耐用年数は以下のとおりであります。

- ・建物及び構築物 15～38年
- ・機械装置及び運搬具 10年
- ・工具器具及び備品 3～20年

なお、見積耐用年数、残存価額及び減価償却方法は、各年度末に見直しを行い、変更があった場合は、会計上の見積りの変更として将来に向かって適用しております。

(8) のれん

当社グループは、のれんを取得日時時点で測定した被取得企業に対する非支配持分の認識額を含む譲渡対価の公正価値から、取得日時点における識別可能な取得資産及び引受負債の純認識額を控除した額として当初測定しております。

のれんの償却は行わず、毎期末及び減損の兆候が存在する場合にはその都度、減損テストを実施しております。

のれんの減損損失は連結損益計算書において認識され、その後の戻入れは行っておりません。

また、のれんは連結財政状態計算書において、取得原価から減損損失累計額を控除した価額で表示しております。

(9) 無形資産

個別に取得した無形資産は、原価モデルを採用し、当初認識時に取得原価で測定しております。企業結合で取得した無形資産は、取得日現在における公正価値で測定しております。

無形資産は、当初認識後、耐用年数を確定できない無形資産を除いて、それぞれの見積耐用年数にわたって定額法で償却され、取得原価から償却累計額及び減損損失累計額を控除した価額で表示しております。主要な無形資産の見積耐用年数は以下のとおりであります。

- ・ソフトウェア 5年

なお、見積耐用年数、残存価額及び償却方法は、各年度末に見直しを行い、変更があった場合は、会計上の見積りの変更として将来に向かって適用しております。

(10) 投資不動産

投資不動産は、賃貸収入又はキャピタル・ゲイン、もしくはその両方を得ることを目的として保有する不動産であります。投資不動産は、原価モデルを採用しています。

(11) リース

当社グループは、契約の締結時に契約がリースであるか又はリースを含んでいるかを判定しております。契約が特定された資産の使用を支配する権利を一定期間にわたり対価と交換に移転する場合には、当該契約はリースであるか又はリースを含んでいると判定しております。

契約がリースであるか又はリースを含んでいると判定した場合、当社グループが借手の場合、リース開始日に使用権資産及びリース負債を認識しております。リース負債は未払リース料総額の現在価値で測定し、使用権資産は、リース負債の当初測定金額に、開始日以前に支払ったリース料等、借手に発生した当初直接コスト及びリースの契約条件で要求されている原状回復義務等のコストを調整した取得原価で測定しております。

当初認識後は、使用権資産は耐用年数とリース期間のいずれか短い年数にわたって、定額法で減価償却を行っております。

リース料は、利息法に基づき金融費用とリース負債の返済額に配分し、金融費用は連結損益計算書において認識しております。

ただし、リース期間が12ヶ月以内の短期リース及び原資産が少額のリースについては、使用権資産及びリース負債を認識せず、リース料をリース期間にわたって、定額法又は他の規則的な基礎のいずれかにより費用として認識しております。

(12) 非金融資産の減損

棚卸資産及び繰延税金資産を除く当社グループの非金融資産の帳簿価額は、期末日ごとに減損の兆候の有無を判断しております。減損の兆候が存在する場合は、当該資産の回収可能価額を見積っております。のれん及び耐用年数を確定できない、又は未だ使用可能ではない無形資産については、減損の兆候の有無にかかわらず回収可能価額を毎期末に見積っております。

資産又は資金生成単位の回収可能価額は、使用価値と処分コスト控除後の公正価値のうちいずれか高い方の金額としております。使用価値の算定において、見積将来キャッシュ・フローは、貨幣の時間的価値及び当該資産に固有のリスクを反映した税引前割引率を用いて現在価値に割引いております。減損テストにおいて個別にテストされない資産は、継続的な使用により他の資産又は資産グループのキャッシュ・インフローから、概ね独立したキャッシュ・インフローを生成する最小の資金生成単位に統合しております。のれんの減損テストを行う際には、のれんが配分される資金生成単位を、のれんが関連する最小の単位を反映して減損がテストされるように統合しております。企業結合により取得したのれんは、結合のシナジーが得られると期待される資金生成単位に配分しております。

当社グループの全社資産は、独立したキャッシュ・インフローを生成しません。全社資産に減損の兆候がある場合、全社資産が帰属する資金生成単位の回収可能価額を決定しております。

減損損失は、資産又は資金生成単位の帳簿価額が見積回収可能価額を超過する場合に純損益として認識しております。資金生成単位に関連して認識した減損損失は、まずその単位に配分されたのれんの帳簿価額を減額するように配分し、次に資金生成単位内のその他の資産の帳簿価額を比例的に減額しております。

のれんに関連する減損損失は戻入れておりません。その他の非金融資産については、過去に認識した減損損失は、毎期末日において損失の減少又は消滅を示す兆候の有無を評価しております。回収可能価額の決定に使用した見積りが変化した場合は、減損損失を戻入れております。減損損失は、減損損失を認識しなかった場合の帳簿価額から必要な減価償却費及び償却額を控除した後の帳簿価額を上限として戻入れております。

(13) 従業員給付

当社グループは、従業員の退職給付制度として確定給付制度を運営しております。

当社グループは、確定給付制度債務の現在価値及び関連する当期勤務費用並びに過去勤務費用を、予測単位積増方式を用いて算定しております。

割引率は、将来の毎年度の給付支払見込日までの期間を基に割引期間を設定し、割引期間に対応した期末日時点の優良社債の市場利回りに基づき算定しております。

確定給付制度に係る負債又は資産は、確定給付制度債務の現在価値から制度資産の公正価値を控除して算定しております。

確定給付制度の再測定額は、発生した期においてその他の包括利益として一括認識し、直ちにその他の資本の構成要素から利益剰余金に振り替えております。

過去勤務費用は、発生した期の純損益として処理しております。

(14) 引当金

引当金は、過去の事象の結果として、当社グループが、現在の法的又は推定的債務を有しており、当該債務を決済するために経済的資源の流出が生じる可能性が高く、当該債務の金額について信頼性のある見積りができる場合に認識しております。貨幣の時間的価値が重要な場合には、見積将来キャッシュ・フローを貨幣の時間的価値及び当該負債に特有のリスクを反映した税引前の利率を用いて現在価値に割引いております。時の経過に伴う割引額の割戻しは金融費用として認識しております。

・ 資産除去債務

資産除去債務には、当社グループが使用する賃借事務所・建物等に対する原状回復義務に備え、過去の原状回復実績に基づき将来支払うと見込まれる金額を計上しております。これらの費用は、事務所等に施した内部造作の耐用年数を考慮して決定した使用見込期間経過後に支払われると見込んでおりますが、将来の事業計画等により影響を受けます。

(15) 収益

当社グループでは、IFRS第9号「金融商品」に基づく利息及び配当収益等を除く顧客との契約について、以下のステップを適用することにより、収益を認識しております。

ステップ1：顧客との契約を識別する。

ステップ2：契約における履行義務を識別する。

ステップ3：取引価格を算定する。

ステップ4：取引価格を契約における履行義務に配分する。

ステップ5：履行義務の充足時に（又は充足するにつれて）収益を認識する。

個別取引の会計方針は注記「26.売上収益」に記載しております。

(16) 金融収益及び金融費用

金融収益は、主として受取利息、受取配当金、為替差益及び純損益を通じて公正価値で測定する金融資産の公正価値の変動等から構成されております。受取利息は、実効金利法により発生時に認識しております。受取配当金は、配当を受取る権利が確定した時点で認識しております。

金融費用は、主として支払利息、為替差損、純損益を通じて公正価値で測定する金融資産の公正価値の変動等から構成されております。支払利息は、実効金利法により発生時に認識しております。

(17) 法人所得税

法人所得税費用は、当期税金及び繰延税金から構成されております。これらは、その他の包括利益又は資本に直接認識される項目から生じる場合、及び企業結合から生じる場合を除き、純損益として認識しております。

当期税金は、税務当局に対する納付又は税務当局からの還付が予想される金額で測定しております。税額の算定に使用する税率及び税法は、期末日までに制定又は実質的に制定されているものであります。

繰延税金は、期末日における資産及び負債の税務基準額と会計上の帳簿価額との差額である一時差異、繰越欠損金及び繰越税額控除に対して認識しております。

なお、以下の一時差異に対しては、繰延税金資産及び負債を計上しておりません。

- ・のれんの当初認識から生じる将来加算一時差異
- ・企業結合取引を除く、会計上の利益にも税務上の課税所得（欠損金）にも影響を与えない取引によって発生する資産及び負債の当初認識により生じる一時差異
- ・子会社、関連会社に対する投資及び共同支配の取決めに対する持分に係る将来減算一時差異に関しては、予測可能な将来に当該一時差異が解消しない可能性が高い場合、又は当該一時差異の使用対象となる課税所得が稼得される可能性が低い場合
- ・子会社、関連会社に対する投資及び共同支配の取決めに対する持分に係る将来加算一時差異に関しては、一時差異の解消する時期をコントロールすることができ、予測可能な期間内に当該一時差異が解消しない可能性が高い場合

繰延税金負債は原則としてすべての将来加算一時差異について認識され、繰延税金資産は将来減算一時差異を使用できるだけの課税所得が稼得される可能性が高い範囲内で、すべての将来減算一時差異について認識しております。

繰延税金資産の帳簿価額は毎期見直され、繰延税金資産の全額又は一部が使用できるだけの十分な課税所得が稼得されない可能性が高い部分については、帳簿価額を減額しております。未認識の繰延税金資産は毎期見直され、将来の課税所得により繰延税金資産が回収される可能性が高くなった範囲内で認識しております。

繰延税金資産及び負債は、期末日において制定されている、又は実質的に制定されている税率及び税法に基づいて、資産が実現する期間又は負債が決済される期間に適用されると予想される税率及び税法によって測定しております。

繰延税金資産及び負債は、当期税金資産と当期税金負債を相殺する法律上強制力のある権利を有しており、かつ同一の税務当局によって同一の納税主体に課されている場合又は別々の納税主体であるものの当期税金負債と当期税金資産とを純額で決済するか、あるいは資産の実現と負債の決済を同時に行うことを意図している場合に相殺しております。

(18) 1株当たり利益

基本的1株当たり当期利益は、親会社の普通株主に帰属する当期損益を、その期間の自己株式を調整した発行済普通株式の加重平均株式数で除して計算しております。希薄化後1株当たり当期利益は、希薄化効果を有するすべての潜在株式の影響を調整して計算しております。

(19) セグメント情報

事業セグメントとは、他の事業セグメントとの取引を含む、収益を稼得し費用を発生させる事業活動の構成単位であります。すべての事業セグメントの事業の成果は、個別にその財務情報が入手可能なものであり、かつ各セグメントへの経営資源の配分及び業績の評価を行うために、当社の取締役会が定期的にレビューしております。なお、当社グループの事業セグメントは単一のディスクロージャー関連事業であります。

(20) 資本

普通株式

当社が発行した普通株式は、発行価額を資本金及び資本剰余金に計上しております。

自己株式

自己株式は取得原価で評価され、資本から控除しております。当社の自己株式の購入、売却又は消却において利得又は損失は認識しておりません。なお、帳簿価額と売却時の対価との差額は資本として認識しております。

#### 4. 重要な会計上の見積り及び判断

IFRSに準拠した連結財務諸表の作成において、経営者は、会計方針の適用並びに資産、負債、収益及び費用の金額に影響を及ぼす判断、見積り及び仮定を行うことが要求されております。実際の業績は、これらの見積りとは異なる場合があります。

見積り及びその基礎となる仮定は継続して見直されます。会計上の見積りの見直しによる影響は、見積りを見直した会計期間及びそれ以降の将来の会計期間において認識されます。

経営者が行った連結財務諸表の金額に重要な影響を与える判断及び見積りは以下のとおりであります。

##### 非金融資産の減損

当社グループは、有形固定資産、使用権資産、のれん及び無形資産について、減損テストを実施しております。減損テストにおける回収可能価額の算定においては、資産の耐用年数、将来キャッシュ・フロー、税引前割引率及び長期成長率等について一定の仮定を設定しております。これらの仮定は、経営者の最善の見積りと判断により決定しておりますが、将来の不確実な経済条件の変動の結果により影響を受ける可能性があり、見直しが必要となった場合、翌連結会計年度以降の連結財務諸表において認識する金額に重要な影響を与える可能性があります。これらに関連する内容及び金額については注記「13.有形固定資産」、「19.リース」及び「14.のれん及び無形資産」に記載しております。

##### 確定給付制度債務の測定

当社グループは、確定給付型を含む様々な退職後給付制度を有しております。これらの各制度に係る確定給付制度債務の現在価値及び関連する勤務費用等は、数理計算上の仮定に基づいて算定されております。数理計算上の仮定には、割引率、退職率及び死亡率等の様々な変数についての見積り及び判断が求められます。当社グループは、これらの変数を含む数理計算上の仮定の適切性について、外部の年金数理人からの助言を得ております。

数理計算上の仮定は、経営者の最善の見積りと判断により決定しておりますが、将来の不確実な経済条件の変動の結果や関連法令の改正・公布によって影響を受ける可能性があり、見直しが必要となった場合、翌連結会計年度以降の連結財務諸表において認識する金額に重要な影響を与える可能性があります。

これらの数理計算上の仮定及び関連する感応度については、注記「21.従業員給付」に記載しております。

##### 法人所得税

課税所得が生じる時期及び金額は、将来の不確実な経済条件の変動によって影響を受ける可能性があり、実際に生じた時期及び金額が見積りと異なった場合、翌連結会計年度以降の連結財務諸表において認識する金額に重要な影響を与える可能性があります。

当連結会計年度における新型コロナウイルス感染症の拡大は、経済や企業活動に広範な影響を与える事象であり、現時点で当社グループに及ぼす影響及び当感染症の収束時期を予測することは困難ですが、翌連結会計年度（2021年3月期）の一定期間にわたり、新型コロナウイルス感染症の影響が継続するとして、会計上の見積り及び仮定を行っております。

その結果、現時点において重要な影響を与えるものはないと判断しておりますが、今後の状況の変化によって判断を見直した結果、翌連結会計年度以降の課税所得において重要な影響を与える可能性があります。

繰延税金資産は、将来減算一時差異を利用できる課税所得が生じる可能性が高い範囲内で認識しております。繰延税金資産の認識に際しては、課税所得が生じる可能性の判断において、将来獲得しうる課税所得の時期及び金額を合理的に見積り、金額を算定しております。

法人所得税に関連する内容及び金額については注記「17.法人所得税」に記載しております。

#### 5. 未適用の新基準

連結財務諸表の承認日までに新設又は改訂が公表された基準書及び解釈指針のうち、重要な影響があるものはありません。

## 6.セグメント情報

### (1) 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

なお、当社グループの事業内容は、ディスクロージャー・I R関連製品の製作及び付帯する業務であり、区分すべきセグメントが存在しないため、ディスクロージャー関連事業の単一セグメントとなっております。

### (2) 製品及びサービスに関する情報（売上収益）

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
上場会社ディスクロージャー関連	9,849,568	10,286,753
上場会社I R関連等	5,546,507	6,136,833
金融商品ディスクロージャー関連	7,033,295	6,919,949
データベース関連	728,494	1,102,802
合計	23,157,864	24,446,337

### (3) 地域別に関する情報

当社グループは、外部顧客からの国内売上収益が、連結損益計算書の売上収益の大部分を占めるため、地域別の売上収益の記載を省略しております。

また、国内所在地に帰属する非流動資産の帳簿価額が、連結財政状態計算書の非流動資産の大部分を占めるため、地域別の非流動資産の記載を省略しております。

### (4) 主要な顧客に関する情報

単一の外部顧客との取引による売上収益が当社グループ売上収益の10%を超える外部顧客がないため、記載を省略しております。

## 7.企業結合

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

8. 現金及び現金同等物

現金及び現金同等物の内訳は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
現金及び現金同等物			
現金及び預金	11,413,115	10,592,356	10,610,939
短期投資	1,199,962	1,299,948	1,399,943
運用期間が3ヵ月を超える有価証券	-	-	99,985
合計	12,613,077	11,892,304	11,910,898

9. 営業債権及びその他の債権

営業債権及びその他の債権の内訳は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
受取手形	12,440	15,337	11,007
売掛金	2,196,378	2,170,672	2,524,937
未収入金	21,521	26,584	14,705
貸倒引当金	980	1,945	1,991
合計	2,229,360	2,210,648	2,548,657

営業債権及びその他の債権は償却原価で測定する金融資産に分類しております。



10. その他の金融資産

(1) その他の金融資産

その他の金融資産の内訳は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
償却原価で測定する金融資産			
定期預金	323,000	422,000	710,930
債券	499,860	99,915	99,985
その他	700,282	741,288	785,213
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産			
リース債権信託受益権等	1,000,000	1,500,000	1,500,000
その他	865,446	1,060,727	985,505
貸倒引当金	22,928	17,378	17,378
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産			
株式	1,929,391	1,706,917	1,680,813
その他	723,486	827,711	799,820
合計	6,018,537	6,341,180	6,544,888
流動資産	1,723,015	1,922,000	2,310,915
非流動資産	4,295,522	4,419,180	4,233,973
合計	6,018,537	6,341,180	6,544,888

(2) その他の包括利益を通じて測定する資本性金融資産

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融資産の主な銘柄及び公正価値等は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
(株)ビジネスブレイン太田昭和	555,250	473,750	670,000
松竹(株)	344,052	282,720	276,336
Prop Tech plus(株)	-	145,862	142,917
東海旅客鉄道(株)	120,780	154,260	103,920
(株)紀文食品	168,068	126,320	85,903
岩塚製菓(株)	116,600	93,170	71,060
(株)エム・アイ・ピー	57,544	60,825	62,744
(株)丹青社	98,196	101,852	58,703
(株)ソディック	100,409	68,865	50,349
イオン(株)	23,162	32,098	37,822

株式は主に政策投資目的で保有しているため、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に指定しております。

(3) その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産の認識の中止

当社グループは、資産の効率化や取引関係の見直し等を目的として、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産の一部を売却することにより、認識を中止しております。

各連結会計年度における売却時の公正価値及びその他の包括利益として認識されていた累積利得又は損失は以下のとおりであります。

前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)		当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	
公正価値	累積利得又は損失	公正価値	累積利得又は損失
千円	千円	千円	千円
178,266	124,741	14,288	7,192

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産は、認識を中止した場合、その他の包括利益として認識されていた累積利得又は損失を利益剰余金に振り替えております。利益剰余金に振り替えたその他の包括利益の累積利得又は損失(税引後)は、前連結会計年度及び当連結会計年度において、それぞれ86,545千円及び4,990千円であります。

なお、資本性金融商品から認識された受取配当金の内訳は以下のとおりであります。

前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)		当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	
当期中に認識の中止を行った投資	期末日現在で保有している投資	当期中に認識の中止を行った投資	期末日現在で保有している投資
千円	千円	千円	千円
2,660	23,178	199	32,685

11. 棚卸資産

棚卸資産の内訳は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
仕掛品	431,937	436,969	500,833
原材料及び貯蔵品	12,009	11,976	10,638
合計	443,946	448,945	511,471

費用として認識された棚卸資産の金額は、前連結会計年度及び当連結会計年度において、それぞれ14,153,282千円、14,846,057千円です。

また、費用として認識された棚卸資産の評価減の金額は、前連結会計年度及び当連結会計年度において、それぞれ9,407千円、6,064千円です。

12. その他の資産

その他の資産の内訳は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
その他の流動資産			
前払費用	207,281	231,033	273,619
その他	19,019	10,142	9,981
合計	226,301	241,175	283,600
その他の非流動資産			
長期前払費用	39,096	38,118	60,411
その他	782	1,508	267
合計	39,877	39,626	60,678

13. 有形固定資産

増減表

有形固定資産の取得原価、減価償却累計額及び減損損失累計額の増減、及び帳簿価額は以下のとおりであります。

取得原価

	土地	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具器具 及び備品	建設仮勘定	合計額
	千円	千円	千円	千円	千円	千円
2018年4月1日	2,050,728	3,490,038	1,608,477	770,047	5,204	7,924,494
取得	-	55,796	34,052	160,418	39,124	289,391
企業結合による取得	-	58,961	-	48,208	-	107,168
売却又は処分	-	653	2,485	9,207	-	12,345
科目間の振替	-	-	-	44,328	44,328	-
在外営業活動体の換算差額	-	1,647	-	85	-	1,732
2019年3月31日	2,050,728	3,602,495	1,640,045	1,013,709	-	8,306,976
取得	-	81,878	34,103	161,539	78,194	355,714
企業結合による取得	547	40,060	-	4,942	351	45,899
売却又は処分	-	579	4,700	61,549	-	66,828
科目間の振替	-	-	-	-	351	351
在外営業活動体の換算差額	-	21	-	-	323	344
2020年3月31日	2,051,275	3,723,832	1,669,447	1,118,640	77,871	8,641,066

減価償却累計額及び減損損失累計額

	土地	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具器具 及び備品	建設仮勘定	合計額
	千円	千円	千円	千円	千円	千円
2018年4月1日	-	1,668,070	976,210	559,546	-	3,203,827
減価償却費	-	143,923	103,647	82,341	-	329,911
企業結合による取得	-	55,515	-	43,240	-	98,755
減損損失	-	-	-	-	-	-
売却又は処分	-	653	2,408	9,207	-	12,268
在外営業活動体の換算差額	-	146	-	92	-	239
その他	-	632	-	-	-	632
2019年3月31日	-	1,867,341	1,077,450	675,828	-	3,620,618
減価償却費	-	182,788	105,384	105,297	-	393,469
企業結合による取得	-	33,665	-	1,569	-	35,234
減損損失	-	-	-	-	-	-
売却又は処分	-	120	4,700	60,309	-	65,129
在外営業活動体の換算差額	-	39	-	288	-	249
その他	-	-	-	-	-	-
2020年3月31日	-	2,083,712	1,178,134	722,097	-	3,983,944

(注) 有形固定資産の減価償却費は、連結損益計算書の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」に含まれております。

帳簿価額

	土地	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具器具 及び備品	建設仮勘定	合計額
	千円	千円	千円	千円	千円	千円
2018年4月1日	2,050,728	1,821,967	632,267	210,501	5,204	4,720,667
2019年3月31日	2,050,728	1,735,154	562,595	337,881	-	4,686,358
2020年3月31日	2,051,275	1,640,120	491,313	396,543	77,871	4,657,122

14. のれん及び無形資産

(1) 増減表

のれん及び無形資産の取得原価、償却累計額及び減損損失累計額の増減、及び帳簿価額は以下のとおりであります。

取得原価

	のれん	無形資産		
		ソフトウェア	その他	合計額
	千円	千円	千円	千円
2018年4月1日	48,178	4,030,178	93,348	4,123,526
取得	-	844,726	120,209	964,936
企業結合による取得	18,170	4,485	3,739	8,224
売却又は処分	-	-	-	-
在外営業活動体の換算差額	660	290	-	290
その他	-	-	-	-
2019年3月31日	65,688	4,879,680	217,296	5,096,976
取得	-	1,043,723	49,517	994,206
企業結合による取得	238,797	20,346	-	20,346
売却又は処分	-	-	-	-
在外営業活動体の換算差額	-	-	-	-
その他	-	-	-	-
2020年3月31日	304,485	5,943,749	167,779	6,111,528

償却累計額及び減損損失累計額

	のれん	無形資産		
		ソフトウェア	その他	合計額
	千円	千円	千円	千円
2018年4月1日	-	2,438,367	470	2,438,837
企業結合による取得	-	673	-	673
償却費	-	752,742	112	752,854
減損損失	-	-	-	-
売却又は処分	-	-	-	-
在外営業活動体の換算差額	-	65	-	65
その他	-	0	-	0
2019年3月31日	-	3,191,848	582	3,192,429
企業結合による取得	-	9,390	-	9,390
償却費	-	663,263	168	663,431
減損損失	-	-	-	-
売却又は処分	-	-	-	-
在外営業活動体の換算差額	-	-	-	-
その他	-	-	-	-
2020年3月31日	-	3,864,500	749	3,865,250

(注) 無形資産の償却費は、連結損益計算書の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」に含まれております。

帳簿価額

	のれん	無形資産		
		ソフトウェア	その他	合計額
	千円	千円	千円	千円
2018年4月1日	48,178	1,591,811	92,878	1,684,689
2019年3月31日	65,688	1,687,832	216,715	1,904,547
2020年3月31日	304,485	2,079,249	167,030	2,246,279

(2) のれんの減損テスト

企業結合で生じたのれんは、取得日に、企業結合から利益がもたらされる資金生成単位に配分しております。

のれんの帳簿価額の資金生成単位別の内訳は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
台湾普羅納克廈斯股份有限公司	48,178	47,519	47,519
株式会社アイ・エヌ情報センター	-	18,170	18,170
株式会社レインボー・ジャパン	-	-	238,797
合計	48,178	65,688	304,485

当社グループは、のれんについて、毎期末又は減損の兆候がある場合には随時、減損テストを実施しております。

減損テストの回収可能価額は、使用価値に基づき算定しております。

使用価値は、過去の経験及び外部からの情報を反映し、経営者が承認した今後5年分の事業計画を基礎とした将来キャッシュ・フローの見積額を、当該資金生成単位の税引前加重平均資本コストを基礎とした割引率4.3~5.6%（移行日4.3%、前連結会計年度4.9%、当連結会計年度5.6%）により現在価値に割引いて算定しております。成長率は、資金生成単位の属する産業もしくは国における長期の平均成長率を勘案して決定しており、市場の長期の平均成長率を超過しておりません。減損テストに使用した主要な仮定が変更された場合には減損が発生するリスクがありますが、使用価値は当該資産生成単位の帳簿価額を十分に上回っており、減損テストに使用した主要な仮定が合理的に予測可能な範囲で変化したとしても、使用価値が帳簿価額を下回る可能性は低いと判断しております。

15. 投資不動産

投資不動産は、将来の用途は現時点では未定の土地であり、原価モデルを採用しております。

	移行日 (2018年4月1日)		前連結会計年度 (2019年3月31日)		当連結会計年度 (2020年3月31日)	
	帳簿価額	公正価値	帳簿価額	公正価値	帳簿価額	公正価値
	千円	千円	千円	千円	千円	千円
投資不動産	186,322	662,275	186,322	809,000	186,322	809,000

16. 持分法で会計処理されている投資

関連会社に対する投資

個々には重要性のない関連会社に対する投資の帳簿価額は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
帳簿価額合計	617,194	673,249	728,142

個々には重要性のない関連会社の当期包括利益の持分取込額は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
当期利益に対する持分取込額	79,995	72,620
その他の包括利益に対する持分取込額	-	-
当期包括利益に対する持分取込額	79,995	72,620

17. 法人所得税

(1) 繰延税金資産及び繰延税金負債

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳及び増減は以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

	2018年 4月1日	純損益を 通じて認識	その他の 包括利益に おいて認識	企業結合	2019年 3月31日
	千円	千円	千円	千円	千円
繰延税金資産					
退職給付に係る負債	660,985	99,014	24,246	-	784,245
引当金	38,359	20,146	-	-	58,505
有形固定資産	84,540	310	-	-	84,231
無形資産	92,977	22,561	-	-	70,415
その他	1,525,332	216,324	-	98,266	1,407,274
合計	2,402,193	120,035	24,246	98,266	2,404,670
繰延税金負債					
有形固定資産	722,441	654,992	-	-	1,377,433
その他	982,370	755,469	117,117	-	109,784
合計	1,704,811	100,477	117,117	-	1,487,217

当連結会計年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

	2019年 4月1日	純損益を 通じて認識	その他の 包括利益に おいて認識	企業結合	2020年 3月31日
	千円	千円	千円	千円	千円
繰延税金資産					
退職給付に係る負債	784,245	7,963	7,060	-	769,222
引当金	58,505	424	-	-	58,929
有形固定資産	84,231	9,200	-	-	93,430
無形資産	70,415	38,496	-	-	31,919
その他	1,407,274	23,374	-	-	1,383,901
合計	2,404,670	60,210	7,060	-	2,337,400
繰延税金負債					
有形固定資産	1,377,433	716,552	-	-	660,881
その他	109,784	503,510	15,115	-	598,180
合計	1,487,217	213,042	15,115	-	1,259,061

繰延税金資産を認識していない税務上の繰越欠損金及び将来減算一時差異は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
税務上の繰越欠損金	-	-	92,092
将来減算一時差異	-	-	-
合計	-	-	92,092

繰延税金資産を認識していない税務上の繰越欠損金の失効予定は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
1年目	-	-	50,520
2年目	-	-	-
3年目	-	-	-
4年目	-	-	20,586
5年目以降	-	-	20,986
合計	-	-	92,092

繰延税金負債を認識していない子会社及び関連会社に対する投資に係る将来加算一時差異の合計額は、移行日、前連結会計年度及び当連結会計年度において、それぞれ1,436,236千円、1,774,377千円及び2,086,516千円であります。これらは当社グループが一時差異を解消する時期をコントロールでき、かつ予測可能な期間内に当該一時差異が解消しない可能性が高いことから、繰延税金負債を認識しておりません。

(2) 法人所得税費用

法人所得税費用の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
当期税金費用	858,855	1,029,053
繰延税金費用	19,558	152,832
合計	878,413	876,222

(3) 法定実効税率と平均実際負担税率との差異要因は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	%	%
法定実効税率	30.6	30.6
課税所得計算上減算されない費用	1.0	1.3
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.2	0.2
持分法投資損益	0.9	0.8
住民税均等割	0.7	0.7
特別減税	2.0	-
過年度修正	2.8	-
その他	0.4	0.5
平均実際負担税率	32.4	32.1

当社グループは、主に法人税、住民税及び事業税を課されており、これらを基礎として計算した法定実効税率は前連結会計年度において30.6%、当連結会計年度において30.6%となっております。ただし、海外子会社についてはその所在地における法人税等が課されております。

18. 借入金及びリース負債

借入金及びリース負債は以下のとおりであります。なお、借入金及びリース負債は償却原価で測定する金融負債に分類しております。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)	平均利率	返済期限
	千円	千円	千円	%	
短期借入金	50,000	50,000	50,000	0.72	-
1年内返済予定の長期借入金	300,000	300,000	6,672	0.50	-
長期借入金	300,000	-	8,324	1.70	2021年～ 2022年
リース負債(流動)	623,911	704,912	752,312	0.53	-
リース負債(非流動)	2,021,024	1,653,130	1,262,247	0.53	2021年～ 2027年
	3,294,935	2,708,042	2,079,555		
流動負債	973,911	1,054,912	808,984		
非流動負債	2,321,024	1,653,130	1,270,571		
	3,294,935	2,708,042	2,079,555		

(注) 平均利率については、期末残高に対する加重平均利率を記載しております。



19. リース

当社グループは、主として建物及び構築物、カラーオンデマンド印刷機及び複合機等（「機械装置及び運搬具」、「工具器具及び備品」）をリースしております。契約期間は、3年～7年であります。なお、重要な購入選択権、エスカレーション条項及びリース契約によって課された制限（配当、追加借入及び追加リースに関する制限等）はありません。

リースに係る損益の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
使用権資産の減価償却費		
建物及び構築物	627,041	690,319
機械装置及び運搬具	26,763	24,744
工具器具及び備品	48,105	57,251
合計	701,909	772,315
リース負債に係る金利費用	10,538	8,225
短期リース費用	3,574	9,400
少額資産リース費用	41,777	67,027

使用権資産の帳簿価額の内訳は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
使用権資産			
建物及び構築物	2,492,349	2,159,499	1,785,664
機械装置及び運搬具	6,743	33,792	100,493
工具器具及び備品	164,754	148,057	102,103
合計	2,663,846	2,341,349	1,988,261

前連結会計年度及び当連結会計年度における使用権資産の増加額は、それぞれ298,608千円、333,524千円であります。

前連結会計年度及び当連結会計年度におけるリースに係るキャッシュ・アウトフローの合計額は、それぞれ674,445千円及び780,281千円であります。

リース負債の満期分析については、注記「33. 金融商品 (4) 流動性リスク管理」に記載しております。

20. 営業債務及びその他の債務

営業債務及びその他の債務の内訳は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
支払手形	10,461	8,149	16,782
買掛金	722,028	778,018	817,586
未払金	496,517	562,612	595,594
その他	3,352	3,827	4,064
合計	1,232,358	1,352,605	1,434,026

営業債務及びその他の債務は、償却原価で測定する金融負債に分類しております。

21. 従業員給付

当社は、従業員の退職給付に充てるため、確定給付型の制度として企業年金制度と退職一時金制度を採用しております。また、一部の連結子会社は退職一時金制度を採用しております。退職一時金制度は、外部積立を行わず、内部積立のみをもって一時金を支払う非積立型の制度です。

確定給付制度における給付額は勤続年数、勤続した各年に獲得したポイント及びその他の条件により設定されております。確定給付型の制度については、一般的な投資リスク、利率リスク、インフレリスク等に晒されております。

確定給付制度債務及び制度資産の調整表

確定給付制度債務及び制度資産と連結財政状態計算書に計上された確定給付負債及び資産の純額との関係は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
積立型の確定給付制度債務の現在価値	2,156,940	2,296,366	2,380,607
制度資産の公正価値	1,816,952	1,915,599	2,004,858
小計	339,988	380,767	375,749
非積立型の確定給付制度債務の現在価値	1,722,393	2,078,228	2,147,635
確定給付負債及び資産の純額	2,062,381	2,458,995	2,523,384
連結財政状態計算書に計上された確定給付負債及び資産の純額	2,062,381	2,458,995	2,523,384

確定給付制度債務の現在価値の調整表

確定給付制度債務の現在価値の増減は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
確定給付制度債務の現在価値の期首残高	3,879,333	4,374,594
勤務費用	276,864	306,087
利息費用	24,692	22,325
過去勤務費用	-	40,661
再測定		
実績の修正により生じた数理計算上の差異	87,400	14,511
給付支払額	117,406	119,591
新規連結による増加額	223,711	-
確定給付制度債務の現在価値の期末残高	4,374,594	4,528,242

確定給付制度債務の加重平均デュレーションは、前連結会計年度において14.0年、当連結会計年度において13.7年であります。

制度資産の公正価値の調整表

制度資産の公正価値の増減は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
制度資産の公正価値の期首残高	1,816,952	1,915,599
利息収益	10,981	28,734
再測定		
制度資産に係る収益	13,139	6,412
事業主からの拠出金	141,905	144,868
給付支払額	67,379	77,931
制度資産の公正価値の期末残高	1,915,599	2,004,858

当社グループは、翌連結会計年度（2021年3月期）に152,596千円の掛金を拠出する予定であります。

制度資産の項目ごとの内訳

制度資産の主な項目ごとの内訳は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)			前連結会計年度 (2019年3月31日)			当連結会計年度 (2020年3月31日)		
	活発な市場 価格のある 資産	活発な市場 価格のない 資産	合計	活発な市場 価格のある 資産	活発な市場 価格のない 資産	合計	活発な市場 価格のある 資産	活発な市場 価格のない 資産	合計
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
現金及び現金同等物	82,126	-	82,126	50,189	-	50,189	118,086	-	118,086
資本性金融商品									
国内株式	129,185	-	129,185	149,225	-	149,225	146,555	-	146,555
外国株式	77,220	-	77,220	103,251	-	103,251	104,253	-	104,253
負債性金融商品									
国内債券	964,438	-	964,438	814,513	-	814,513	829,811	-	829,811
外国債券	288,895	-	288,895	504,760	-	504,760	505,024	-	505,024
その他(注)	-	275,087	275,087	-	293,661	293,661	-	301,130	301,130
合計	1,541,865	275,087	1,816,952	1,621,937	293,661	1,915,599	1,703,728	301,130	2,004,858

(注)「その他」の主な内容は、貸付金であります。

当社の確定給付企業年金制度の年金資産運用方針は、将来にわたる確定給付制度の支払を確実にを行うために、資産の安全性に十分配慮しながら、中長期的に安定的な収益を確保することを目的としております。具体的には、資産の安全性を確保することを最優先としているため、分散投資は行わず生命保険契約一般勘定100%で運用を行うものとします。

また、確定給付企業年金法に基づき、将来にわたって財政の均衡を保つことができるように、5年毎に掛金の再計算を行うなど定期的に拠出額の見直しを行っております。

主な数理計算上の仮定

主な数理計算上の仮定は以下のとおりです。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
割引率(%)	0.7	0.5	0.6

期末日時点で、以下に示した割合で割引率が変動した場合、確定給付制度債務の増減額は以下のとおりであります。

(単位：千円)

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
割引率(0.5%高)	265,672	293,276	294,500
割引率(0.5%低)	294,149	323,736	324,946

## 22. 引当金

引当金の内訳及び増減は以下のとおりであります。

	資産除去債務	合計
	千円	千円
2018年4月1日	120,923	120,923
割引計算の期間利息費用	286	286
期中増加額	50,248	50,248
期中減少額(目的使用)	-	-
期中減少額(戻入)	-	-
2019年3月31日	171,457	171,457
割引計算の期間利息費用	287	287
期中増加額	16,457	16,457
期中減少額(目的使用)	-	-
期中減少額	-	-
2020年3月31日	188,201	188,201

資産除去債務には、当社グループが使用する賃借事務所・建物等に対する原状回復義務に備え、過去の原状回復実績に基づき将来支払うと見込まれる金額を計上しております。これらの費用は、事務所に施した内部造作の耐用年数を考慮して決定した使用見込期間経過後に支払われると見込んでおりますが、将来の事業計画等により影響を受けます。

## 23. その他の負債

その他の負債の内訳は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
その他の流動負債			
未払消費税等	224,771	143,722	302,200
未払賞与	604,931	686,839	733,104
未払有休休暇	566,372	685,503	763,351
未払費用	677,505	452,155	600,979
その他	151,614	144,008	117,515
合計	2,225,193	2,112,227	2,517,150
その他の非流動負債			
長期従業員給付	374,242	384,861	456,848
その他	12,638	6,917	2,743
合計	386,880	391,778	459,592

24. 資本及びその他の資本項目

(1) 資本金及び資本剰余金

授權株式数、発行済株式総数及び資本金等の残高の増減は以下のとおりであります。

	授權株式数	発行済株式総数	資本金	資本剰余金
	株	株	千円	千円
2018年4月1日	139,500,000	33,444,451	3,058,651	4,683,596
期中増減(注)2	-	2,727,763	-	-
2019年3月31日	139,500,000	30,716,688	3,058,651	4,683,596
期中増減	-	-	-	-
2020年3月31日	139,500,000	30,716,688	3,058,651	4,683,596

(注)1. 当社の発行する株式は、全て権利内容に何ら限定のない無額面の普通株式であり、発行済株式は全額払込済みとなっております。

(注)2. 自己株式の消却による減少であります。

(2) 自己株式

自己株式数及び残高の増減は以下のとおりであります。

	株式数	金額
	株	千円
2018年4月1日	5,727,763	5,348,073
期中増減(注)	2,292,811	2,023,822
2019年3月31日	3,434,952	3,324,251
期中増減	362,200	476,892
2020年3月31日	3,797,152	3,801,143

(注) 期中増減の主な要因は、主に市場買付による取得及び自己株式の消却によるものであります。

(3) 資本剰余金

日本における会社法(以下「会社法」という。)では、株式の発行に対するの払込み又は給付の2分の1以上を資本金に組み入れ、残りは資本剰余金に含まれている資本準備金に組み入れることが規定されております。また、会社法では、資本準備金は株主総会の決議により、資本金に組み入れることができます。

(4) 利益剰余金

会社法では、剰余金の配当として支出する金額の10分の1を、資本準備金及び利益準備金の合計額が資本金の4分の1に達するまで資本準備金又は利益準備金として積み立てることが規定されております。積み立てられた利益準備金は、欠損填補に充当できます。また、株主総会の決議をもって、利益準備金を取り崩すことができます。

(5) その他の資本の構成要素

在外営業活動体の換算差額

外貨建てで作成された在外営業活動体の財務諸表を連結する際に発生した換算差額であります。

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産の公正価値の変動額であります。

確定給付制度の再測定

確定給付制度債務に係る数理計算上の差異、制度資産に係る収益(利息収益に含まれる金額を除く)及び資産上限額の影響(利息収益に含まれる金額を除く)の変動額であります。

25. 配当金

配当金の支払額は以下のとおりであります。

前連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

決議日	株式の種類	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
		千円	円		
2018年5月17日 取締役会決議	普通株式	415,750	15	2018年3月31日	2018年6月6日
2018年10月31日 取締役会決議	普通株式	415,750	15	2018年9月30日	2018年12月5日

当連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

決議日	株式の種類	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
		千円	円		
2019年5月17日 取締役会決議	普通株式	409,226	15	2019年3月31日	2019年6月5日
2019年10月31日 取締役会決議	普通株式	403,793	15	2019年9月30日	2019年12月5日

配当の効力発生日が翌連結会計年度となるものは以下のとおりであります。

前連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

決議日	株式の種類	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
		千円	円		
2019年5月17日 取締役会決議	普通株式	409,226	15	2019年3月31日	2019年6月5日

当連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

決議日	株式の種類	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
		千円	円		
2020年5月20日 取締役会決議	普通株式	403,793	15	2020年3月31日	2020年6月9日

26. 売上収益

(1) 収益の分解

当社グループの事業セグメントは、ディスクロージャー関連事業の単一セグメントであります。取扱製品及びサービスを、上場会社向け法定開示支援サービス等の「上場会社ディスクロージャー関連」、上場会社向けIR支援サービス等の「上場会社IR関連等」、投資信託・不動産投資信託運用会社、外国会社向け開示支援サービス等の「金融商品ディスクロージャー関連」、企業情報・財務情報検索データベース等の「データベース関連」の4つに区分しており、これら4区分の製品及びサービスから生じる収益は顧客との契約に従い計上しており、売上収益として表示しております。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
上場会社ディスクロージャー関連	9,849,568	10,286,753
上場会社IR関連等	5,546,507	6,136,833
金融商品ディスクロージャー関連	7,033,295	6,919,949
データベース関連	728,494	1,102,802

上場会社ディスクロージャー関連

上場会社向け法定開示支援サービス等の「上場会社ディスクロージャー関連」においては、株主総会招集通知、有価証券報告書、四半期報告書、有価証券届出書、目論見書、上場申請書類、決算短信等の作成支援・印刷及び関連するシステムサービスの提供等が含まれております。

法定開示書類の作成支援については、対象の開示書類の作成期間にわたり顧客に対し作成支援業務を提供する義務を負っており、作成期間における当社グループの稼働状況に応じて履行義務が充足されるものであることから、当該履行義務が充足される作成支援期間にわたり収益を計上しております。

法定開示書類の印刷については、顧客に印刷された開示書類を引き渡す義務を負っており、顧客に当該開示書類を引き渡した時点で履行義務が充足されることから、当該履行義務の充足時点で収益を計上しております。

システムサービスの提供については、申込書に定められた期間(通常1年)にわたり申込者に対し当該システムの利用環境を提供する義務を負っており、契約期間に渡り時の経過につれて履行義務が充足されるものであることから、当該履行義務が充足される契約期間に渡り収益を計上しております。

上場会社IR関連等

上場会社向けIR支援サービス等の「上場会社IR関連等」においては、株主通信、各種IRツール、Webコンテンツ(ホームページ・IRサイト等)の作成支援・印刷等が含まれております。

IR資料・ツールやWebコンテンツの作成については、顧客仕様に応じたコンテンツを納品する義務を負っており、顧客がコンテンツを検収した時点で履行義務が充足されることから、当該履行義務の充足時点で収益を計上しております。

IR資料の印刷については、顧客に印刷されたIR資料を引き渡す義務を負っており、顧客に当該IR資料を引き渡した時点で履行義務が充足されることから、当該履行義務の充足時点で収益を計上しております。

上場会社IR関連の企画制作・コンサルティングサービスの提供等については、顧客からの発注に基づくサービスを提供する義務を負っており、顧客にサービスを提供した時点で履行義務が充足されることから、当該履行義務の充足時点で収益を計上しております。

#### 金融商品ディスクロージャー関連

投資信託・不動産投資信託運用会社、外国会社向け開示支援サービス等の「金融ディスクロージャー関連」においては、有価証券届出書、目論見書、有価証券報告書、半期報告書、運用報告書、資産運用報告書等の法定開示書類、各種販売用ツール・Webサイト等の作成支援・印刷等が含まれております。

法定開示書類の作成支援については、対象の開示書類の作成期間にわたり顧客に対し作成支援業務を提供する義務を負っており、作成期間における当社グループの稼働状況に応じて履行義務が充足されるものであることから、当該履行義務が充足される作成期間にわたり収益を計上しております。

法定開示書類の印刷については、顧客に印刷された開示書類を引き渡す義務を負っており、顧客に当該開示書類を引き渡した時点で履行義務が充足されることから、当該履行義務の充足時点で収益を計上しております。

各種販売用ツール・Webサイト等の作成支援については、顧客仕様に応じたコンテンツを納品する義務を負っており、顧客がコンテンツを検収した時点で履行義務が充足されることから、当該履行義務の充足時点で収益を計上しております。

#### データベース関連

企業情報・財務情報検索データベース等の「データベース関連」においては、企業情報・財務情報検索用データベース、経済統計データベース、ファイナンスデータベース等の利用環境の提供等が含まれております。

各種データベースの利用環境の提供については、申込書に定められた期間にわたり申込者に対し当該システムの利用環境を提供する義務を負っており、契約期間にわたり時の経過に連れて履行義務が充足されるものであることから、当該履行義務が充足される契約期間にわたり収益を計上しております。

### (2) 契約残高

顧客との契約から生じた債権、契約負債の内訳は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	千円	千円	千円
顧客との契約から生じた債権	2,208,289	2,185,519	2,535,454
契約負債	478,307	510,237	651,858

前連結会計年度及び当連結会計年度に認識された収益について、期首現在の契約負債残高に含まれていた金額は、それぞれ478,307千円及び510,237千円であります。

契約負債は、主に顧客からの前受金に関連するものであります。

### (3) 顧客との契約の獲得又は履行のためのコストから認識した資産

前連結会計年度及び当連結会計年度において、顧客との契約の獲得又は履行のためのコストから認識した資産はありません。



27. 販売費及び一般管理費

販売費及び一般管理費の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
人件費	3,823,675	4,022,036
販売促進費	285,811	277,895
賃借料	120,457	103,522
減価償却費及び償却費	626,705	638,714
その他	1,755,695	2,019,308
合計	6,612,343	7,061,475

28. その他の収益及び費用

その他の収益の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
設備賃貸料	34,310	27,807
その他	47,159	44,416
合計	81,469	72,223

その他の費用の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
設備賃貸費用	3,935	4,058
固定資産売却損	72	3,025
その他	3,697	3,786
合計	7,704	10,869

29. 金融収益及び金融費用

金融費用の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
支払利息		
償却原価で測定される金融負債	2,638	2,330
リース負債	10,538	8,225
引当金	286	287
合計	13,462	10,842

30. その他の包括利益

その他の包括利益の各項目別の当期発生額及び損益への組替調整額、並びに税効果の影響は以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

	当期発生額	組替調整額	税効果前	税効果	税効果後
	千円	千円	千円	千円	千円
純損益に振り替えられることのない項目					
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	179,572	-	296,689	117,117	179,572
確定給付制度の再測定	54,989	-	79,235	24,246	54,989
純損益に振り替えられることのない項目合計	234,561	-	375,924	141,363	234,561
純損益に振り替えられる可能性のある項目					
在外営業活動体の換算差額	2,830	-	2,830	-	2,830
純損益に振り替えられる可能性のある項目合計	2,830	-	2,830	-	2,830
合計	237,391	-	378,755	141,363	237,391

当連結会計年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

	当期発生額	組替調整額	税効果前	税効果	税効果後
	千円	千円	千円	千円	千円
純損益に振り替えられることのない項目					
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	26,515	-	41,630	15,115	26,515
確定給付制度の再測定	19,077	-	26,136	7,060	19,077
純損益に振り替えられることのない項目合計	7,438	-	15,494	8,055	7,438
純損益に振り替えられる可能性のある項目					
在外営業活動体の換算差額	2,121	-	2,121	-	2,121
純損益に振り替えられる可能性のある項目合計	2,121	-	2,121	-	2,121
合計	9,559	-	17,615	8,055	9,559

31. 1株当たり利益

基本的1株当たり当期利益の算定上の基礎は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
親会社の所有者に帰属する当期利益(千円)	1,834,652	1,846,291
加重平均普通株式数(株)	27,676,186	26,940,547
基本的1株当たり当期利益(円)	66.29	68.53

(注) 希薄化後1株当たり利益については、希薄化効果を有する潜在株式が存在しないため記載しておりません。

### 32. キャッシュ・フロー情報

#### (1) 財務活動から生じた負債の変動

財務活動から生じた負債の変動は以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

#### キャッシュ・フローを伴わない変動

	2018年 4月1日	キャッシュ ・フローを 伴う変動	連結範囲 の変動	為替変動	新規リース	その他	2019年 3月31日
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
短期借入金	350,000	-	-	-	-	-	350,000
長期借入金	300,000	300,000	-	-	-	-	-
リース負債	2,644,935	674,445	126,171	-	298,609	37,228	2,358,042
合計	3,294,935	974,445	126,171	-	298,609	37,228	2,708,042

当連結会計年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

#### キャッシュ・フローを伴わない変動

	2019年 4月1日	キャッシュ ・フローを 伴う変動	連結範囲 の変動	為替変動	新規リース	その他	2020年 3月31日
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
短期借入金	350,000	324,180	30,852	-	-	-	56,672
長期借入金	-	46,386	54,710	-	-	-	8,324
リース負債	2,358,042	780,281	23,542	-	338,691	74,565	2,014,559
合計	2,708,042	1,150,847	109,104	-	338,691	74,565	2,079,555

#### (2) 非資金取引

リースにより取得した使用权資産は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
リースにより取得した使用权資産	65,073	92,102

### 33. 金融商品

#### (1) 資本管理

当社グループは、製造費、販売費及び一般管理費等の営業費用による運転資金及び設備投資を中心とした投資資金の資金需要に対し、自己資金及び金融機関からの借入による資金調達を基本としております。

当社グループは、経営の健全性・効率性を維持し、持続的な成長を実現するため、事業運営上必要な流動性と資金の源泉を安定的に確保するとともに適正な資本水準を維持することを基本方針としております。

当社グループは資本管理について、主にROE（親会社所有者帰属持分当期利益率）を財務指標としております。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
ROE（親会社所有者帰属持分当期利益率）（注）	8.4%	8.3%

（注）親会社の所有者に帰属する当期利益 / 親会社の所有者に帰属する持分（期首・期末）

なお、当社グループが適用を受ける重要な資本規制はありません。

(2) 財務上のリスク管理

当社グループは、経営活動を行う過程において、財務上のリスク（信用リスク・流動性リスク・金利リスク・市場価格の変動リスク）に晒されており、当該財務上のリスクを軽減するために、一定の方針に基づきリスク管理を行っております。

(3) 信用リスク管理

信用リスクは、保有する金融資産の相手先が契約上の債務に関して債務不履行になり、当社グループに財務上の損失を発生させるリスクであります。

当社グループは、財務状況の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図るため、新規取引先等の審査を行っております。また、営業債権については、取引先ごとに期日及び残高の管理を行い、信用リスクが著しく増加したか否かを判断し、信用状態について継続的にモニタリングしております。そのモニタリングした信用状態に基づき、営業債権等の回収可能性を検討し、貸倒引当金を設定しております。

金融資産については、連結財務諸表に表示されている減損後の帳簿価額が当社グループの信用リスクに係る最大エクスポージャーとなります。これらの信用リスクに係るエクスポージャーに関し、保証として保有する担保及びその他の信用補完するものではありません。

なお、当社グループの債権は、広範囲の産業や地域に広がる多数の取引先に対するものであります。当社グループは、単独の相手先又はその相手先が所属するグループについて、過度に集中した信用リスクを有しておりません。

予想信用損失の変動

貸倒引当金の増減は以下のとおりであります。

	常に貸倒引当金を 全期間の予想信用 損失に等しい金額で 測定している金融資産	信用減損金融資産	合計
	千円	千円	千円
2018年4月1日残高	451	529	980
増加（繰入額）	1,455	-	1,455
減少（目的使用）	-	39	39
減少（戻入）	451	-	451
信用減損金融資産への振替	-	-	-
在外営業活動体の換算差額	-	-	-
2019年3月31日残高	1,455	490	1,945
増加（繰入額）	1,501	-	1,501
減少（目的使用）	-	-	-
減少（戻入）	1,455	-	1,455
信用減損金融資産への振替	-	-	-
在外営業活動体の換算差額	-	-	-
2020年3月31日残高	1,501	490	1,991

前連結会計年度及び当連結会計年度において貸倒引当金の変動に影響を与えるような総額での帳簿価額の著しい増減はありません。

信用リスク格付け

当社グループによる信用リスク格付けごとの内訳は以下のとおりであります。

営業債権及びその他の債権

	移行日 (2018年4月1日)		前連結会計年度 (2019年3月31日)		当連結会計年度 (2020年3月31日)	
	全期間の 予想信用損失	営業債権及び その他の債権	全期間の 予想信用損失	営業債権及び その他の債権	全期間の 予想信用損失	営業債権及び その他の債権
	千円	千円	千円	千円	千円	千円
A	451	2,229,810	1,455	2,212,103	1,501	2,550,159
B	-	-	-	-	-	-
C	529	529	490	490	490	490
合計	980	2,230,339	1,945	2,212,593	1,991	2,550,649

営業債権及びその他の債権の格付けは以下のとおり実施しております。

A．正常債権

B．期日経過が6ヶ月以上1年未満で、かつ、債務者の財政状況の把握・検討により、支払能力に問題があるとされた滞留債権

C．回収期日を1年以上経過している滞留債権

(4) 流動性リスク管理

流動性リスクは、当社グループが期限の到来した金融負債の返済義務を履行するにあたり、支払期日にその支払を実行できなくなるリスクであります。

当社グループは、適切な返済資金を準備するとともに、金融機関より随時利用可能な信用枠を確保し、継続的にキャッシュ・フローの計画と実績をモニタリングすることで流動性リスクを管理しております。

金融負債の期日別残高は以下のとおりであります。

移行日(2018年4月1日)

	帳簿価額	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
営業債務及び その他の債務	1,232,358	1,232,358	-	-	-	-	-
短期借入金	50,000	50,000	-	-	-	-	-
1年以内返済予定の 長期借入金	300,000	300,000	-	-	-	-	-
長期借入金	300,000	-	300,000	-	-	-	-
リース負債(流動)	623,911	623,911	-	-	-	-	-
リース負債(非流動)	2,021,024	-	571,471	512,816	541,169	394,887	682
合計	4,527,293	2,506,269	571,471	512,816	541,169	394,887	682

前連結会計年度（2019年3月31日）

	帳簿 価額	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
営業債務及び その他の債務	1,352,605	1,352,605	-	-	-	-	-
短期借入金	50,000	50,000	-	-	-	-	-
1年以内返済予定の 長期借入金	300,000	300,000	-	-	-	-	-
長期借入金	-	-	-	-	-	-	-
リース負債（流動）	704,912	704,912	-	-	-	-	-
リース負債（非流動）	1,653,130	-	645,304	577,591	413,076	11,286	5,873
合計	4,060,647	2,407,518	645,304	577,591	413,076	11,286	5,873

当連結会計年度（2020年3月31日）

	帳簿 価額	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
営業債務及び その他の債務	1,434,026	1,434,026	-	-	-	-	-
短期借入金	50,000	50,000	-	-	-	-	-
1年以内返済予定の長 期借入金	6,672	6,672	-	-	-	-	-
長期借入金	8,324	-	6,672	1,652	-	-	-
リース負債（流動）	752,312	752,312	-	-	-	-	-
リース負債（非流動）	1,262,247	-	666,894	486,535	56,516	29,091	23,212
合計	3,513,581	2,243,010	673,566	488,187	56,516	29,091	23,212

(5) 金利リスク管理

当社グループの借入金の用途は主に設備資金であり固定金利であります。金利変動リスクに晒されている借入金の残高は僅少であるため、金利リスクの感応度分析の記載は省略しております。

(6) 市場価格の変動リスク管理

当社グループは、資本性金融商品（株式）から生じる株価の変動リスクに晒されております。

当社グループは、定期的に公正価値や発行体の財務状況を把握し、保有及び公正価値の変動状況等を経営会議へ報告しております。

当社グループが、期末日現在において保有する資本性金融商品の市場価格が10%変動した場合に、その他の包括利益（税効果控除前）が受ける影響は、以下のとおりであります。ただし、本分析においては、その他の変動要因は一定であることを前提としております。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
その他の包括利益（税効果控除前）への影響	134,653	136,281

(7) 金融商品の公正価値

金融商品の公正価値の算定方法は以下のとおりであります。

(現金及び現金同等物、営業債権及びその他の債権、営業債務及びその他の債務)

短期間で決済されるため、公正価値は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(その他の金融資産)

上場株式の公正価値については、期末日の市場価格によって算定しております。非上場株式の公正価値については類似会社の市場価格に基づく評価技法及び簿価純資産法により算定しております。

(借入金)

短期借入金は、短期間で決済されるため、公正価値は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

長期借入金は、将来キャッシュ・フローを新規に同様の契約を実行した場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

償却原価で測定する金融商品

金融商品の帳簿価額と公正価値は以下のとおりであります。

	移行日 (2018年4月1日)		前連結会計年度 (2019年3月31日)		当連結会計年度 (2020年3月31日)	
	帳簿価額	公正価値	帳簿価額	公正価値	帳簿価額	公正価値
	千円	千円	千円	千円	千円	千円
償却原価で測定する金融負債						
借入金	650,000	648,369	350,000	349,770	64,996	64,831

公正価値で測定する金融商品

公正価値で測定する金融商品について、測定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じた公正価値測定額を、レベル1からレベル3までに分類しております。

レベル1：活発な市場における同一の資産又は負債の市場価格

レベル2：レベル1以外の、観察可能な価格を直接又は間接的に使用して算出された公正価値

レベル3：観察不能なインプットを含む評価技法から算出された公正価値

移行日(2018年4月1日)

	レベル1	レベル2	レベル3	合計
	千円	千円	千円	千円
資産：				
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産				
その他の金融資産	-	-	1,842,519	1,842,519
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産				
その他の金融資産	2,408,732	-	244,145	2,652,877

前連結会計年度(2019年3月31日)

	レベル1	レベル2	レベル3	合計
	千円	千円	千円	千円
資産：				
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産				
その他の金融資産	-	-	2,543,350	2,543,350
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産				
その他の金融資産	2,177,030	-	357,598	2,534,629

当連結会計年度（2020年3月31日）

	レベル1	レベル2	レベル3	合計
	千円	千円	千円	千円
資産：				
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産				
その他の金融資産	-	-	2,468,127	2,468,127
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産				
その他の金融資産	2,165,421	-	315,212	2,480,633

公正価値ヒエラルキーのレベル間の振替は、振替を生じさせた事象又は状況の変化が生じた日に認識しております。各年度において、公正価値レベル1とレベル2の間の重要な振替は行われておりません。

#### 評価プロセス

レベル3に分類された金融商品に係る公正価値の測定は、当社グループの会計方針に従い、経理部門で決定しております。

#### レベル3に分類された金融商品に関する定量的情報

レベル3に分類された非上場株式は類似企業比較法及び純資産に基づく評価モデル等により、公正価値を測定しております。この評価モデルにおいて、EBITDA倍率等の観察可能でないインプットを用いているため、レベル3に分類しております。公正価値の測定には、類似企業に応じて8.3倍～10.6倍のEBITDA倍率等を使用しております。また非上場株式以外の主な金融商品はリース債権信託受益権等であり、これらの公正価値については、将来キャッシュ・フローを、期日までの期間及び信用リスクを加味した利率で割り引いた現在価値により算定しています。

#### レベル3に分類された金融商品の期首残高から期末残高への調整表

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
期首残高	2,086,663	2,900,948
利得及び損失合計		
純損益(注)1	155,185	33,126
その他の包括利益(注)2	91,584	28,460
購入	1,019,877	211,713
売却	6,700	652
その他	262,494	333,335
期末残高	2,900,948	2,783,340
報告期末に保有している資産について純損益に計上された当期の未実現損益の変動(注)1	-	-

(注)1. 連結損益計算書の「金融収益」及び「金融費用」に含まれております。

2. 連結包括利益計算書の「その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産」に含まれております。



34. 子会社

当連結会計年度末の主な子会社の状況は以下のとおりであります。

名称	所在地	主要な事業の内容	議決権の所有割合 (%)
株式会社アスプコミュニケーションズ	日本	上場会社ディスクロージャー関連 上場会社I R 関連等 金融商品ディスクロージャー関連 データベース関連	100
日本財務翻訳株式会社	日本	上場会社I R 関連等	100
株式会社アイ・エヌ情報センター	日本	データベース関連	90
株式会社レインボー・ジャパン	日本	上場会社I R 関連等 金融商品ディスクロージャー関連	100
台湾普羅納克廈斯股份有限公司	台湾	上場会社I R 関連等	100
PRONEXUS VIETNAM CO., LTD	ベトナム	上場会社I R 関連等	95

35. 関連当事者

(1) 関連当事者との取引

前連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

関連当事者との間における重要な取引がないため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

関連当事者との間における重要な取引がないため、記載を省略しております。

(2) 主要な経営幹部に対する報酬

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
	千円	千円
短期給付	226,251	239,304

主要な経営幹部に対する報酬は、当社の取締役に対する報酬であります。

36. 後発事象

該当事項はありません。

### 37. 初度適用

当社グループは、当連結会計年度からIFRSに準拠した連結財務諸表を開示しております。日本基準に準拠して作成された直近の連結財務諸表は2019年3月31日に終了する連結会計年度に関するものであり、IFRS移行日は2018年4月1日であります。

#### (1) IFRS第1号の免除規定

IFRSでは、IFRSを初めて適用する会社（以下「初度適用企業」という。）に対して、原則として、IFRSで要求される基準を遡及して適用することを求めています。ただし、IFRS第1号「国際会計基準の初度適用」（以下「IFRS第1号」という。）では、IFRSで要求される基準の一部について強制的に免除規定を適用しなければならないものと任意に免除規定を適用するものを定めています。これらの規定の適用に基づく影響は、IFRS移行日において利益剰余金、またはその他の資本の構成要素で調整しております。当社グループが日本基準からIFRSへ移行するにあたり、採用した免除規定は以下のとおりであります。

##### ・企業結合

初度適用企業は、IFRS移行日前行われた企業結合に対して、IFRS第3号「企業結合」（以下「IFRS第3号」という。）を遡及適用しないことを選択することが認められております。当社グループは、当該免除規定を適用し、移行日前行われた企業結合について、IFRS第3号を遡及適用しないことを選択しております。この結果、移行日前行われた企業結合から生じたのれんおよび持分法適用関連会社におけるのれん相当額の額については、日本基準に基づく移行日時点での帳簿価額によっております。

なお、のれんについては、減損の兆候の有無に関わらず、移行日時点での減損テストを実施していません。

##### ・リース

IFRS第1号では、初度適用企業は、IFRS移行日時点で存在する契約にリースが含まれているかどうかを、同日時点で存在する事実及び状況に基づいて判定することが認められております。また、リース負債を、残りのリース料を移行日現在の借手の追加借入利率で割り引いた現在価値で測定し、使用権資産を、リース負債と同額とすることが認められております。リース期間が移行日から12ヶ月以内に終了するリース及び原資産が少額であるリースについて、費用として認識することが認められております。

当社グループは、当該免除規定を適用し、リースの認識・測定を行っております。

##### ・以前に認識した金融商品の指定

IFRS第1号では、IFRS第9号「金融商品」（以下「IFRS第9号」という。）における分類について、当初認識時点で存在する事実及び状況ではなく、移行日時点の事実及び状況に基づき判断することが認められております。また、移行日時点で存在する事実及び状況に基づき資本性金融資産をその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産として指定することが認められております。

当社グループはIFRS第9号における分類について、移行日時点で存在する事実及び状況に基づき判断を行っており、一部の資本性金融資産についてその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産として指定しております。

##### ・有形固定資産の原価に算入される廃棄負債

IFRS第1号では、有形固定資産の原価に算入される廃棄等の債務に関わる負債について、廃棄等の債務の発生当初から遡及適用する方法、又は移行日時点で当該廃棄等の債務を測定する方法のいずれかを選択することが認められております。当社グループは、有形固定資産の原価に算入される廃棄等の債務について、移行日時点で測定する方法を選択しております。

(2) IFRS第1号の強制的な例外規定

IFRS第1号では、「見積り」及び「金融商品の分類及び測定」等について、IFRSの遡及適用を禁止しております。当社グループは、これらの項目について移行日より将来に向かって適用しております。

(3) IFRSの初度適用において開示が求められる調整表は以下のとおりであります。

なお、調整表の「表示組替」には利益剰余金及び包括利益に影響を及ぼさない項目を、「認識・測定の差異」には利益剰余金及び包括利益に影響を及ぼす項目を含めて表示しております。

2018年4月1日(IFRS移行日)現在の資本に対する調整

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
	千円	千円	千円	千円		
資産の部						資産
流動資産						流動資産
現金及び預金	11,736,115	876,962	-	12,613,077	(1)	現金及び現金同等物
受取手形及び売掛金	2,208,289	21,071	-	2,229,360	(2),(3)	営業債権及びその他の債権
有価証券	2,599,978	876,962	-	1,723,015		その他の金融資産
仕掛品	431,937	12,009	-	443,946	(4)	棚卸資産
原材料及び貯蔵品	12,009	12,009	-	-	(4)	
その他	277,050	21,521	29,228	226,301	(2)	その他の流動資産
貸倒引当金	451	451	-	-	(3)	
流動資産合計	17,264,927	-	29,228	17,235,699		流動資産合計
固定資産						非流動資産
有形固定資産	4,502,361	106,521	324,827	4,720,667	(6)	有形固定資産
	-	106,521	2,557,325	2,663,846	(6)	使用権資産
	-	48,178	-	48,178	(7)	のれん
無形固定資産	1,740,922	48,178	8,054	1,684,689	(7)	無形資産
	-	186,322	-	186,322		投資不動産
	-	617,194	-	617,194	(9)	持分法で会計処理されている投資
投資有価証券	3,788,594	303,914	203,013	4,295,522	(3),(5)	その他の金融資産
					(8),(9)	
繰延税金資産	427,408	-	269,973	697,382		繰延税金資産
その他	1,170,765	1,130,887	-	39,877		その他の非流動資産
貸倒引当金	23,457	23,457	-	-	(3)	
固定資産合計	11,606,593	-	3,347,085	14,953,678		非流動資産合計
資産合計	28,871,521	-	3,317,857	32,189,378		資産合計

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定 の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
	千円	千円	千円	千円		
負債の部						負債及び資本
流動負債						負債 流動負債
支払手形及び買掛金	742,761	499,869	10,272	1,232,358	(2)	営業債務及びその他の債務
短期借入金	50,000	300,000	-	350,000	(10)	借入金
1年内返済予定の長期借入金	300,000	300,000	-	-	(10)	
	-	49,162	574,749	623,911	(5),(6)	リース負債
未払法人税等	726,751	-	-	726,751		未払法人所得税等
賞与引当金	604,931	604,931	-	-	(12)	
	-	478,307	-	478,307	(11)	契約負債
その他	2,040,214	422,407	607,386	2,225,193	(2),(5) (12)	その他の流動負債
流動負債合計	4,464,658	-	1,171,863	5,636,521		流動負債合計
固定負債						非流動負債
長期借入金	300,000	-	-	300,000	(10)	借入金
	-	73,426	1,947,599	2,021,024	(5),(6)	リース負債
退職給付引当金	2,062,381	-	-	2,062,381	(14)	退職給付に係る負債
役員退職慰労引当金	2,250	2,250	120,923	120,923	(13)	引当金
繰延税金負債	260,762	-	260,762	-		
その他	311,464	71,176	146,592	386,880	(5) (13)	その他の非流動負債
固定負債合計	2,936,857	-	1,954,352	4,891,209		非流動負債合計
負債合計	7,401,514	-	3,126,215	10,527,730		負債合計
純資産の部						資本
資本金	3,058,651	-	-	3,058,651		資本金
資本剰余金	4,683,596	-	-	4,683,596		資本剰余金
自己株式	5,348,073	-	-	5,348,073		自己株式
その他の包括利益累計額合計	707,189	-	68,978	638,212		その他の資本の構成要素
利益剰余金	18,368,644	-	260,619	18,629,263	(15)	利益剰余金
	21,470,006	-	191,641	21,661,648		親会社の所有者に帰属する持 分合計
純資産合計	21,470,006	-	191,641	21,661,648		資本合計
負債純資産合計	28,871,521	-	3,317,857	32,189,378		負債及び資本合計

2019年3月31日(直近の日本基準の連結財務諸表作成日)現在の資本に対する調整

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定 の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
	千円	千円	千円	千円		
資産の部						資産
流動資産						流動資産
現金及び預金	11,014,356	877,948	-	11,892,304	(1)	現金及び現金同等物
受取手形及び売掛金	2,185,519	25,129	-	2,210,648	(2),(3)	営業債権及びその他の債権
有価証券	2,799,948	877,948	-	1,922,000		その他の金融資産
仕掛品	436,969	11,976	-	448,945	(4)	棚卸資産
原材料及び貯蔵品	11,976	11,976	-	-	(4)	
その他	290,650	26,584	22,891	241,175	(2)	その他の流動資産
貸倒引当金	1,455	1,455	-	-	(3)	
流動資産合計	16,737,964	-	22,891	16,715,073		流動資産合計
固定資産						非流動資産
有形固定資産	4,506,112	104,157	284,403	4,686,358	(6)	有形固定資産
	-	104,157	2,237,191	2,341,349	(6)	使用権資産
	-	33,263	32,426	65,688	(7)	のれん
無形固定資産	1,942,765	33,263	4,955	1,904,547	(7)	無形資産
	-	186,322	-	186,322		投資不動産
	-	613,088	60,161	673,249	(9)	持分法で会計処理されている 投資
投資有価証券	3,877,186	385,836	156,158	4,419,180	(3),(5) (8),(9)	その他の金融資産
繰延税金資産	504,912	-	412,541	917,453		繰延税金資産
その他	1,242,740	1,203,115	-	39,626		その他の非流動資産
貸倒引当金	17,868	17,868	-	-	(3)	
固定資産合計	12,055,848	-	3,177,924	15,233,772		非流動資産合計
資産合計	28,793,812	-	3,155,033	31,948,845		資産合計

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定 の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
	千円	千円	千円	千円		
負債の部						負債及び資本
流動負債						負債
支払手形及び買掛金	798,775	566,439	12,608	1,352,605	(2)	流動負債
短期借入金	50,000	300,000	-	350,000	(10)	営業債務及びその他の債務
1年内返済予定の長期借入金	300,000	300,000	-	-	(10)	借入金
	-	49,162	655,751	704,912	(5),(6)	リース負債
未払法人税等	295,648	-	-	295,648		未払法人所得税等
賞与引当金	686,839	686,839	-	-	(12)	
	-	510,237	-	510,237	(11)	契約負債
その他	1,837,928	438,997	713,296	2,112,227	(2),(5) (12)	その他の流動負債
流動負債合計	3,969,191	-	1,356,438	5,325,629		流動負債合計
固定負債						非流動負債
	-	75,696	1,577,434	1,653,130	(5),(6)	リース負債
退職給付引当金	2,413,028	-	45,967	2,458,995	(14)	退職給付に係る負債
役員退職慰労引当金	9,560	9,560	171,457	171,457	(13)	引当金
繰延税金負債	214,911	-	214,911	-		
その他	301,613	66,136	156,301	391,778	(5) (13)	その他の非流動負債
固定負債合計	2,939,112	-	1,736,247	4,675,359		非流動負債合計
負債合計	6,908,303	-	3,092,685	10,000,989		負債合計
純資産の部						資本
資本金	3,058,651	-	-	3,058,651		資本金
資本剰余金	4,683,596	-	-	4,683,596		資本剰余金
自己株式	3,324,251	-	-	3,324,251		自己株式
その他の包括利益累計額合計	458,106	-	88,842	369,265		その他の資本の構成要素
利益剰余金	16,960,447	-	156,918	17,117,366	(15)	利益剰余金
	21,836,549	-	68,077	21,904,626		親会社の所有者に帰属する持 分合計
非支配株主持分	48,960	-	5,729	43,231		非支配持分
純資産合計	21,885,509	-	62,348	21,947,857		資本合計
負債純資産合計	28,793,812	-	3,155,033	31,948,845		負債及び資本合計

表示の組替及び資本に対する調整に関する注記

(1) 現金及び預金の振替

日本基準では「現金及び預金」に含めていた預入期間3ヶ月超の定期預金については、IFRSでは、「その他の金融資産（流動）」に振替えております。また、有価証券のうち、即換金可能且つ価値変動が僅少なものについては、IFRSでは、「現金及び現金同等物」に振替えております。

(2) 未収入金及び未払金の振替

日本基準では流動資産の「その他」に含めていた未収入金については、IFRSでは「営業債権及びその他の債権」に振替えて表示し、また、日本基準では流動負債の「その他」に含めていた「未払金」については、IFRSでは「営業債務及びその他の債務」に振替えて表示しております。

(3) 貸倒引当金の振替

日本基準では区分掲記していた「貸倒引当金（流動）」については、IFRSでは「営業債権及びその他の債権」及び「その他の金融資産（流動）」から直接控除して純額で表示するように組替え、また「貸倒引当金（固定）」についても同様に、「その他の金融資産（固定）」から直接控除して純額で表示するように組替えております。

(4) 棚卸資産

日本基準において、区分掲記していた「仕掛品」及び、「原材料及び貯蔵品」を、IFRSにおいては、「棚卸資産」として表示しております。

(5) その他の金融資産及び金融負債の振替

日本基準では、区分掲記していた「投資有価証券」についてはIFRSでは「その他の金融資産（非流動）」に振替えて表示しております。また、日本基準では流動負債の「その他」及び固定負債の「その他」に含めていたリース債務は、それぞれIFRSでは「リース負債（流動）」及び「リース負債（非流動）」に組替えて表示しております。

(6) 有形固定資産の計上額の調整

日本基準では有形固定資産（リース資産を除く）の減価償却方法について、2015年3月以前に取得した有形固定資産については主として定率法を採用していましたが、IFRSでは定額法を採用しております。また、日本基準におけるオペレーティング・リース及び賃貸借取引に準じて処理されていたファイナンス・リース取引を、IFRSでは売買取引に準じて「使用权資産」を計上し、対応する債務を「リース負債（流動）」及び「リース負債（非流動）」に計上しております。

(7) のれんの計上額の調整

日本基準ではのれんについて償却しますが、IFRSでは非償却であるため、移行日以降償却せずに毎期減損テストを行います。なお、移行日時点で減損テストを実施した結果、減損は発生しておりませんでした。

(8) 資本性金融商品の測定

投資有価証券について、日本基準では上場株式について時価を基礎として計上し、非上場株式については取得原価を基礎として計上しており、必要に応じて発行会社の財政状態の悪化に応じて減損処理を行っていましたが、IFRSでは全てその他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融資産に指定して、その他の包括利益を通じて公正価値で測定しています。

(9) 持分法で会計処理されている投資の計上額の調整

日本基準では「投資有価証券」に含めていた「持分法で会計処理されている投資」について、IFRSでは区分掲記しております。また、日本基準では、持分法適用関連会社に対するのれんについて償却しますが、IFRSでは非償却であるため、移行日以降償却を行っておりません。

(10) 借入金の振替

日本基準では流動負債として区分掲記していた「1年内返済予定の長期借入金」については、IFRSでは「借入金（流動）」に組替えて表示し、また、日本基準では固定負債として区分掲記していた「長期借入金」については、IFRSでは「借入金（非流動）」に組替えて表示しております。

(11) 契約負債の振替

日本基準では「その他（流動）」に含めていた前受金及び前受収益について、IFRSでは「契約負債」に組替えて表示しております。

(12) その他の流動負債の振替

日本基準では流動負債に区分掲記していた「賞与引当金」は、IFRSでは「その他の流動負債」に組替えて表示しております。また、日本基準では会計処理をしていなかった未消化の有給休暇について、IFRSでは「その他の流動負債」として負債計上しております。

(13) その他の非流動負債の振替

日本基準では固定負債に区分掲記していた「役員退職慰労引当金」は、IFRSでは「その他の非流動負債」に組替えて表示しております。また、日本基準では会計処理をしていなかった永年勤続報酬引当額について、IFRSでは「その他の非流動負債」として負債計上しております。

(14) 退職給付に係る負債の調整

日本基準では数理計算上の差異について、発生時にその他の包括利益で認識し、従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数により按分した額を発生翌年度から費用処理しておりましたが、IFRSでは発生時にその他の包括利益に認識し、直ちに利益剰余金に振替えております。

(15) 利益剰余金に対する調整

	注記	移行日 (2018年4月1日)	前連結会計年度 (2019年3月31日)
		千円	千円
有形固定資産の計上額の調整	(6)	206,728	135,764
資本性金融商品に対する調整	(8)	407,676	407,676
未払有給休暇に対する調整	(12)	566,372	685,503
退職給付に係る負債の調整	(14)	71,801	153,011
永年勤続報酬に対する調整	(13)	146,592	156,301
その他		3,852	94,462
小計		166,509	356,912
税効果による調整		427,128	513,830
合計		260,619	156,918



前連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)(直近の日本基準の連結財務諸表作成日)  
に係る損益及び包括利益に対する調整

(連結損益計算書)

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定 の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
	千円	千円	千円	千円		
売上高	23,157,864	-	-	23,157,864		売上収益
売上原価	14,076,210	-	77,071	14,153,282	(1),(4) (6)	売上原価
売上総利益	9,081,654	-	77,071	9,004,583		売上総利益
販売費及び一般管理費	6,582,234	-	30,110	6,612,343	(1),(2) (4),(6)	販売費及び一般管理費
	-	236,145	154,676	81,469		その他の収益
	-	7,793	89	7,704		その他の費用
営業利益	2,499,420	228,352	261,767	2,466,004		営業利益
営業外収益	283,527	283,527	-	-	(5)	
営業外費用	10,432	10,432	-	-	(5)	
特別利益	154,676	154,676	-	-	(5)	
	-	182,224	-	182,224	(5)	金融収益
	-	2,638	10,824	13,462	(5)	金融費用
	-	19,834	60,161	79,995	(3),(5)	持分法による投資利益
税金等調整前当期純利益	2,927,191	-	212,431	2,714,761		税引前利益
法人税、住民税及び事業税	897,051	58,153	76,791	878,413	(7)	法人所得税費用
法人税等調整額	58,153	58,153	-	-	(7)	
当期純利益	1,971,987	-	135,640	1,836,347		当期利益 当期利益の帰属
親会社株主に帰属する当期純利益	1,970,254	-	135,602	1,834,652		親会社の所有者
非支配株主に帰属する当期純利益	1,734	-	38	1,696		非支配持分

(連結包括利益計算書)

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定 の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
	千円	千円	千円	千円		
その他の包括利益						その他の包括利益 純損益に振り替えられること のない項目
その他有価証券評価差額金	210,980	-	31,408	179,572		その他の包括利益を通じて 公正価値で測定する金融資 産
退職給付に係る調整額	35,432	-	19,557	54,989	(4)	確定給付制度の再測定 純損益に振り替えられる可能 性のある項目
為替換算調整勘定	2,672	-	158	2,830		在外営業活動体の換算差額
その他の包括利益合計	249,083	-	11,692	237,391		税引後その他の包括利益
包括利益	1,722,904	-	123,948	1,598,956		当期包括利益

## 損益及び包括利益に対する調整に関する注記

### (1) 減価償却方法の変更

日本基準では有形固定資産（リース資産を除く）の減価償却方法について、2015年3月以前に取得した有形固定資産については主として定率法を採用していましたが、IFRSでは定額法を採用しております。当該変更により、減価償却費が含まれる「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」を調整しております。

### (2) のれんの計上額の調整

日本基準ではのれんについて償却しますが、IFRSでは非償却であるため、移行日以降償却を中止しております。

### (3) 持分法による投資利益の調整

日本基準では持分法適用関連会社に対するのれんについて償却しますが、IFRSでは非償却であるため、移行日以降償却を中止しております。

### (4) 退職給付に係る負債の会計処理

日本基準では数理計算上の差異について、発生時にその他の包括利益で認識し、従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数により按分した額を発生翌年度から費用処理していましたが、IFRSでは発生時にその他の包括利益に認識し、直ちに利益剰余金に振替えております。

### (5) 表示科目に対する調整

日本基準では「営業外収益」、「営業外費用」、「特別利益」及び「特別損失」に表示していた項目を、IFRSでは財務関係損益については「金融収益」及び「金融費用」として計上し、それ以外の項目については、「その他の収益」、「その他の費用」及び「持分法による投資利益」として表示しております。

### (6) 従業員給付

日本基準では会計処理をしていなかった未消化の有給休暇や永年勤続報酬に対して負債を計上しており、「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」を調整しております。

### (7) 法人所得税費用

日本基準では「法人税、住民税及び事業税」、「法人税等調整額」を区分掲記していましたが、IFRSでは「法人所得税費用」として一括して表示しております。また、IFRSの適用に伴い、全ての繰延税金資産の回収可能性を見直しております。

## 前連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）（直近の日本基準の連結財務諸表作成日）に係るキャッシュ・フローに対する調整

日本基準では、「現金及び現金同等物」に含めていた一部の有価証券について、IFRSでは有価証券の定義を満たすため「有価証券」として認識しております。この結果、「現金及び現金同等物の期首残高」、「現金及び現金同等物の期末残高」がそれぞれ1,000百万円、1,500百万円減少し、投資活動によるキャッシュ・フローが500百万円減少しております。また、日本基準では、オペレーティング・リース取引に係る支払リース料は、営業活動によるキャッシュ・フローに区分してありますが、IFRSでは、原則としてすべてのリースについて、リース負債の認識が要求され、リース負債の返済による支出674百万円は、財務活動によるキャッシュ・フローに区分してあります。

そのため、財務活動によるキャッシュ・フローが623百万円減少し、営業活動によるキャッシュ・フローが同額増加しております。

(2)【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(千円)	9,480,862	14,083,285	19,244,381	24,446,337
税金等調整前四半期(当期)純利益金額(千円)	2,790,022	2,718,726	2,778,999	2,717,834
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益金額(千円)	1,902,605	1,856,739	1,876,356	1,816,581
1株当たり四半期(当期)純利益金額(円)	70.46	68.87	69.63	67.43

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額又は1株当たり四半期純損失金額( )(円)	70.46	1.70	0.73	2.22

- (注) 1. 当連結会計年度における四半期情報については、日本基準により作成しております。また、千円未満を四捨五入して記載しております。
2. 当連結会計年度および第4四半期については、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査又はレビューを受けておりません。

決算日後の状況

特記事項はありません。

## 2【財務諸表等】

## (1)【財務諸表】

## 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	9,429,173	9,267,584
受取手形	15,337	11,007
売掛金	2,148,903	2,385,501
有価証券	2,699,952	2,799,947
仕掛品	197,720	265,285
原材料及び貯蔵品	11,962	10,437
前払費用	262,635	291,301
その他	25,043	54,420
貸倒引当金	438	490
流動資産合計	14,790,288	15,084,992
固定資産		
有形固定資産		
建物	1,016,718	981,797
構築物	14,958	11,540
機械及び装置	594,058	584,227
車両運搬具	255	168
工具、器具及び備品	315,771	304,539
土地	1,379,367	1,379,367
建設仮勘定	-	67,200
有形固定資産合計	3,321,127	3,328,838
無形固定資産		
ソフトウェア	1,766,136	2,037,110
ソフトウェア仮勘定	186,481	130,932
その他	6,881	6,821
無形固定資産合計	1,959,498	2,174,862
投資その他の資産		
投資有価証券	3,261,310	3,062,849
関係会社株式	1,466,585	1,848,954
敷金及び保証金	606,506	594,116
施設利用会員権	46,082	46,082
その他	461,670	548,061
貸倒引当金	17,868	17,880
投資その他の資産合計	5,824,284	6,082,182
固定資産合計	11,104,909	11,585,882
資産合計	25,895,198	26,670,873

(単位：千円)

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
<b>負債の部</b>		
<b>流動負債</b>		
買掛金	954,050	990,086
短期借入金	50,000	50,000
1年内返済予定の長期借入金	300,000	-
リース債務	39,123	37,403
未払金	590,665	557,711
未払消費税等	94,671	214,347
未払法人税等	249,635	558,139
未払費用	298,996	454,843
前受収益	378,343	505,485
賞与引当金	446,389	468,828
その他	167,494	155,608
流動負債合計	3,569,366	3,992,449
<b>固定負債</b>		
長期借入金	-	-
リース債務	66,353	115,794
役員長期未払金	219,000	219,000
繰延税金負債	201,917	101,854
退職給付引当金	1,240,723	1,328,633
その他	6,917	-
固定負債合計	1,734,910	1,765,281
負債合計	5,304,276	5,757,730
<b>純資産の部</b>		
<b>株主資本</b>		
資本金	3,058,651	3,058,651
資本剰余金		
資本準備金	4,683,596	4,683,596
資本剰余金合計	4,683,596	4,683,596
利益剰余金		
利益準備金	177,337	177,337
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金	1,439,024	1,410,420
別途積立金	12,600,000	12,600,000
繰越利益剰余金	1,401,106	2,225,882
利益剰余金合計	15,617,467	16,413,639
自己株式	3,324,251	3,801,143
株主資本合計	20,035,463	20,354,743
<b>評価・換算差額等</b>		
その他有価証券評価差額金	555,459	558,400
評価・換算差額等合計	555,459	558,400
純資産合計	20,590,922	20,913,143
負債純資産合計	25,895,198	26,670,873

## 【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当事業年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
売上高	1 22,754,580	1 23,333,888
売上原価	1 14,289,146	1 14,473,517
売上総利益	8,465,434	8,860,371
販売費及び一般管理費	1, 2 6,378,548	1, 2 6,655,001
営業利益	2,086,887	2,205,370
営業外収益		
受取利息及び受取配当金	50,414	1 51,832
設備賃貸料	34,310	1 27,807
投資事業組合運用益	155,185	33,126
その他	1 45,943	49,431
営業外収益合計	285,852	162,196
営業外費用		
支払利息	2,217	1,614
その他	5,959	9,066
営業外費用合計	8,176	10,679
経常利益	2,364,563	2,356,887
特別利益		
投資有価証券売却益	124,741	-
特別利益合計	124,741	-
税引前当期純利益	2,489,303	2,356,887
法人税、住民税及び事業税	770,960	839,506
法人税等調整額	48,506	91,811
法人税等合計	819,465	747,696
当期純利益	1,669,838	1,609,191

【製造原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)		当事業年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
材料費	1	1,367,111	9.4	1,423,383	9.6
労務費		3,111,974	21.5	3,766,220	25.5
経費		10,005,717	69.1	9,580,027	64.9
当期総製造費用		14,484,803	100.0	14,769,630	100.0
期首仕掛品たな卸高		232,724		197,720	
合計		14,717,527		14,967,350	
差引：他勘定振替高	2	230,661		228,548	
差引：期末仕掛品たな卸高		197,720		265,285	
当期製品製造原価		14,289,146		14,473,517	

原価計算の方法

原価計算の方法は、実際個別原価計算を採用しております。

(注) 1. 主な内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当事業年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
外注加工費	7,957,238千円	7,639,788千円
賃借料	141,144	148,730
消耗品費	131,339	118,826
減価償却費	976,727	871,137

2. 他勘定振替の内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当事業年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
広告宣伝費	202,790千円	205,229千円
消耗品費	15,416	14,378
福利厚生費	1,880	1,523
その他	10,573	7,419
合計	230,661	228,548

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

(単位：千円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金			利益剰余金合計
		資本準備金	資本剰余金合計		その他利益剰余金			
					固定資産圧縮積立金	別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	3,058,651	4,683,596	4,683,596	177,337	1,467,628	12,600,000	3,081,115	17,326,080
当期変動額								
固定資産圧縮積立金の取崩					28,604		28,604	-
剰余金の配当							831,500	831,500
当期純利益							1,669,838	1,669,838
自己株式の取得							-	-
自己株式の消却							2,546,951	2,546,951
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）							-	
当期変動額合計	-	-	-	-	28,604	-	1,680,008	1,708,612
当期末残高	3,058,651	4,683,596	4,683,596	177,337	1,439,024	12,600,000	1,401,106	15,617,467

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	5,348,073	19,720,253	766,438	766,438	20,486,691
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の取崩		-			-
剰余金の配当		831,500			831,500
当期純利益		1,669,838			1,669,838
自己株式の取得	523,128	523,128			523,128
自己株式の消却	2,546,951	-			-
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			210,980	210,980	210,980
当期変動額合計	2,023,822	315,210	210,980	210,980	104,230
当期末残高	3,324,251	20,035,463	555,459	555,459	20,590,922



当事業年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金			利益剰余金 合計
		資本準備金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金			
				固定資産圧 縮積立金	別途積立金	繰越利益剰 余金		
当期首残高	3,058,651	4,683,596	4,683,596	177,337	1,439,024	12,600,000	1,401,106	15,617,467
当期変動額								
固定資産圧縮積立金の取崩					28,604		28,604	-
剰余金の配当							813,019	813,019
当期純利益							1,609,191	1,609,191
自己株式の取得							-	-
株主資本以外の項目の当期 変動額（純額）							-	
当期変動額合計	-	-	-	-	28,604	-	824,776	796,172
当期末残高	3,058,651	4,683,596	4,683,596	177,337	1,410,420	12,600,000	2,225,882	16,413,639

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合 計	その他有価 証券評価差 額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	3,324,251	20,035,463	555,459	555,459	20,590,922
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の取崩		-			-
剰余金の配当		813,019			813,019
当期純利益		1,609,191			1,609,191
自己株式の取得	476,892	476,892			476,892
株主資本以外の項目の当期 変動額（純額）			2,941	2,941	2,941
当期変動額合計	476,892	319,280	2,941	2,941	322,222
当期末残高	3,801,143	20,354,743	558,400	558,400	20,913,143

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 満期保有目的の債券

償却原価法(定額法)

(2) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

(3) その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びこれに類する組合への出資(金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの)については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

2. たな卸資産の評価基準及び評価方法

(1) 仕掛品

個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を採用しております。

(2) 原材料、貯蔵品

最終仕入原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を採用しております。

3. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物 15～38年

機械及び装置 10年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づいております。

(3) リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

4. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与支給に備えるため、翌事業年度の賞与支給見込額のうち当事業年度に帰属する部分の金額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

(退職給付見込額の期間帰属方法)

退職給付債務の算定に当たり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

(数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法)

過去勤務費用については、その発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(5年)による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(5年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌事業年度から費用処理しております。

5. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっており、控除対象外消費税及び地方消費税は、当事業年度の費用として処理しております。

(貸借対照表関係)

関係会社項目

関係会社に対する金銭債権及び金銭債務(区分掲記したものを除く)は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
短期金銭債権	2,889千円	39,736千円
短期金銭債務	377,366	414,509
長期金銭債権	-	60,000

(損益計算書関係)

1. 関係会社との取引に係るものが次のとおり含まれております。

	前事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当事業年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	7,051千円	11,926千円
外注加工費他	3,643,422	3,848,424
営業取引以外の取引高		
受取利息	-	151
設備賃貸料他	-	960
システム管理料	480	-

2. 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度、当事業年度ともに5%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度、当事業年度ともに95%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当事業年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
給料及び手当	2,594,763千円	2,681,096千円
賞与引当金繰入額	266,888	280,024
退職給付費用	148,865	166,932
減価償却費	125,744	135,133

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式1,215,554千円、関連会社株式633,400千円、前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式833,185千円、関連会社株式633,400千円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
繰延税金資産		
退職給付引当金損金算入限度超過額	379,909千円	406,827千円
役員長期未払金否認額	67,058	67,058
賞与引当金損金算入限度超過額	136,684	143,555
投資有価証券評価損否認額	102,402	99,821
関係会社株式評価損否認額	21,512	21,512
施設利用権評価損否認額	44,877	44,877
その他	234,538	279,098
繰延税金資産小計	986,980	1,062,748
評価性引当額	346,654	343,235
繰延税金資産合計	640,326	719,513
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	207,148	198,895
固定資産圧縮積立金	635,095	622,471
繰延税金負債合計	842,243	821,367
繰延税金負債の純額	201,917	101,854

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
法定実効税率 (調整)	30.6%	法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.6	
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.2	
住民税均等割	0.7	
税額控除	1.7	
過年度法人税等	2.9	
その他	0.0	
税効果会計適用後の法人税等の負担率	32.9	

(企業結合等関係)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：千円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	1,016,718	35,996	460	70,457	981,797	916,025
	構築物	14,958	-	-	3,418	11,540	75,452
	機械及び装置	594,058	118,078	1,336	126,572	584,227	1,185,111
	車両運搬具	255	-	-	88	168	8,234
	工具、器具及び備品	315,771	84,485	1,013	94,704	304,539	599,563
	土地	1,379,367	-	-	-	1,379,367	-
	建設仮勘定	-	127,039	59,839	-	67,200	-
	計	3,321,127	365,597	62,647	295,240	3,328,838	2,784,384
無形固定資産	ソフトウェア	1,766,136	966,114	-	695,141	2,037,110	-
	ソフトウェア仮勘定	186,481	917,311	972,860	-	130,932	-
	その他	6,881	-	-	60	6,821	-
	計	1,959,498	1,883,425	972,860	695,201	2,174,862	-

(注) ソフトウェアの主な増加は、開示実務支援システム等の開発によるものであります。

【引当金明細表】

(単位：千円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	18,305	502	438	18,370
賞与引当金	446,389	468,828	446,389	468,828

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

## 第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで																								
定時株主総会	6月中																								
基準日	3月31日																								
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日																								
1単元の株式数	100株																								
単元未満株式の買取り・売渡し																									
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部																								
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社																								
取次所																									
買取・売渡手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額																								
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし、電子公告によることができない事故その他やむを得ない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL <a href="https://www.pronexus.co.jp/">https://www.pronexus.co.jp/</a>																								
株主に対する特典	<p>毎年3月31日現在における保有年数及び所有株数に応じて下記基準にてQUOカードを贈呈いたします。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>保有年数</th> <th>所有株式数</th> <th>優待内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">1年未満</td> <td>100株以上1,000株未満</td> <td>QUOカード500円分</td> </tr> <tr> <td>1,000株以上</td> <td>QUOカード1,000円分</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">1年以上 3年未満</td> <td>100株以上1,000株未満</td> <td>QUOカード1,000円分</td> </tr> <tr> <td>1,000株以上</td> <td>QUOカード3,000円分</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">3年以上 5年未満</td> <td>100株以上1,000株未満</td> <td>QUOカード1,500円分</td> </tr> <tr> <td>1,000株以上</td> <td>QUOカード5,000円分</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">5年以上</td> <td>100株以上1,000株未満</td> <td>QUOカード2,000円分</td> </tr> <tr> <td>1,000株以上</td> <td>QUOカード7,000円分</td> </tr> </tbody> </table> <p>(注)「保有年数」は、同一の株主番号が株主名簿に継続して記録されている年数を指します。</p>		保有年数	所有株式数	優待内容	1年未満	100株以上1,000株未満	QUOカード500円分	1,000株以上	QUOカード1,000円分	1年以上 3年未満	100株以上1,000株未満	QUOカード1,000円分	1,000株以上	QUOカード3,000円分	3年以上 5年未満	100株以上1,000株未満	QUOカード1,500円分	1,000株以上	QUOカード5,000円分	5年以上	100株以上1,000株未満	QUOカード2,000円分	1,000株以上	QUOカード7,000円分
保有年数	所有株式数	優待内容																							
1年未満	100株以上1,000株未満	QUOカード500円分																							
	1,000株以上	QUOカード1,000円分																							
1年以上 3年未満	100株以上1,000株未満	QUOカード1,000円分																							
	1,000株以上	QUOカード3,000円分																							
3年以上 5年未満	100株以上1,000株未満	QUOカード1,500円分																							
	1,000株以上	QUOカード5,000円分																							
5年以上	100株以上1,000株未満	QUOカード2,000円分																							
	1,000株以上	QUOカード7,000円分																							

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利以外の権利を有しておりません。

## 第7【提出会社の参考情報】

### 1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、親会社等はありません。

### 2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- (1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書  
事業年度(第75期)(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)2019年6月27日関東財務局長に提出
- (2) 有価証券報告書の訂正報告書及び確認書  
事業年度(第75期)(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)の有価証券報告書に係る訂正報告書  
2019年7月2日関東財務局長に提出
- (3) 内部統制報告書及びその添付書類  
2019年6月27日関東財務局長に提出
- (4) 四半期報告書及び確認書  
(第76期第1四半期)(自 2019年4月1日 至 2019年6月30日)2019年8月9日関東財務局長に提出  
(第76期第2四半期)(自 2019年7月1日 至 2019年9月30日)2019年11月14日関東財務局長に提出  
(第76期第3四半期)(自 2019年10月1日 至 2019年12月31日)2020年2月14日関東財務局長に提出
- (5) 臨時報告書  
2019年6月27日関東財務局長に提出  
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)に基づく  
臨時報告書であります。
- (6) 自己株券買付状況報告書  
報告期間(自 2019年6月1日 至 2019年6月30日)2019年7月3日関東財務局長に提出

## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。



独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2020年6月25日

株式会社プロネクサス  
取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

東京事務所

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 三井 勇治 印

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 宇治川 雄士 印

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社プロネクサスの2019年4月1日から2020年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結財政状態計算書、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結持分変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表注記について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」第93条により規定された国際会計基準に準拠して、株式会社プロネクサス及び連結子会社の2020年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、国際会計基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、国際会計基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、国際会計基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

#### < 内部統制監査 >

##### 監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社プロネクサスの2020年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、株式会社プロネクサスが2020年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

##### 監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

##### 内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

##### 内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。

- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

#### 利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

---

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。

## 独立監査人の監査報告書

2020年6月25日

株式会社プロネクサス  
取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

東京事務所

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 三井 勇治 印

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 宇治川 雄士 印

### 監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社プロネクサスの2019年4月1日から2020年3月31日までの第76期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社プロネクサスの2020年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

### 監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

### 財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

### 財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に

注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。

- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- 
- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。